

2〔遺物包含層〕 遺物の出土状況として、石器のチップ・フレーク等はⅡ層に多く、須恵器土師器等はⅠ層に集中している傾向を示すが、明確な区分が認められず、埋設過程の時間経過の差と地形変化及び現在までの人為的な攪乱等にその理由が求められ、特に時間間隔を示すような人為的成層状態には至らなかったと思われる。

第1表	破片	剥片	石鏃	石匙	石筥	搔器	縄文土器	弥生土器	須恵器	土師器	年代不詳
Ⅰ層	18	30	4	2	1	0	36	8	121	29	27
Ⅱ層	239	68	3	2	1	2	14	10	6	3	8
計	257	98	7	4	2	2	50	18	127	32	35

3〔出土遺物〕 縄文時代（石器・土器）、弥生時代（土器）、古代（須恵器・土師器）

(1) 縄文時代（石器・土器）

A：石器（第3図）（第2表）（石鏃7点・石匙4点・石筥2点・搔器2点・その他355点）

a 石鏃（第3図1～7、写真1図1～7）(1)基部が内彎する無茎のもの5点、内1点は未製品である。(2)有茎のもの2点、茎部の形状は異なる。

b 石匙（第3図8～11、写真1図8～11）(1)横形3点、二側縁にのみ細部調整を施したものとそうでないもの2種。つまみ位置で見ると右型・左型がある。未製品1点。(2)縦形1点。

c 石筥（第3図12・13、写真1図12・13）(1)平面形が偏桃状のもの。(2)縦長台形上のもの。全体的に粗い調整で、(1)は剥離面が残り、(2)には一部に剥離面が残っている。

d 搔器状石器（第3図14・15、写真1図14・15）(1)全周に調整が施されている。(2)は2側縁にのみ調整が施されている。どちらも石匙のつまみが欠損したような形状である。

B：土器（第3図17・18、写真2図1・2、第3表）（口縁部資料1点・把手資料1点・その他48点）(1)3図17の外面は磨かれ、内側には鐮状に段がつく。器壁は頸部にかけて薄い。(2)3図18の把手は隆帯部に鎖状の凹凸を有する。(3)4図1は全体的に摩耗していて上端が口縁部であるか判別し難いが一応浅鉢とする。以上は縄文時代中期の資料と思われる。

(2) 弥生時代：土器（第3図19～25・写真2図3～9、第3表）（口縁部資料2点・その他16点）(1)3図19は体部上半の破片で、細い撚糸文上に二重に山形沈線文を施している。(2)3図20～22は同一個体と思われ、複合口縁口唇外面に撚糸施文の後その稜を挟んで刺突列を施している。棒状の工具による抉るような刺突の上下配列の規則性は見られない。頸部には二重の山形沈線が施されている。体上部には平行沈線がR-L原体の細い撚糸文上に施されている。(5)3図25は3図23と同じく小型の壺と思われる。沈線と突起、口唇内面に撚糸圧痕が認められる。

(3) 古代（須恵器・土師器）

A：須恵器（第4図2～4、写真2図11～15・第4表）（復元資料2点、その他数十点）(1)の坏は胎土・ロクロ技法とも良好で薄手に成型されている。(2)4図2は(1)に比して厚手である。(4)4図3の器壁は極めて薄い。肩部に比して口縁部の仕上げは入念である。(5)4図4は複合口縁部から肩部まで褐色で、幾分の光沢も認められる。器壁は一様な厚さでない。



第3図 出土遺物 (S = 1/3)

第2表		図番号	写真番号	出土位置	長さ cm	巾 cm	厚さ cm	重さ g	材	質	備
石 鏃	1	3-1	1-1	Ha118 (II)	3.50	1.20	0.33	1.32	珪 質 泥 岩	有草	
	2	3-2	1-2	Hh103 (II)	2.70	1.95	0.55	1.69	硬 質 泥 岩	無草	
	3	3-3	1-3	Hh106 (I)	2.40	1.50	0.45	1.01	凝 灰 質 硬 質 泥 岩	無草	
	4	3-4	1-4	Gj121 (II)	2.80	1.40	0.35	1.03	珪 質 泥 岩	有草	
	5	3-5	1-5	Jb136 (I)	2.70	1.60	0.45	1.50	凝 灰 質 硬 質 泥 岩	無草	
	6	3-7	1-6	表 探	2.90	1.30	0.50	2.22	凝 灰 質 硬 質 泥 岩	未製品	
石 匙	7	3-6	1-7	〃	3.70	1.60	0.30	1.83	硬 質 泥 岩	無草	
	8	3-8	1-8	Bf27 (表)	5.70	2.80	1.00	13.00	凝 灰 質 硬 質 泥 岩	未製品	
	9	3-9	1-9	Bf27 (II)	3.30	1.40	0.75	3.80	珪 質 泥 岩		
	10	3-10	1-10	Ce15 (II)	6.65	1.90	0.90	9.25	硬 質 泥 岩	破形	
石 瓦	11	3-12	1-11	Hcd12 (I)	5.90	2.15	0.72	7.90	凝 灰 質 硬 質 泥 岩	破あり	
	12	3-12	1-12	Aj30 (表)	6.00	3.70	1.60	27.95	珪 質 泥 岩		
	13	3-13	1-13	Hd118 (II)	8.20	4.10	1.40	52.50	硬 質 泥 岩		
槌 器	14	3-14	1-14	Ig133 (II)	6.50	4.30	0.80	22.70	ホルンフェルス		
	15	3-15	1-15	Ig133 (II)	7.96	2.60	1.30	20.50	硬 質 泥 岩	破あり	

番号	図番号	写真番号	出土位置	器形	破片部位	色	調 土	性	内面(調整等)	外 面 (調整・施文等)	備 考(時期考)	
第3表 縄 文 式 土 器												
1	3-17	2-2	Hcd03 (II)	鉢形	口 縁 部	黄 橙 色	小石等含	磨	き	降 帯	磨き、口唇部降帯	縄文(中期)
2	3-18	2-1	Fh142 (II)	鉢形	体 上 部	黄 橙 色	石英等含	磨	き	磨	磨き、裝飾把手	縄文(中期)
3	4-1	2-10	Aj33	鉢形	-	浅黄橙色	石英等含	磨	き	-	「口縁部突起?」	
第3表 弥 生 式 土 器												
1	3-19	2-3	Hab103 (II)	壺形	体 上 部	にぶい 橙	石英等含	磨	き	L-R 擦糸・沈線(山形)	(谷起式式)	
2	3-20	2-4	Ig133	壺形	体 上 部	赤 褐 色	小石等含	ナ	テ	痕 R-L 擦糸・沈線(山形)	(天王山式)	
2	3-21	2-5	Ig133	壺形	体 上 部	赤 褐 色	小石等含	ナ	テ	痕 R-L 擦糸・沈線(平行)	(天王山式)	
2	3-22	2-6	Ig133	壺形	口 縁 部	赤 褐 色	小石等含	磨	き	R-L 擦糸・沈線・刺突列降帯	(天王山式)	
3	3-23	2-7	Ig133	壺形	体 上 部	浅黄橙色	石英等含	磨	き	上 げ 痕 磨き・L-R 擦糸		
4	3-24	2-8	Jc136 (II)	壺形	体 上 部	黄褐色	石英等含	ナ	テ	痕 L-R 擦糸・磨き・平行沈線	(天王山式)	
5	3-25	2-9	Jc136 (I)	壺形	口 縁 部	赤 褐 色	石英等含	擦	糸	圧 痕 L-R 擦糸・沈線・小突起	(天王山式)	

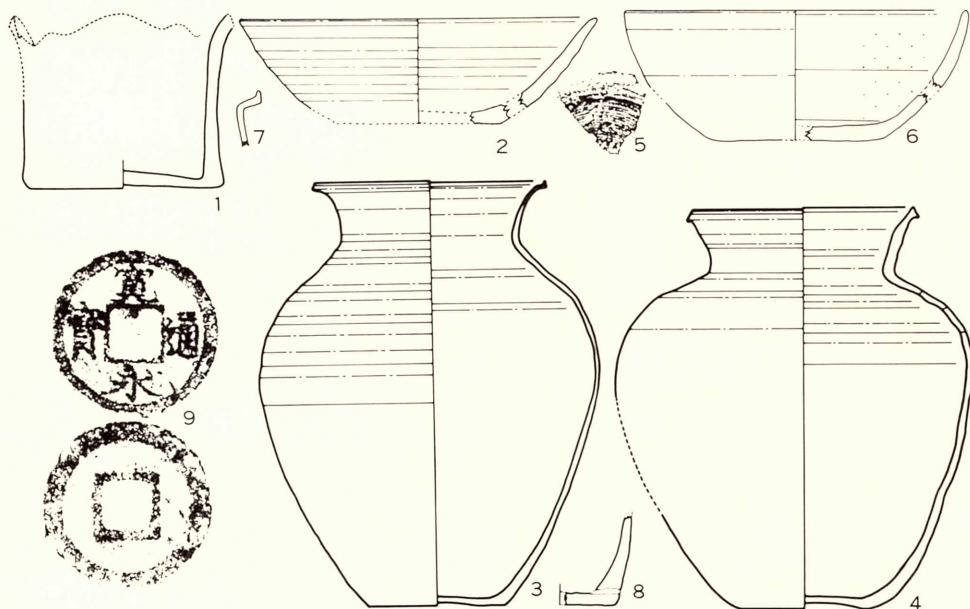
B：土師器（第4図5～8、写真2図16～23、第4表）（口縁部資料3点・底部資料2点・その他27点）(1)は胎土・ロクロ技法・焼成とも良好な内黒坏である。(4)の坏は良質な外見で、にぶい褐色を呈するが断面内部は灰色を呈する。(5)の坏は丸味を帯びた立上がり方をし内彎した口縁を有する。(6)の甕は薄手小型で複合口縁を有し表面は摩耗して調整等不明である。(8)の甕は底の部分に体部を上積みして成型してある。

(4) 備考「近世：古銭（銅銭1点・鉄銭1点 以上表採）(1)4図9の寛永通宝の銅銭は、内部まで腐食が進んでいる。この新寛永の铸造元等は不明である。」

Ⅲ まとめ

1. 調査地において遺構として明確に確認されたものはなく、遺物に於いても完形に近く残存しているのは石器及び須恵器の壺（2点）のみである。
2. 遺物より時代は縄文時代（中期）・弥生時代・古代・近世と多岐に亘る。
3. 遺跡としては遺物包含地の調査区域より更に北西方に延びていると思われる。

第4表	図番号	写真番号	出土位置	口径mm	底径mm	器高mm	成形	調整	等仕	上等	備考(=)
須恵器	1	2-11	Fc115 (I-II)	(14.7)	(6.7)	(4.4)	ロクロ、回転糸切	なし		良好、黄褐色	口縁幾分外反、薄手
	2	2-12	Jcd113 (I-II)	(15.9)	(6.8)	(4.3)	ロクロ、糸切			普通、灰白色	口縁幾分外反、厚手
	3		Hab106	(20.0)	11.7	(35)	一部ロクロ	叩目、縦横ナデ		幾分粗、灰白色	胴径(30)
	4	4-3	Hj03-06	18.7	11.0	34.3	一部ロクロ	縦横ナデ		良好、自然釉	胴径27.6
	5	4-4	Jab124~130	17.6	10.4	32.4	一部ロクロ	叩目、縦横ナデ		良好、褐色光沢	胴径28.8
土師器	1	2-16	Glc30 (I)	(17.6)			ロクロ		内黒(横ナデ)	良好、灰白色	口縁内彎
	2	2-17	Glc30 (I)		(4.6)				内黒	普通	小型
	3	2-18	Hab106 (表)				ロクロ		内黒	普通	体部内彎
	4	4-5	H1113		(7.0)		ロクロ		なし	幾分良好、赤褐色	表面赤焼
	5	2-20-22	Hc118 (II)	(13.4)	(7.0)	(3.5)	ロクロ、蹴切り		内黒(放射状ナデ)	普通	口縁内彎
	6	4-7	Glc30 (I)	(12.4)			ロクロ			(普通)	複合口縁、薄手小型
	7		Ej112				ロクロ			良好、浅黄褐色	体部(壁厚3mm)
	8	4-8	Hab112		(9.4)		ロクロ			普通	底に体部上積み接合



縄文式土器(1:1/3)、須恵器(2:坏1/3、3・4:壺1/6) 土師器(2~7:1/3、8:1/6)、寛永通宝(9:1/1)
第4図 出土遺物

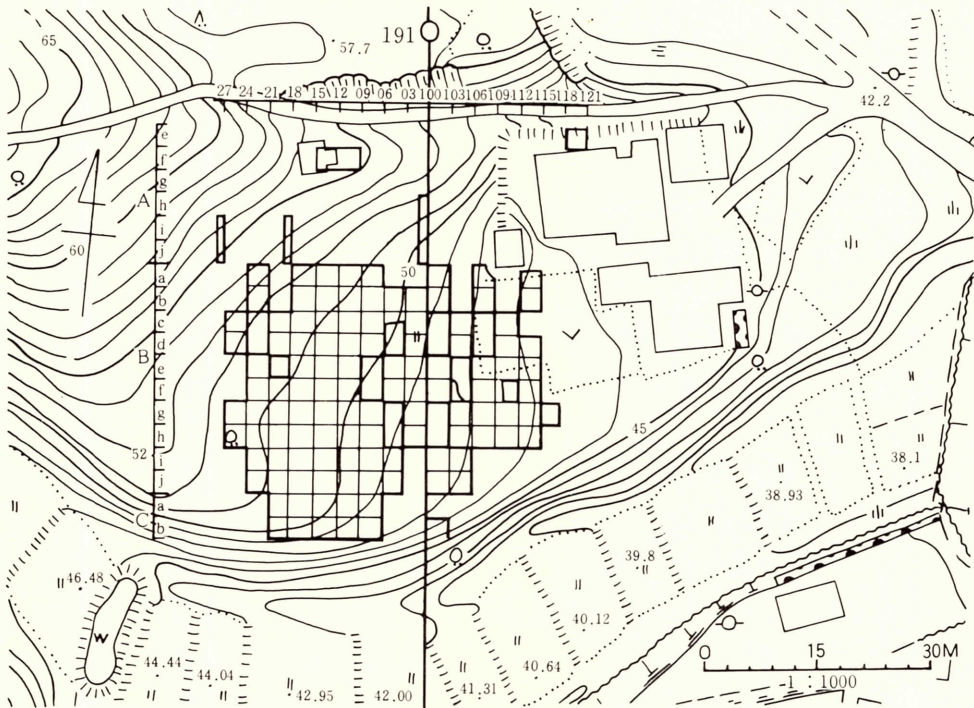
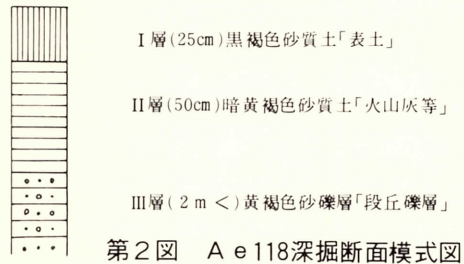
新城遺跡

I 位置と立地 (第1図)

新城遺跡は東北本線前沢駅南西約2.2kmの中位段丘(胆沢段丘上野原面:中川等'63他)東部の緩傾斜突端部にある。北東先端部は崩壊地であり、南部も土砂採取場として人の手が加えられている。西方100mに標高差20mをもって平坦面が広がっている。調査地の標高は55~45mと高低差は大きい。北西方には白鳥川に沿って、合沢A・白鳥永沢・永沢東の各遺跡が、北方約1kmには本調査関連の泊ヶ崎遺跡がある。

II 遺物包含層

1〔基本層序〕(第2図) 段丘形成後、開折作用等を受け層序は場所毎に異なるが、比較的平坦な地区のものを模式的に表わした。調査地南端にてはII層をほぼ欠く。

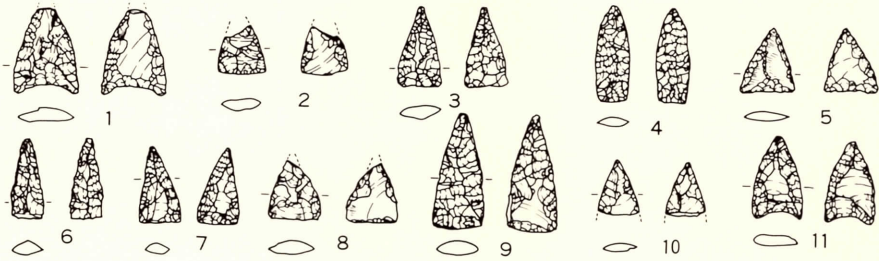


第1図 新城遺跡地形及びグリッド配置図



1~2 : 石斧 3~6 : 石鏃 7~16 : 石匙 17~19 : 石○ 20~39 : 搔器及び削器

第4図 (S ≐ 1/3.2)



第3図 石鏃 (S = 1/2.3)

第2表	図番号	写真番号	出土位置	長さcm	巾cm	厚さcm	重さg	材	備	考
石核	1	-	Bb03-06 I L	10.65	5.80	5.17	367.1	珪質泥岩	磨打痕あり	
	2	-	Bcd18 I L	11.93	7.72	3.08	300.1	珪質泥岩	部分的に成分の偏在あり	
石斧	1	4-1	Bab106 I U	8.00	4.50	2.36	110.8	輝緑凝灰質	磨製・基部調整・先端欠・自然面残	
	2	4-2	Bg15 I L	10.26	4.05	3.43	204.4	凝灰質	磨製・基部欠損	
石篋	1	4-3	Ahij1 レンチ I L	8.55	4.06	1.57	78.6	ホルンフェルス	自然面側は2側辺、片側粗い	
	2	4-4	Bi21 I L	5.87	4.54	1.14	30.4	珪質泥岩	先端欠く・基部不整形	
	3	4-5	Bi100 I L	6.64	3.65	1.32	35.8	珪質泥岩	剥離面内側無調整	
	4	4-6	Cb21 I U	8.66	3.85	1.36	47.2	珪質泥岩	縦長型・片面に自然面残る	
石匙	1	4-7	Bcd21 I L	2.72	3.28	1.07	10.0	珪質泥岩	先端部残・稜をもち	
	2	4-8	Bcd109 I(U)	5.47	2.79	0.55	7.8	珪質泥岩	(右型) 無調整・先端周囲	
	3	4-9	Be18 I(U)	7.91	2.07	0.68	11.0	珪質泥岩	(右型) 全周・先端に2稜・彎曲	
	4	4-10	Bef12 I L	4.13	2.01	0.57	5.7	珪質泥岩	(左型) 下側・稜をつぶす	
	5	4-11	Bf12 I(U)	3.57	2.96	0.91	7.2	硬質泥岩	(右型?) 長辺部欠損側	
	6	4-12	Bg18 I(U)	3.44	3.83	0.56	5.8	珪質泥岩	(右型) つまみ中央・器面彎曲	
	7	4-13	Bh21 I U	2.52	1.74	0.62	3.15	珪質泥岩	(右型?) 先端部のみ・稜をつぶす	
	8	4-14	Bj24 (I U)	5.08	2.84	0.74	11.3	珪質泥岩	(右型) 先端とがる	
	9	4-15	Bj24 (I U)	3.52	1.73	0.46	3.4	珪質泥岩	(左型) 先端欠損	
	10	4-16	Bj24 (I U)	5.44	2.31	0.55	6.3	珪質泥岩	(左型) 稜面は全周	
	11	-	- (I U)	2.67	3.25	0.51	3.2	硬質泥岩	(左型) 下側と先端稜なし	
	12	-	- (I U)	4.50	2.24	0.63	6.15	珪質泥岩	(左型) 稜と先端と下側・彎曲	
石鏃	1	3-1	Bf15 I U	2.63	1.97	0.40	1.9	珪質泥岩	無基・基部内彎	
	2	3-2	Bg18 I U	1.53	1.44	0.32	0.65	凝灰質泥岩	無基・基部外彎	
	3	3-3	Bgh03 I(U)	2.48	1.38	0.30	0.75	珪質泥岩	無基・基部水平	
	4	3-4	Bh21 I(U)	2.94	1.04	0.41	1.1	珪質泥岩	無基・砲弾型	
	5	-	Bi24 I(U)	1.83	1.25	0.22	0.4	珪質泥岩	(先端部残)	
	6	3-6	Bi15 I L	2.47	0.98	0.47	0.9	珪質泥岩	(先端部残) 鏃か?	
	7	3-7	Bi06 I L	2.43	1.29	0.35	1.0	珪質泥岩	無基・基部水平	
	8	3-8	Bj18 (I U)	1.86	1.63	0.94	1.1	珪質泥岩	無基・先端欠損	
	9	3-9	Bi106 I L	3.58	1.54	0.40	2.1	珪質泥岩	無基・先端欠損	
	10	3-10	Bj18 I(U)	1.68	1.28	0.23	0.45	珪質泥岩	(上半部残・大きめ)	
	11	3-11	- (I U)	2.53	1.55	0.37	1.45	珪質泥岩	無基・基部内彎	
	12	3-5	- (I U)	1.95	1.68	0.28	0.8	珪質泥岩	無基・基部水平	
石鏃	1	4-17	Ba15 I L	3.78	3.70	1.16	12.5	珪質泥岩	自然面残存・鏃部短い	
	2	4-18	Bab103 I(U)	2.97	1.84	0.93	3.6	珪質泥岩	自然面残存・未製品	
	3	4-19	Bcd21 (I U)	2.82	1.98	0.64	2.3	珪質泥岩	鏃部欠損? 2次加工	
挿器	1	4-20	Bh09 I(U)	6.14	4.50	1.28	32.2	珪質泥岩	基部不整形・片面二稜	
	2	-	Bi12 (I U)	7.87	5.61	2.41	92.5	珪質泥岩	自然面残存・先端部使用	
削器 (不定形石製器)	1	4-21	Ba56 I(U)	3.40	2.73	0.49	3.7	硬質泥岩	凹部に刃かつけられている	
	2	4-22	Bcd21 I L	3.17	1.70	0.71	3.6	珪質泥岩	石匙先端部鏃形状	
	3	4-23	Bcd109 I(U)	4.48	2.40	0.55	6.0	硬質泥岩	最長辺に細部調整	
	4	4-24	Be18 I L	4.50	2.47	0.93	4.8	珪質泥岩	最長辺に細部調整	
	5	4-25	Be12 I(U)	4.47	3.69	1.17	15.8	凝灰質泥岩	石篋形状	
	6	4-26	Bef106 I(U)	3.59	2.10	0.49	3.1	珪質泥岩	一側縁にのみ使用痕	
	7	4-27	Bef109 I(U)	3.14	2.85	0.94	5.9	硬質泥岩	最長辺以外の3辺に使用痕	
	8	-	Bf21 I(U)	4.44	3.32	1.30	15.2	珪質泥岩	石篋形状・基部に使用痕	
	9	4-28	Bf15 I L	4.31	4.02	0.74	10.6	凝灰質泥岩	二側縁に使用痕	
	10	4-29	Bg21 I(U)	3.43	2.80	0.62	4.7	硬質泥岩	二側縁に使用痕	
	11	4-30	Bg18 I(U)	3.60	2.45	0.52	3.2	珪質泥岩	全周に使用痕	
	12	4-31	Bg18 (I U)	4.73	3.27	1.36	21.9	珪質泥岩	二側縁に使用痕	
	13	4-32	Bgh03 I U	4.02	3.36	0.80	8.0	珪質泥岩	凹部及び長縁に使用痕	
	14	4-33	Bgh112 (I U)	2.43	2.36	0.29	1.9	珪質泥岩	長縁及び最端縁に使用痕	
	15	4-34	Bh18 I L	4.70	3.02	0.74	9.8	珪質泥岩	凸部に使用痕	
	16	4-35	Bh15 I(U)	2.47	2.59	0.77	4.2	珪質泥岩	鏃形状・二側縁に使用痕	
	17	4-36	Bh09 I(U)	3.40	2.20	0.76	4.4	硬質泥岩	二側縁に使用痕	
	18	4-37	Bi21 I L	4.25	3.79	0.72	10.5	珪質泥岩	凸部縁に使用痕	
	19	4-38	Bi21 I L	4.39	2.98	1.18	14.6	珪質泥岩	凸部縁に使用痕	
	20	4-39	Bj21 I L	6.10	2.50	1.58	21.7	珪質泥岩	凸部縁に使用痕	
	21	-	II(U)	5.57	5.51	0.98	18.8	硬質泥岩	最長辺以外に使用痕	
	22	-	(I U)	3.80	2.70	0.70	5.9	珪質泥岩	稜以外に使用痕	
	23	-	(I U)	4.21	3.57	0.93	13.4	珪質泥岩	三支点あり・他縁に使用痕	

B：土器（第3表・第5図1～5・写真2図1～5・口縁資料4点その他13点） 前述の通り出土数が一番少なく保存状態も良くない。図示したものは口縁部と体部1点であるが、5図1は体上部に綾絡文が2条～3条水平に施され、口縁部は写真2図1の様に山形部に隆帯が貼付され、その下部に波状に沈線様の文様が施される。2の5図2は磨きの口縁ではあるが波状の文様が小篋様の工具にて施され前出のものとの共通点となっている。縄文は不明確ながら表面右下の所に見られる。3の5図3は胎土に繊維を含む事や推定される器形等より縄文時代の前期遺物と思われる。4は1や2と同じ中期の一つの特徴である調整隆線文が施されている。5は綾絡文が僅かに確認できる事から中期の仲間に区分しておく。いずれにしても出土点数が少ないので大略の感を免がれ得ないが時間的に見れば長い期間の隔たりを持つ遺物であり、他の関連破片の出土が望まれる処であった。

第3表	図番号	写真番号	出土位置	器形	破片部位	色	調土	性	内面(調整等)	外面(調整・施文等)	備考	
縄文式土器	1	5-1	-	Bd12	IL	鉢形	体上部	橙黄色	石英目立つ	ナデ痕	L-ナデ綾絡文・後ナデ	(山形口縁 口唇部貼付)
	2	5-2	2	Be18	II	口縁部	口縁部	橙黄色	石英目立つ	横ナデ痕	ナデの後山形沈線(粗)	(小篋状工具)
	3	5-3	2	Be121	IL	口縁部	口縁部	橙黄色	石英目立つ	横ナデ痕	R-L施文・頸部沈線(?)	幾分磨耗
	4	5-4	2	Bi21	IL	口縁部	口縁部	にふい橙黄色	石英目立つ	不明	山形口縁・調整隆線文	(片口部?)
	5	5-5	2	Bi18	IL	口縁部	口縁部	浅黄橙黄色	石英目立つ	磨き	磨き・綾絡文	



第5図 縄文式土器 (S ≒ 1/4)

(2) 古代（土師器395点・須恵器21点） 破片が大部分であるだけに土師器の個体数は他の時代のそれよりいかに多いかわかる。出土資料の内、同一個体同定作業を経た、ある程度保存状態の良いものを図示した。

A：土師器（坏321点・甕74点） 出土点数に於いては坏が圧倒的に多いが甕の口縁部は出土数に比して多い。復元されたものは7点あるが、坏以外は器の1部を欠いている。表には一括しなかったが他に図上復元を試みたものが数点ある。出土状況に関しては西側に多く南東方向に増加する傾向がある事がいえる。各層出土物で接合する物も数点確認できる。

a坏（ロクロ成形を行ったものばかりである。第1表に示した通り口縁部と底部に区分してその内容を見たが、口縁部については表に示した程度にとどめ、底部について黒色処理の具合と切離し調整の有無によって細分し表に示した。

- ①黒色処理を施し調整のないもの（50点・表に示したものの15点・第4表及び第6表・第6図）
 - ②黒色処理を施し調整のあるもの（25点・表に示したものの7点・第4表・第6図23～29）
 - ③黒色処理を施していないもの（58点・表に示したものの14点・第5・6表・第6図）
- b甕（登録点数74点・ロクロ成形の確認されたもの17点・部分的なものも多く写真にて示す。）

新城遺跡

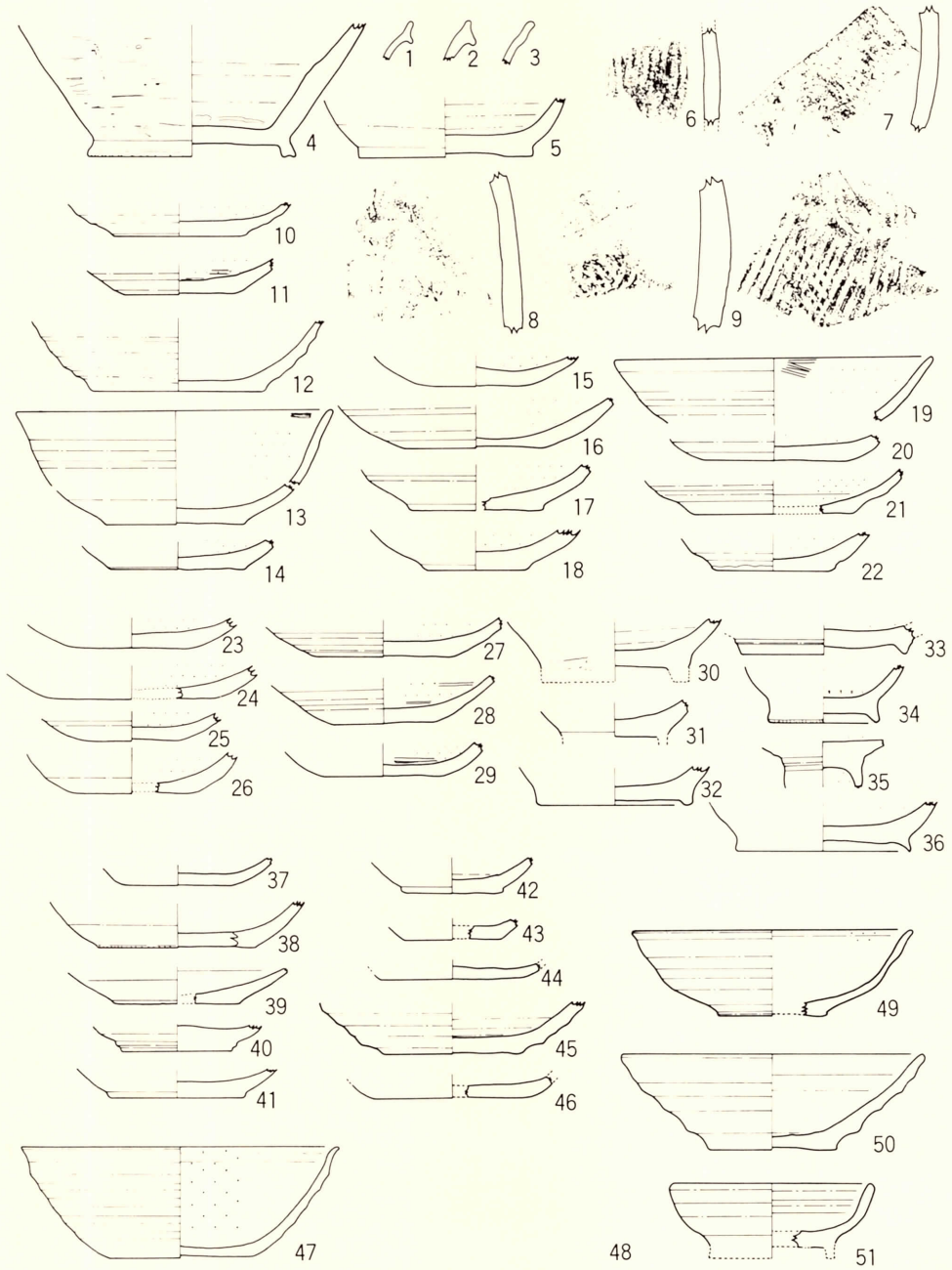
B：須恵器（口縁部資料4点総計21点・第6表・第6図1～9・写真2図6～15） 縄文式土器の次に出土数が少ないが破片個々の保存状況は良好である。口縁部資料の6図3のものは壺口縁としたが甕の口縁部に近いかもしれない。他の口縁についても底部との対応を考えてみたが同一個体と断定できなかった。1の坏は幾分軟質である。胎土中に石綿様の小繊維を含むがこれと類似の物質は本調査関連鈴ヶ沢遺跡の土師器の坏にも認められる。

第4表	図番号	写真番号	出土位置	遺存状態	遺存部量cm	成形等	調整等	胎土・仕上げ等	備考 (cm)は推定値
(轆轤土・無調整坏器内黒)	1	6-10	2-16 Ba12	Ⅱ 底部2/3	5.7	ロクロ・回転系切	なし	幾分精・褐色・内黒	(放射状)
	2	6-11	2-17 Bb18	Ⅱ 底部1/2	6.0	ロクロ・回転系切	なし	幾分精・にぶい黄褐色	(内黒-水平)
	3	6-12	2-18 Bb03.06	I 底部1/4	(6.0)	ロクロ・磨耗	なし	幾分精・黄褐色	
	4	6-13	2-19 Bb115	Ⅱ 底部4/5	6.0	ロクロ・回転系切	なし	幾分精・にぶい黄褐色	(内黒-同心円状)
	5	6-14	2-20 Be18	I 底部1/3	(6.0)	ロクロ・磨耗	なし	幾分精・褐色・内黒	
	6	6-15	2-21 Be15	ⅠL 底部1/4	(5.0)	ロクロ・回転系切	なし	幾分精・にぶい黄褐色	(内黒)
	7	6-16	2-22 Be15	ⅠL 底部2/3	(5.8)	ロクロ・回転系切	なし	幾分精・にぶい黄褐色	(内黒)
	8	6-17	2-23 Be12	ⅠL 底部1/4	(6.4)	ロクロ・回転系切	なし	幾分精・にぶい黄褐色	(内黒6-45類似(石英含む))
	9	6-18	2-25 Bf18	ⅡU 底部1/2	(4.4)	ロクロ・回転系切	なし	幾分精・浅黄褐色	(内黒(石英含む))
	10	6-09*20	2-26 Bf12	ⅠL 底部1/3	(6.2)	ロクロ・回転系切	なし	幾分精・褐色	(内黒-放射状)
	11	6-21	2-27 Bb18	Ⅱ 底部1/8	(7.0)	ロクロ・回転系切	なし	普・明赤褐色	(内黒-痕跡(積上げ痕?))
	12	6-22	2-28 Bb15	I 底部1/4	(5.4)	ロクロ・回転系切	なし	普・明赤褐色	(内黒-痕跡(積上げ痕?))
土師器(轆轤土・調整坏器内黒)	1	6-23	2-29 Bb03.06	ⅠL 底部1/3	(5.4)	ロクロ・回転系切	荒削り	粗・にぶい黄褐色	(内黒)
	2	6-24	2-30 Bf12	ⅠL 底部1/5	(7.4)	ロクロ・回転系切	荒削り	幾分精・にぶい褐色	(内黒)
	3	6-25	2-31 Bf12	ⅠL 底部1/4	(4.2)	ロクロ・回転系切	荒削り	幾分精・にぶい褐色	(内黒(B上出土と接合))
	4	6-26	2-32 Bf12	ⅠL 底部1/2	(5.4)	ロクロ・回転系切	荒削り	普・にぶい褐色	(内黒(磨耗))
	5	6-27	2-33 BgH112	I 底部1/4	(6.2)	ロクロ・	荒削り	精・にぶい褐色	(内黒-放射同心円状)
	6	6-28	2-34 Bf12	ⅠL 底部3/5	(4.8)	ロクロ・	荒削り	精・にぶい褐色	(内黒-放射同心円状)
	7	6-29	2-35 Bf100	ⅠL 底部3/5	(5.4)	ロクロ・	荒削り	幾分精・にぶい黄褐色	(内黒-同心円状)
土台付器	1	6-30	3-38 Bc103	I 底部1/1	6.4	ロクロ・回転系切	-	普・にぶい黄褐色	
	2	6-31	3-39 Bg18	I 底部1/1	4.4	ロクロ・	-	粗・浅黄褐色	(磨耗)
	3	6-32	3-40 Bg103	ⅠL 底部1/1	6.9	ロクロ・回転系切	-	普・褐色	(内黒(系底))
	4	6-33	3-41 BgH115	ⅠL 底部1/4	(8.0)	ロクロ・回転系切	荒削り	幾分精・にぶい褐色	(内黒(系底))
	5	6-34	3-42 Bb112	ⅠL 底部1/1	4.6	ロクロ・回転系切	-	普・にぶい黄褐色	(系底)
	6	6-35	3-44 Bb112	ⅠL 底部1/1	(3.2)	-	-	精・暗灰色	(内黒)
	7	6-36	3-45 Ca09	ⅠL 底部1/2	(7.0)	ロクロ・回転系切	荒削り	幾分精・にぶい褐色	(内黒(鉢?))

第5表	図番号	写真番号	出土地	区別	遺存状態	遺存部量cm	胎土色	調整等	備考(成形・調整・形態・含有物・その他)(cm)は推定値
(轆轤土・無調整坏器非内黒)	1	6-37	2-36 Bcd 103	ⅠL	体底部1/2	(5.0)	普 浅黄褐色	普	底体境界不明瞭・石英目立つ・2次加熱痕
	2	6-38	2-37 Bcd 103	Ⅱ	体底部1/8	(6.9)	普 明赤褐色	普	内部磨き入念・石英目立つ・2次加熱痕
	3	6-39	2-38 Bcd 109	Ⅱ	体底部1/8	(5.4)	粗 褐色	不良	底中央薄い・石英目立つ
	4	-	2-39 Be 24	I	底部1/8	(6.0)	普 にぶい褐色	普	底中央厚い・石英目立つ・糸引痕
	5	-	2-40 Be 18	I	底部 1	4.4	普 浅黄褐色	普	底中央厚い・石英目立つ・底体境界不明瞭
	6	6-40	2-41 Be 15	I	底部1/3	(5.0)	普 浅黄褐色	普	底中央厚い・石英目立つ・底体境界不明瞭
	7	6-41	2-42 Bef 112	I	体底部1/8	(6.0)	普 淡赤褐色	普	磨き幾分入念・境界不明瞭
	8	6-42	2-43 Bf 12	I	体底部1/10	(4.4)	普 灰白色	普	内面貼付部無調整・底体境界不明瞭
	9	6-43	2-44 Bf 12	I	体底部1/8	(3.9)	普 にぶい褐色	普	石英含む 境界不明瞭
	10	6-44	2-45 Bf 12	ⅠL	底部1/2	(6.4)	良 浅黄褐色	普	同心円状磨き
	11	6-46	2-46 Ca 21	I	底部1/4	(7.0)	普 にぶい褐色	不良	内面剝離

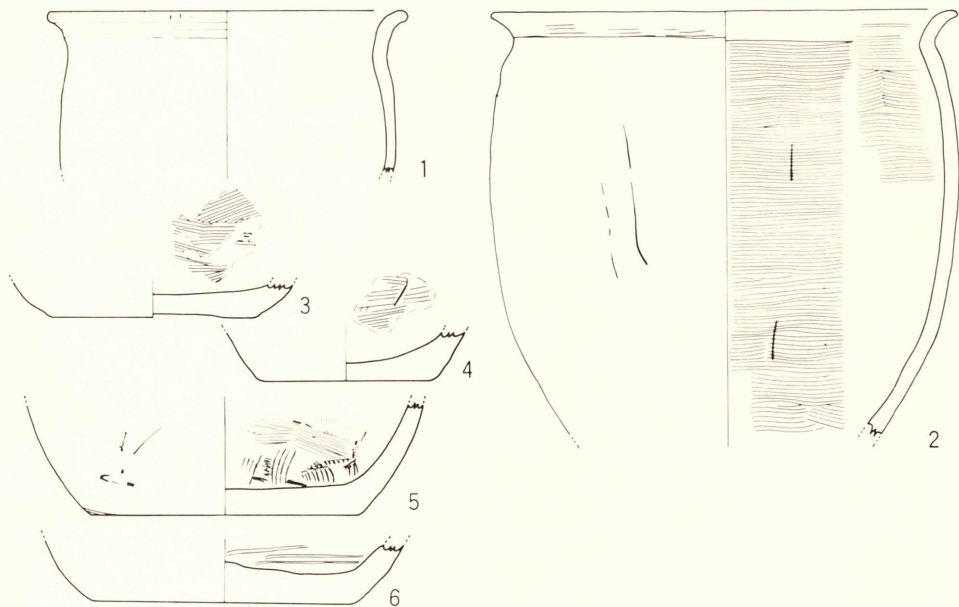
第6表	図番号	写真番号	出土位置	遺存状態	口径cm	底径cm	器高cm	成形等	調整等	胎土・仕上げ等	備考 (cm)は推定値
土坏	1	6-47	3-46 Bd15	ⅠL	3/5 (14.0)	(6.3)	4.9	ロクロ・回転系切	なし	幾分精・にぶい褐色	内黒・口縁反
	2	6-48	3-47 Bd15	I	1/4 (13.5)	(5.7)	4.8	ロクロ・回転系切	なし	粗・浅黄褐色	直口・巻上げ痕?
	3	6-49	3-48 B121	ⅠL	3/5 (12.4)	(4.8)	3.7	ロクロ・回転系切	なし	幾分粗・浅黄褐色	幾分外反・黒斑有り・雲母含む
	4	6-50	3-49 B112	ⅡU	1/2 (13.4)	(5.6)	4.2	ロクロ・回転系切	なし	普・褐色	直口・巻上げ痕?
	5	6-51	3-43 BgH115-h1121L	1/3	(8.4)	(4.4)	(3.0)	ロクロ	-	全体磨き(馬黒)	幾分粗(淡黄色)
土台付器	1	7-1	3-1 Ah112	ⅠL	(15.0)	-	-	-	-	粗 褐色	台穴粗・処理粗雑
	2	7-2	3-37 Bb18	Ⅱ	-	-	-	-	-	粗 褐色	口縁反・同種破片朱塗り

第7表	図番号	写真番号	出土位置	遺存状態	遺存部量cm	成形等	調整等	胎土・仕上げ等	備考 (cm)は推定値		
須恵器	1	-	2-6 Bb21	I	口体部1/5	(11.8)	ロクロ	-	普・灰白色	(石綿状の物含む)	
	2	-	-	Bb21	I	体部1/10	-	ロクロ	-	普・にぶい黄褐色	
	3	6-1	2-7 Bd15	I	口縁部小片	(11.0)	ロクロ	-	普・灰オリーブ色	複合口縁	
	4	6-2	2-8 Be12	ⅠL	口縁部小片	(18.0)	ロクロ	-	普・灰褐色	内面自然釉	
	5	6-3	2-9 Bb21	I	口縁部小片	-	ロクロ	-	普・灰黄褐色	内面自然釉	
	6	6-6.8	(2-13) Bb18	ⅡU	体部10片	-	(印込)	-	普・灰黄色	内面自然釉	
	7	-	-	-	ⅡU	底体部2片	-	-	刷 麗ナデ・指痕	普・褐灰色	0.6-0.8cm厚
	8	6-9	2-15	-	体部3片	-	(印込)内外	-	ナデ付	普・褐色	1.4cm厚
	9	6-7	2-14	-	体部1片	-	(印込)	-	ナデ付・指痕	普・灰色	粘着付着
	10	-	2-12	-	ⅠL 肩部1/10	-	ロクロ	-	(ロクロ痕)	普・灰褐色	外面自然釉
	11	6-4	2-10	Bd15	ⅠL	底部1/5	(9.0)	ロクロ・回転系切	横ナデ	普・黄灰色	(系底)
	12	6-5	2-11	Be12	ⅠL	底部1/5	7.8	ロクロ・回転系切	-	普・灰黄色	自然釉



1～9：須恵器 10～22：土師器環（内黒無調整） 23～29：土師器環（内黒調整） 30～36
：土師器（台付） 37～46：土師器環（非内黒） 47～51：土師器（復元土器）

第6図 (S ≐ 1/3)



第7図 土師器甕復元土器及び底部 (S ≐ 1/3)

まとめ

1. 今回の調査に於いては遺構として明確に認定されるものは発見できなかった。
2. 発見された遺物の状況より単層の遺物包含層が確認された。
3. 遺物により示される年代は、石器より縄文時代、土器より縄文時代前期中期・古代奈良平安時代となる。
4. 調査範囲外との関連については南側平坦部及び標高差はあるが西側の平坦面に集落の形成は充分に考えられ、それらへの中継部として位置づけが考えられる。但しこの事は前述の各時代に於ける事が考慮されなければならない。

徳 沢 一 里 塚 遺 跡

I 位置と地形

徳沢一里塚は、前沢町の南端、国道4号線の西側約200mの所を南北に走る旧道跡（大字白鳥字徳沢一番地）に所在し、国鉄東北本線前沢駅より、南南西約2kmに位置している。

塚は、西から東にのびる標高70～60mの丘陵地形（一首坂段丘面）の開析された小谷地をほとんど傾斜地に、一対で立地している。この谷地が、旧道跡で、近世幕藩体制以来の往還路であった「奥州道中」跡である。しかし、現国道（前沢～衣川村瀬原）が、昭和初期になって開通して以来、道路としての機能を失い、現状は、灌漑用水溜池がつくられ、開田・畑地・原野と変貌している。（第1図）

II 一里塚の規模と構造

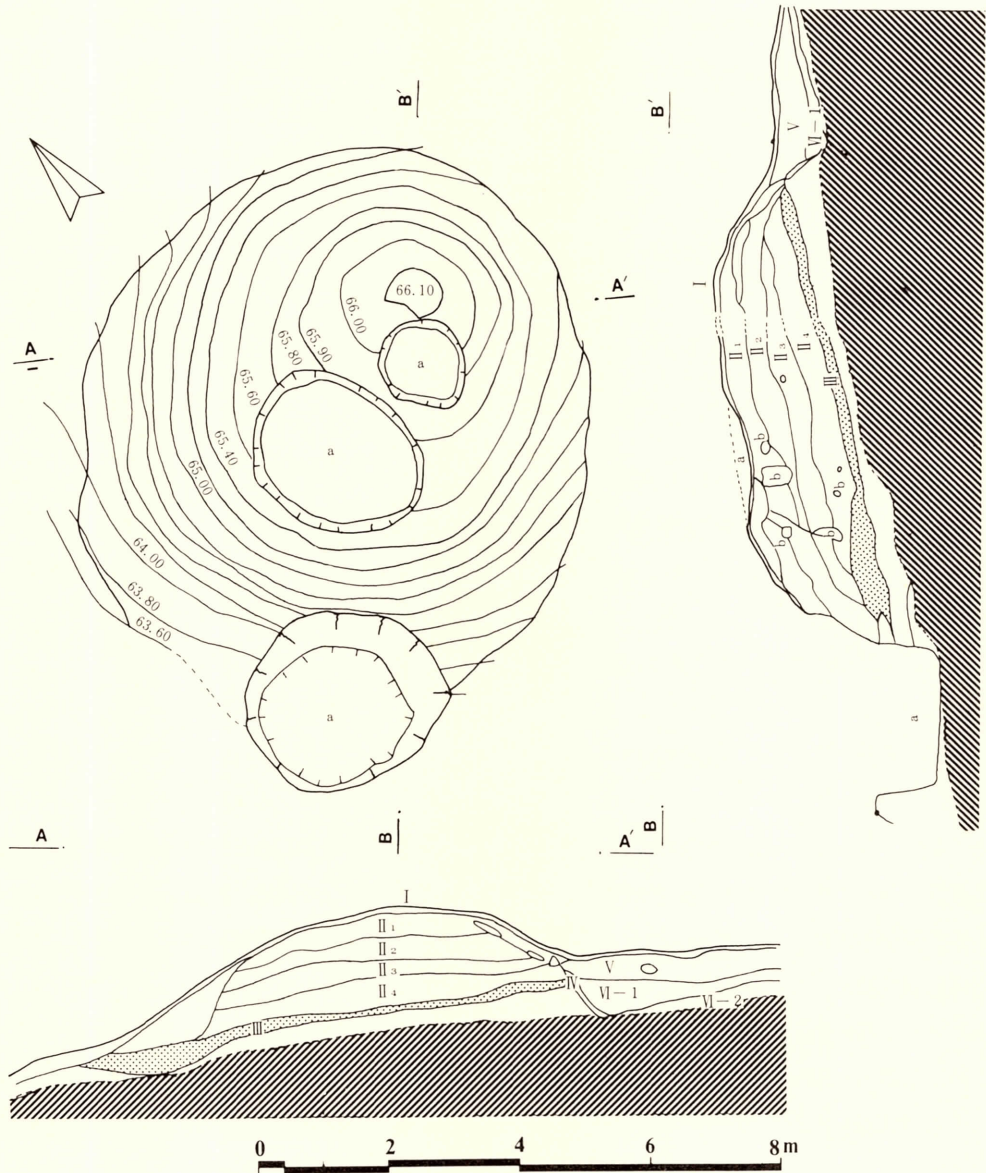
旧道をはさんで築造されている一対の塚のうち、東側のものを1号マウンド、西側のものを2号マウンドと名付けた。このうち、直接調査の対象としたのは、東北自動車道の路線敷地内に入る1号マウンドであり、その関連で、路線外ではあるが2号マウンドについても、表面観察、実測等の調査を実施した。

これらの調査をすすめるにあたっては、東北自動車道の中心杭STA180+60とSTA181+00を選定し、両点を結ぶ直線と直交する線を基準とし、STA180+60を原点として、その位置関係を記録した。

(1) 1号マウンド（東側塚）……第2図・図版1

路線内のため伐採された山林地の、標高65mの傾斜面に築造されている。平面形は、おおむね円形にちかく、基底部径が7m、高さが1.5mの饅頭形の形状を呈している。マウンドには、松などの樹木の切り株の外に、頂上部に2か所・南側裾部に1か所の抜根跡が存するが、マウンド本体への損傷はあまりなく、いずれも松の抜根跡と観察されている。

調査は マウンドの規模と築造方法・伴出遺物の有無等を確認するため、四分法による調査方法で実施した。



第2図 1号塚実測図

調査の結果、マウンドは 旧地表面にあたる基底部周縁を傾斜地上方から掘り込んで、基盤をかため、その上に4層にわたって盛土（Ⅱ1～4層）をし、更に、盛土周縁裾部には、これらを包み込むように積土（Ⅱ-5層）をしていることが確認された。

盛土は

Ⅱ-1層	明褐色粘土質混土	しまりがあり、粘性は中程度で、粒子は細い。
Ⅱ-2層	明黄褐色粘土質混土	全体に橙色の岩状粘土（5～15㎝）が密に入っており、固くしまっている。
Ⅱ-3層	暗褐色粘土質混土	主に橙色の粘土の小ブロックでできているが、一部に暗褐色土が混入している。
Ⅱ-4層	にぶい黄褐色粘土質混土	たくさん小さい粒子の粘土ブロックが入っている。しまり・粘性ともに強い。
Ⅱ-5層	暗褐色粘土質混土	かなりしまっている。粘性は中である。

以上の5層からなり、これらの土は、マウンド全体から見た場合に、所謂、版築等による水平段状積みのような緻密な規則性がみられないが、おおむね4段階にわたって土塊を盛り、更に、これらの盛土を包み込むように裾部に、土くずれを防ぐ土留めの積土をして塚丘が築造されている。

なお、精査の結果、伴出遺物（炭等も含む）は、一切検出されなかった。

(2) 2号マウンド（西側塚） ……図版1

2号マウンドは、頂上部が欠損し、更に、東側半分は、隣接する灌漑用水溜池の堤防構築等に使用されたため、大巾に土取りされ、原形が著しく破壊されている。したがって、現状は、平面形が半円形で、基底部径が7m、高さが1.2mとなっている。原形残存部からみて、形状は饅頭形であることがわかる。

マウンドの築造方法は、露出している断面から観察して、旧地表面を掘り込んで基盤をかため、その上に盛土をしていることが判明し、盛土の現状も、ほぼ、1号マウンドと同様であることが認められた。

Ⅲ まとめと考察

(1) 形状について

塚名	形状	平面形	基底部径	高さ	備考
1号マウンド（東側塚）	饅頭形	ほぼ円形	7m	1.5m	頂上部に松の枝根跡あり。
2号マウンド（西側塚）	現状は同上の半分	現状は同上の半分	7m	1.2m	土取り等による破壊が著しい。

おおむね円形に近いプランということは、原形が方形であった可能性も高い。

もともと一里塚は、五間四方の方形に築造されることになっているが、実際には、その築造構造より、年月の経過にしたがって風雨等によって高さを減じながら、四隅のコーナー部分の盛土が流欠して、円形に近い饅頭形の形状に変形していくものと考えられ、たびたびの補修がなされてきているものと推定される。

(2) 築造方法について

1号マウンド	マウンドは、旧地表面にあたる基底部周縁を掘り込んで基盤がためをし、その上に4層にわたって盛土をし、更にこれらを包み込むように盛土周縁裾部に積土をしている。
2号マウンド	マウンドは、旧地表面を掘り込んで基盤をかため、その上に1号マウンド同様の盛土、積土が認められた。

ほぼ、同一の築造方法であることがわかる。

(3) 徳沢一里塚付近における奥州道中の道路幅について

<マウンド間の距離>

- ① マウンドの中心から中心まで ……35m
- ② マウンド裾部から裾部まで ……27m

旧道跡は、溜池・開田・畑地等に変貌し、原形幅を正確に知ることはできないが、塚間の距離から勘案して、道幅三間は充分にとれ、拡幅・改修の工事がなされていることが想像される。

(4) 築造年代について

一里塚は、街道往還の里程表示のための塚である。一般に、將軍徳川家康の命を受けた右大将秀忠が、東海・東山・北陸の諸道を修理し、一里ごとに敷幅五間の塚を道の両側に相対して築かせ、その上に、榎・松・杉などを植えさせたといわれている。『徳川禁令考』は慶長9年(1604)2月4日・「諸海道ニ一里塚を築く事」と記し、また、『徳川実記』の「東照宮御実紀」慶長9年2月4日条には、「右大将殿の命として、諸国街道一里毎に塚(世に一里塚といふ)を築かしめられ、街道の左右に松を植えしめらる」とあり、さらに同年5月条の末尾にも、「是月、先に右大将殿より命ぜられたる諸国塚。ことごとく成功す」とある。これらの記述が正しいとすれば、諸国の一里塚は、慶長9年2月に徳川秀忠の命によって築造が開始され、同年5月に完成したことになる。

しかし一方、『当代記』には、「慶長9年8月、当月中、関東従右大将秀忠公 諸国道路可作之由使相上、広サ五間也、一里塚五間四方也、関東奥州迄右之通ナリ」ともあり、先きの『徳川禁令考』の末尾にも、『当代記』と同様な記事がみられるので、一里塚の築造開始は慶長9年8月ということになる。

したがって、慶長9年に幕府が一里塚の築造命令を諸国に出したことは確実であるが、

その着手および完成の月日については、まだ、明らかになっそいない。

通説によれば、県内を南北に走る奥州街道の一里塚は、慶長9年(1604)に築造されたと考えられているが、おそくとも慶長15年5月には完成したものとみなされている。

徳沢一里塚は、元禄12年(1699)の「仙台藩御領分絵図」(仙台市斉藤報恩会蔵)に明記されている(図版1)外、盛岡藩清水秋全が藩主南部利視の命によって、寛延年間(1748-1751)に描いたといわれる江戸日本橋より盛岡城下までの道中・宿駅を描いた『増補行程記』(盛岡公民館蔵)にのっており(図版1)、原図砥草長根の右端にみえ、一対の塚の上には、一本の杉の木が植えられている。江戸時代中期の情景を知る貴重な資料である。

また、大正11年10月に県内一斉に調査された一里塚調査の中に、大正11年11月1日付けで、胆沢郡長が岩手県内務部長あてに回報した前沢町分に

「一、名称：一里塚

二、所在地町村大字地番名

前沢町大字白鳥字徳沢一番地

三、地目反別

原野 4坪

四、所有者住所氏名

前沢町地内 (衣川村・平泉村)

五、形状寸尺高等

高サ一間半 饅頭形ニシテ頂上ニ松一本アリシモ三年前に枯死ス

六、現状：放任サレタル俣ニシテ別ニ破壊シテイズ

七、由来伝説：旧国道筋ノ塚ナリト伝ヘラル

八、管理保存の方法： ナシ

」

(岩手県文書大正11～15「史蹟名勝天然記念物」)

と見えている。「増補行程記」によれば、徳沢一里塚のみならず、仙台藩領域の一里塚の樹木は殆んど杉であるが、ここでは松の木一本が植えられており、今回の調査結果とも合致する。

また、大正年間には、すでに「旧道筋ノ塚ナリト伝ヘラル」とあるごとく、すでに旧道は衰退していることを示し、その徴候は、はやくも明治8年6月の水沢県にみるような、一里塚の撤去、ならびに塚上樹木の払下げの例でもわかるように、国県道路線の変更により、あるいは財源取得の名目によって幾度か払下げられ、往時の景観を変じながら衰退の過程をたどっていくのである。

北館遺跡、伝大手門遺跡

I 遺跡の立地と層序

本遺跡は福原面相当の中位段丘最下段に位置している。北側に隣接する東裏遺跡は南都田面相当の低位段丘上にあり、縄文晩期の遺跡である。地形や時期については差があるものの、基盤層の起伏や溝状地形内の遺物包含層等の形成過程については、ほぼ同様の経過を経てきたものであろう。段丘端の東側は衣川が流れ、増水による削平、溢水による氾濫、河道の変化等の影響下にあった。本遺跡の南半部西側に小成沢があり、東の衣川と合わせて流水による削平から、小松柵擬定地、伝大手門遺跡を含めた当段丘は、細長くのびた形状を示している。調査にあたっては、宅地のタタキによる攪乱地域を除いて、グリット設定による平面発掘を実施した。

調査地の基盤となる層は波打っており、その上位にある堆積層もまた少なからず影響を受け、場所によっては異なる部分もあるが、基本的には次のようになる。

Ia 黒褐色土 耕作土（畑、水田）

Ib 暗褐色土 粘性あり、砂質土がブロック状に混入し、1～2cm大の小礫あり、耕作の際の攪乱が及ぶ

II 暗褐色シルト質土 粘性あり、しまりも良い、遺物を含む

IIIa 褐色シルト 粘性しまりあり、基盤層

IIIb 褐色粗砂土 下部は黒褐色を呈す部分もある

IV 礫層

IVの礫層は、前述の如く起伏して連なるため、耕作土のすぐ下に露出する部分もあり、この場合、III層はほとんどみられない。したがって、III層の厚さは一様ではなく、礫層に整合する形である場合は、それと同様起伏に富み、それにもまして更に凹凸が激しい。出土する土器も水に洗われた痕跡を残す例がみられ、流水等による攪乱を受けた結果の証左でもあろう。このことは、遺物のあり方や礫の混入の仕方等の観点から見れば、II層にあっても同様であり、本遺跡の基本層における遺物包含層たる同層の形成にあっても、その過程では水力等による攪乱を受けていたものと推察される。また基盤礫層の起伏によって、落ち込み部分は更に特有の堆積土で覆われることになるが、その中のある層が本遺跡内の主たる遺物包含層として把握される。具体的には、FGブロック落ち込み遺構である。この場合の包含層は、南北に蛇行する溝状地形の中に形成されている。本遺跡では、II層とIII層が混合して堆積した部分が各所に見られ、検出された遺構毎の層序的観察からすれば、上面から数えて第3番目の層に遺物包含層が形成されている場合が多い。

II 検出された遺構と遺物

本遺跡内では、南半部（F-J区）に古代の遺構があり、竪穴住居跡2、落ち込み遺構（遺物包含層）、溝、焼土ピット、ピット群遺構、土壇群及び石組遺構が検出された。北半部（A-E区）では、近世の建物跡や塀跡をはじめ、溝、土壇、石敷遺構、池跡、竈遺構、井戸跡が検出されている。以下それぞれの検出遺構について遺物も含めて記述するが、出土遺物に関する検討は、「III 出土遺物」の項で詳述する。

1 南半部（F-J区）の検出遺構

(1) 第1号竪穴住居跡 第4図 図版4

a、(遺構の確認)；南北基準線より西側のFh06地点に検出された。ほぼ方形を呈するが、南・東壁の正確なラインは砂まじりの礫のため不明な部分もある。なお、遺構確認面は地山面であるが、直下には礫層が堆積しており、前述の如く露出している部分もある。

b、(重複・増改築)；なし。

c、(平面形・方向)；東西約3.6m、南北約3.6mの方形を呈すが、既述の如く理由から何れの場合も推定の長さである。

コーナーは角ばらずに丸味をもっている。また、南北方向の軸線はやや西にふれる。

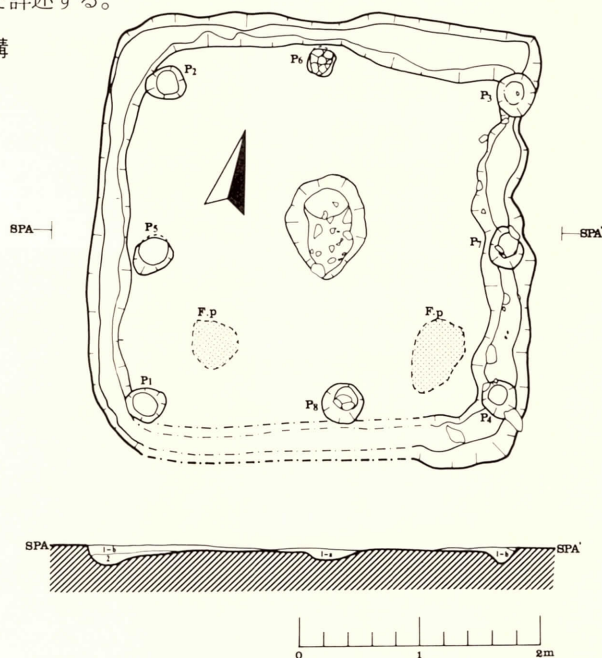
d、(覆土)；大別二層に分かれるが、断面図に正確に記入されていないため、詳細については不明な部分もある。層位については下記の通りである。

I-a-暗褐色土。粘性弱く、しまり若干ある。I-bに比して混合物が少ない。炭化物若干含む。

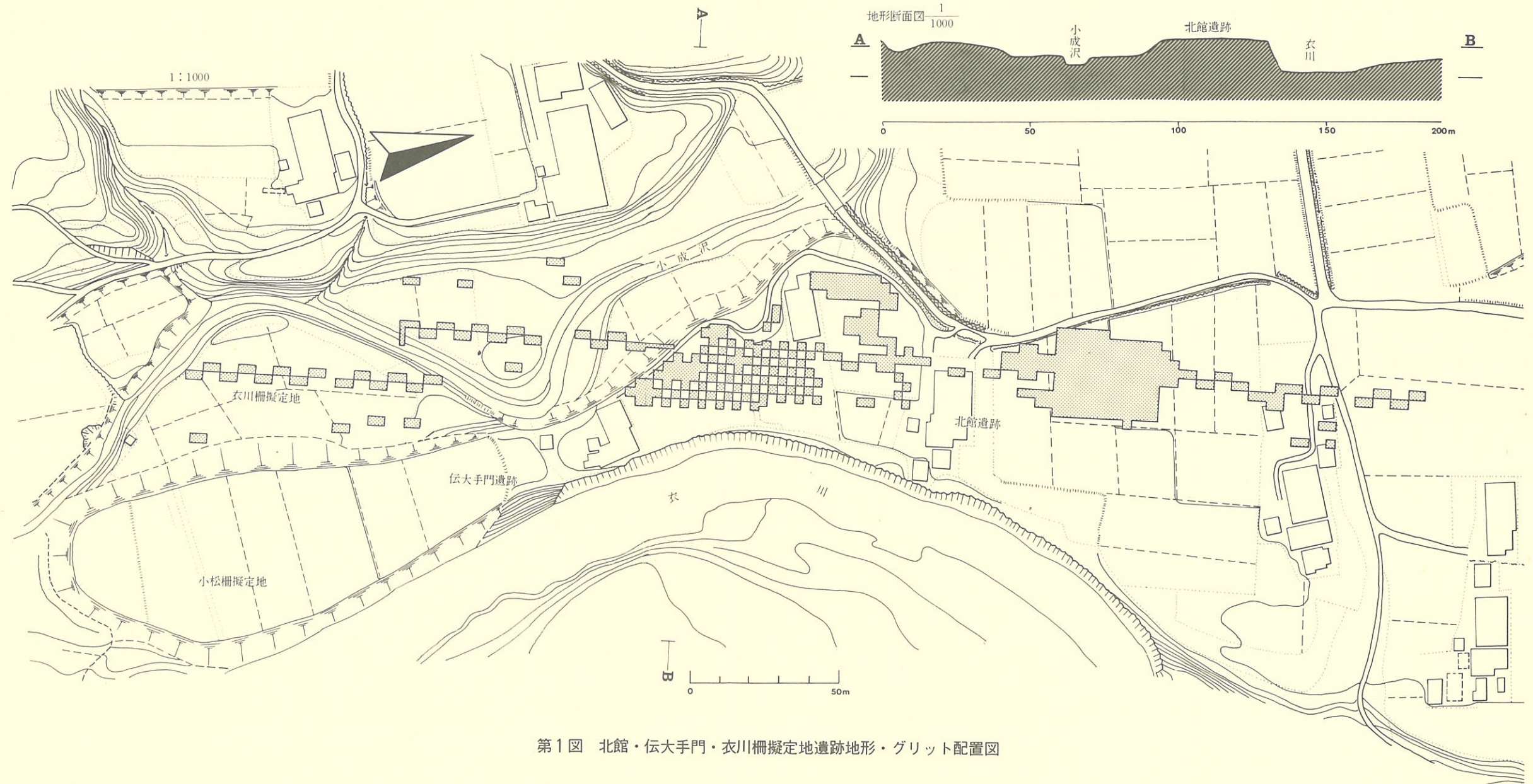
I-b-暗褐色土。粘性弱く、薄く褐色土が入りこんでいる。炭化物・風化礫若干混入。

II-暗褐色土の中にまだらに褐色土が入りこんでいる。炭化物含有。粘性弱くIほどしまらない。

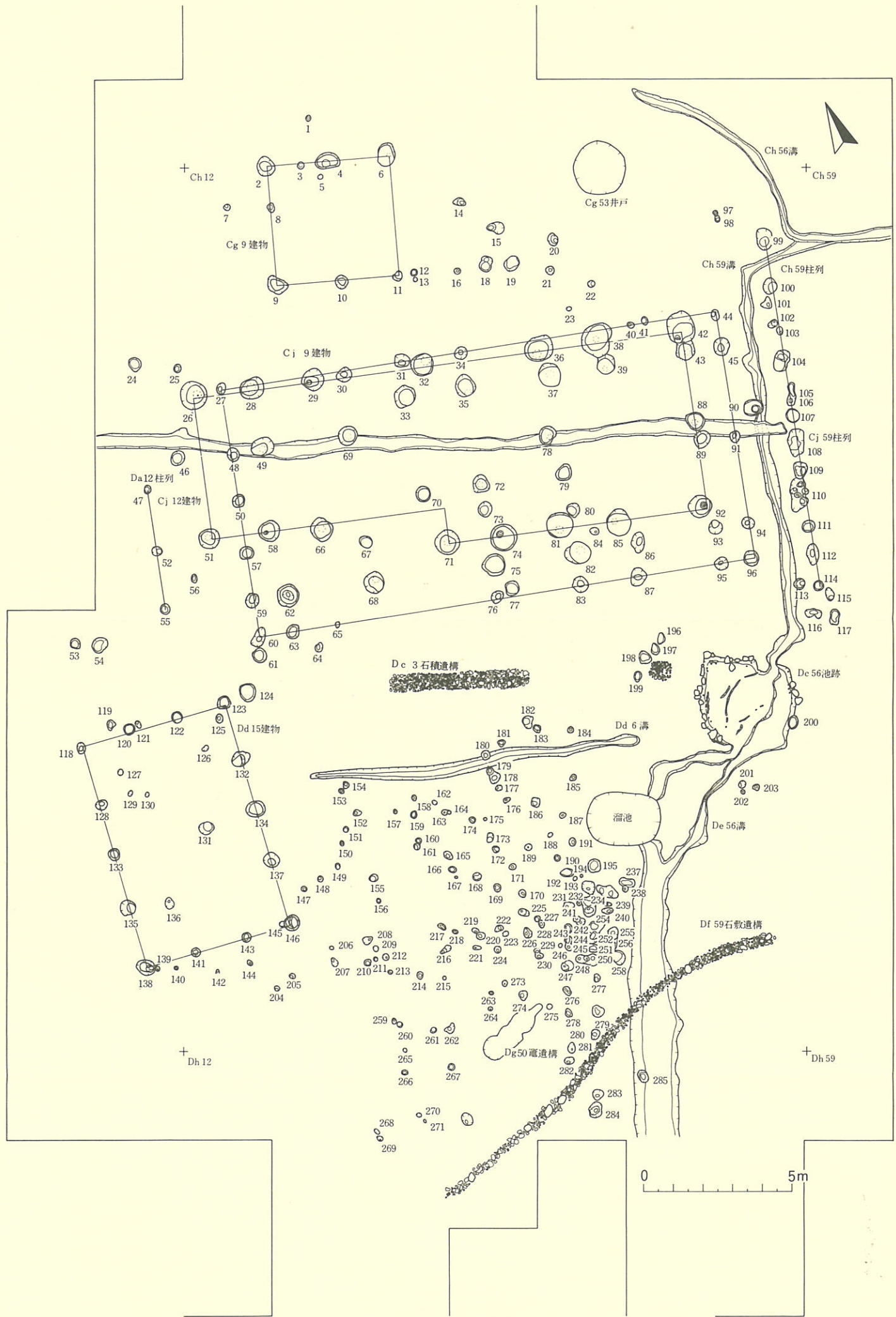
e、(床面)；ほぼ平坦である。南壁両サイド付近に2ヶ所の焼土ブロックが確認された。F-1は35×40cm径の範囲にあり、厚さは8~10cm。F-2は40×60cm径。厚さ2~4cmの規模である。



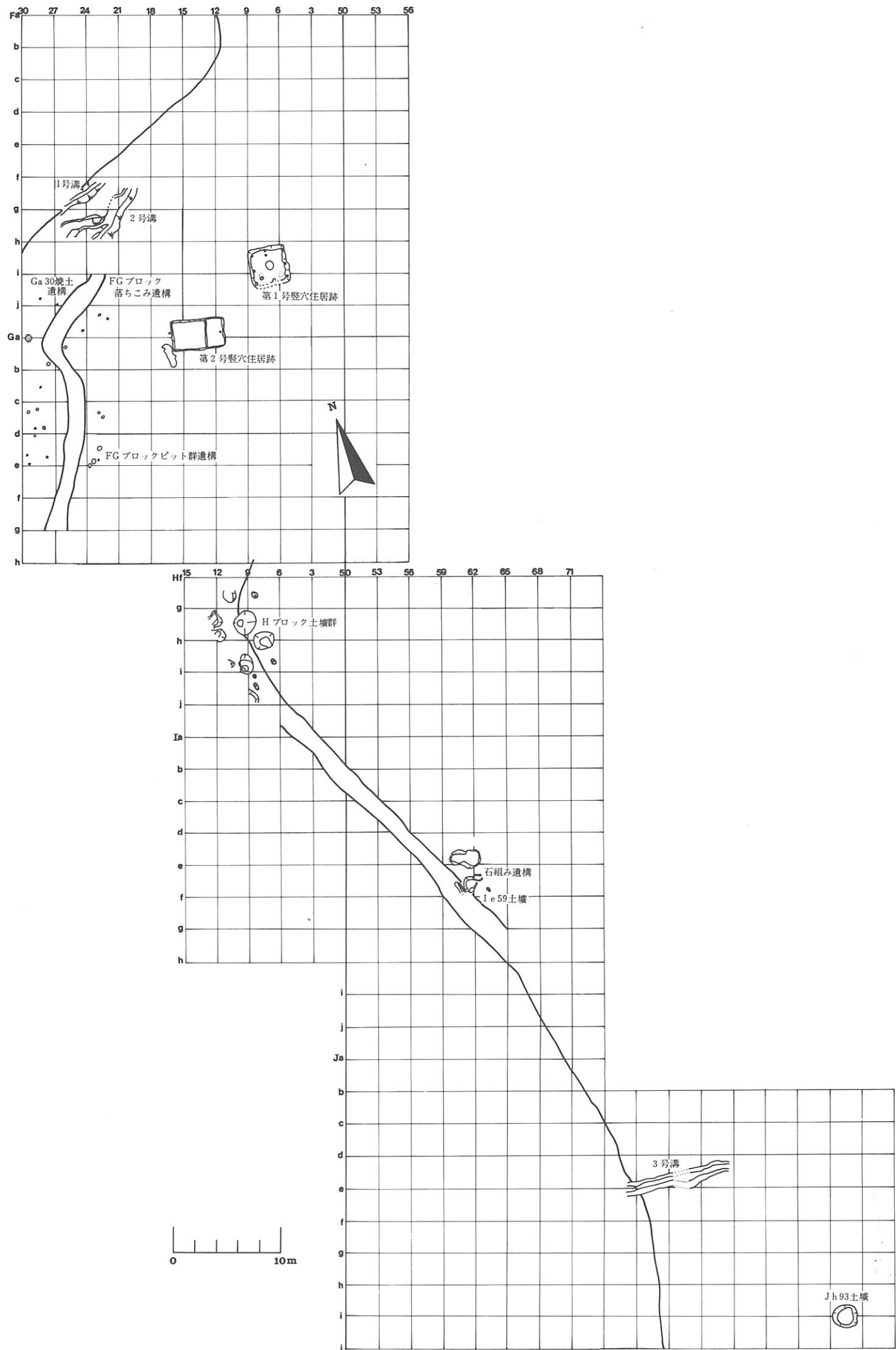
第4図 第1号竪穴住居跡平・断面図



第1図 北館・伝大手門・衣川柵擬定地遺跡地形・グリッド配置図



第2図 北館遺跡北半部 (A-E区) 遺構配置図



第3図 北館遺跡南半部 (F~J区) 遺構配置図 (1:600)

何れも炭化物まじりの焼土で、全体の色調はこげ茶色を呈している。また、南側の一部床面は砂まじりの礫が露出している。

f、(柱穴)；柱穴と認められるものは壁内に8基確認された。このうち、P₁・P₃・P₄・P₆・P₇・P₈号柱穴内に何らかの形で5～10cm径の礫が入っており、敷石あるいはくさびの役目を果たしていたとも考えられるが、下部の礫層からの混入による結果とみる方が妥当であろう。柱の位置はほぼ対角線上に並ぶが、東壁側のP₃・P₇・P₄の3基は壁際にたち、周溝を掘りこんでいる。P₈を除く他の柱穴は壁より内側、しかも周溝をはさむ形で存在する。なお、各柱穴の規模については、第1表の如くである。

第1表 ピット計測値

測定値 \ ピット	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
上場径 (cm)	34×32	35×28	36×33	32×29	35×26	24×24	36×31	35×35
下場径 (cm)	24×18	20×19	18×18	17×18	25×25	23×18	21×22	20×20
深さ (cm)	35	34	23	24	25	18	11	15

(※柱あたりの痕跡を持つのはP₂のみである)

g、(周溝)；南壁下の一部を除いて巡る。下底巾10～30cmで、深さは4～10cm内に留まる。土留材は確認されないが、柱穴が東壁部分において周溝上に掘りこまれていることから、排水溝とは考えられず、土留材の下部を埋めこむための小溝であろう。なお南壁下にあっては砂まじりの礫が床面レベルに広がるため不明である。

h、(炉)；住居内中央部分に70×85cm径、深さ8cmほどのピットがある。内部に礫を混入しており、その位置や形状からして察するに、炉の施設として使用されたであろうとも解されるものでもある。しかし、当遺構の下底部やその周辺近くにあっても焼土はみられず、この部分の床面における焼成痕もみられない。また、埋土内には若干の炭化物が混入するものの、その量は第1号竪穴住居跡内の埋土や大半のピットに万遍なく混在する量より少なく、石囲炉あるいは地床炉としての使用はあり得なかったと思われる。もし炉があったとすれば、南西・南東隅に存在する焼土ブロックの方が地床炉としての機能を果たしたものであろう。

i、(カマド)；あったとすれば南壁部分に考えられるが、端的にいて不明である。ただ、住居跡内の焼土のひろがりから察する限りにおいては、カマドの存在は認められない。

(その他の施設)；なし

〔出土遺物〕

住居跡内では、北西隅の床面に石斧1点出土しているが、現物は紛失し詳細は不明である。土器片は1片もない。壁の高さは床面から5cm内外であり、又床面に礫層が露出していることから、流水等、何らかの影響から伴出土器の大部分は流されて移動したのと考えられる。周辺には、となりのグリットから、縄文中期(大木7b)の土器細片数点と、土師、須恵器数片がみられるのみである。

(2) 第2号竪穴住居跡 (第5図 図版4)

a〔遺構の確認〕；第1号竪穴住居跡の西南およそ4mの地点に検出された。約10cm位の表土下より確認されたもので、地山面を切り込んでいるが、一部礫層面が露出している所もある。

b〔重複・増改築〕；端的にいて不明である。可能性としては東側部分との重複・拡張・同時使用の三様が考えられるが、東側周溝部分の壁の立ち上がりが判明しないことと、後述する周溝のあり方、あるいは床面の高低差等の観点でみる限りは、同一の施設ともとれる要素が強い。

c〔平面形〕；全体としては4.8×2.9m位の規模で、東西に長い長方形を呈す。長軸方向は真北線にはほぼ直交する方位にある。壁高は3～15cmの間。なお東側部分の周溝は壁に沿わない。

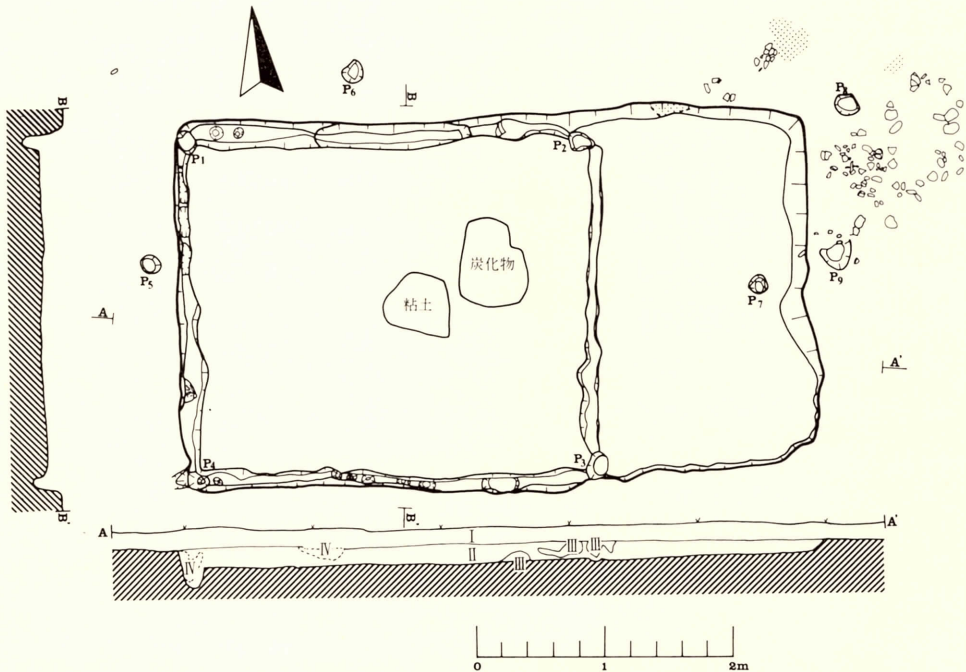
d〔覆土〕；図中のI層は、基本層のIに相当するが、この部分では礫層が上位にあり、耕作土そのものが10～15cmと浅い。したがって、耕作による攪乱が地山面にまで及び、その結果としてI層は褐色が強くなっている。また、基本層IIに相当する土もここではみられない。

I - 表土・耕作土、褐色が強く鉄分を多く含む。炭化物を含む。粘性はない。

II - 暗～黒褐色土層であるが、黄橙色土が混じる。炭化物を含み、堅くしまっている。暗褐色土・黄橙色土とも粘性はない。

III - 黄褐色のブロック、炭化物を含み、シルト質の土で堅くしまっている。

N - 暗褐色と黄橙色の混土、黄橙色土が多い。黒褐色土中にブロック的に入る。炭化物を含む。粘性はないが、堅くしまっている。



第5図 第2号竪穴住居跡平・断面図

各土層については以上の通りであるが、東側部分の堆積土にあっては、Ⅱ層とはほぼ同じ土質を呈するものの、僅かながら焼土が含まれており、色調にも若干の明暗差があるようである。しかし、両者の境界は判然とせず、重複する際の明確な立ち上がりがない。したがって、本来的に重複した部分が漸移的に移行していったものか、あるいは重複のない同一の住居跡なのかについては明らかにし得ない。

e〔床面〕；ほぼ平坦であるが、レベルでみる限りでは南側から北側に向かって若干の傾斜があるようである。周溝を境にする西側部分と東側部分とのレベル差は断面図によれば、ほとんどない。床面と思われる土質は、やや粘性のある黄色土であるが、全域にわたるものではなく、礫層と混じっている部分もある。

f〔柱穴〕；住居跡内に5個、屋外に4個のピットが検出されたが、何れも柱あたりの痕跡を残す例はない。このうち位置から見て柱穴であろうと推測されるのは、P_{1,2,3,4}の4個である。規模については下表の通りであるが、他のピットについても付記しておく。なお、この他に周溝内に小穴の痕跡があるが、ここではふれない。

第2表 ピット計測値

測定値 \ ピット	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉
上場径 (cm)	18×16	20×15	22×16	16×14	18×17	16×18	14×16	20×16	24×24
下場径 (cm)	14×14	14×12	12×16	6×6	14×12	10×14	10×14	16×14	14×14
深さ (cm)	21.2	13.9	30.0	26.9	8.2	5.0	不明	10	48

全体として、規模の小さいピットで占められており、かなり浅いものもあるが、ここでは特に柱穴と思われるP_{1,2,3,4}について記す。これらの柱穴は、各々対角線上に4.1m前後の間隔で配置され、長軸方向にあっては約3.7m、短軸方向では約2.6mの間隔で存す。何れの場合も周溝内に構築されており、床面のレベルが若干低い北側の両隅にあるP_{1,2}が、対面するP_{3,4}より浅く掘られている。

g〔周溝〕；4本の柱穴をつなぐ長方形に巡る。南・北・西側の周溝は壁に沿って掘り込まれているが、東側のそれは、壁より内側にあり、結果的には間仕切りのな様相を呈している。

東側部分を除いて、上巾10～26cm内、下巾5～16cm内、深さは床面上から平均13cm前後の規模を呈す。下底部のレベルは一様でなく、場所によって高低差があり、凹凸が見られる。また特に一定した間隔ではないが、周溝内に小穴が検出されている。これは、周溝上の各隅に柱穴が構築されていたことと考え合わせれば、排水溝としての機能を果たすというようなものではなく、土留材の下部を埋め込むための小溝であり、その中にある小穴は壁留材を支えた杭穴とみるのが妥当であろう。

これに対し、東側部分の周溝は、上巾と下巾との差がほとんどなく、深さは断面図でも解る通り、4cm前後と非常に浅い。したがって、当然のことながら下底部のレベルそのものも高く、

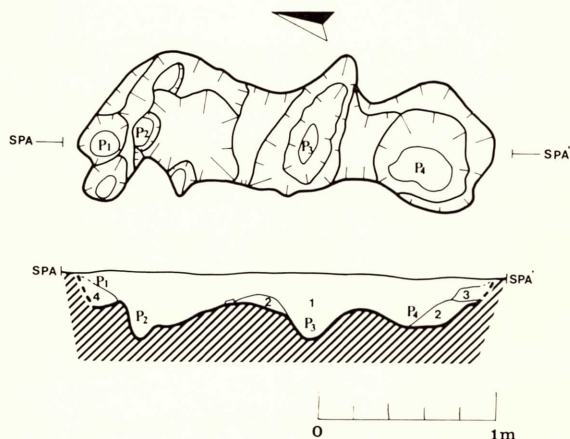
他の周溝の何れの部分よりも低くなることはない。両者のレベルは最高で18cmの高低差をもち、下底部は特に凹凸がなく、小穴も検出されない。このような相違は、現時点において重複の可能性も否定できないが、どちらかといえば、東側の周溝そのものが壁に沿ったそれとは機能的に異なる性質の小溝としてとらえられる可能性が強い。もしそうであるとすれば、これは東側に広がる空間との区別を意識した一つの仕切りともとれる。ただ、周溝外の東側部分には、柱穴と断定されるものはなく、家屋構造がその部分に及んでいたかどうかについては不明である。

h〔炉・カマド〕；焼土は東側部分の北壁に検出されたが、カマド等に比定されるほどの規模ではない。また北東コーナー近くの屋外に存する焼土についても、炉とする根拠に乏しい。ただ、前者の如く壁に密着した焼土のあり方は、壁内においてそれに関わる何らかの施設の存在を想起させるものである。

i〔その他〕；屋内の中央部付近に50×44cm大の粘土の広がりがある。レベルは床面とほぼ同じであるが、その他の詳細については不明。また、その東側には68×50cm位の範囲に、4～8cmほどの窪みがあり、堆積土中に炭化物を含んでいるが、焼土の混入はみられない。この場合も上面は、床面と同じくらいのレベルにあるが、性格は不明である。

j（Ga 18不定形ピット）（第6図）

第2号竪穴住居跡の西南隅近くに検出された。およそ2.3×2.6m前後の南北に長い不定形ピットである。第2号竪穴住居跡との関係についても明らかではなく、結論的には攪乱ピットとして位置づけたい。ピットの中には、大小合わせて7ヶ所の窪みがあるが、深さは検出面より約20～50cm位の間のものであり、その平均値は約35cm位の規模である。このうち特にP₁、2、3、4の窪みについて断面図を掲示した。これによれば、何れの窪みにも柱あたりのような痕跡は見当たらず、また、何らかの形で同質の埋土がのっているのが察せられる。後者の点につ



第6図 Ga 18不定形ピット平・断面図

て補則すれば、P₁、P₄は1層の下部に他の堆積土があるが、P₂、P₃は1層だけの単一層で覆われている。これは、2・4層のあり方からみれば、両者の窪みに前後差があるとれないこともないが、土層注記に不明な点があるので断定するものではない。

なお、土質については下記の通りである。

1. 暗褐色土層 粘性ややあり、しまっている。炭化物・土器が多く含まれている。風化礫も含む。
2. 褐色土層 粘性が強く、しまっている。炭化物・土器は含まれない。
3. 褐色土層 性質は2とはほぼ同じであるが、2よりやや暗い土色である。
4. 不明 原因に記載なし。

〔出土遺物〕

住居跡内に埋設されたものや床面からのまとまった出土はなく、いずれも破片であるが、出土状況をみると東側に土師、須恵が多く、西側に縄文片が多く分布している。東側石礫中には土師器や土錘が主であり、縄文片は少ない。またピット中の土器片はすべて縄文片のみである。

縄文土器；（第7図10～13 図版26の1～25）

住居跡周辺も含めて668点の破片であるが、実測可能なものは1点だけである。第7図13は磨滅がひどく、もろくなっているが調整の施された隆起線で口縁部を区画、キャリパー形深鉢で大木8 aもしくは8 bと思われる。図の11はじめ大部分の口縁部破片は、隆起線の曲線文、区画文、渦巻文、橋状把手、縦の撚糸圧痕列、渦状突起等、大木8式期（中期）相当の特徴をそなえたものである。胴部破片には、平行沈線による曲線区画文、渦巻文をもつものがある。撚糸圧痕の横帯などをもつ大木7 b的なものは3片のみの細片である。図の10と12の土器は、口縁部の平行沈線文や雲形文が見られ、晩期(大洞BC, C₁)の土器片で胴部も含めて4片だけの出土である。住居跡西南側に隣接するG a 18不定形ピット中には、122片集中して出土している。本住居跡内外の縄文片は、口縁部、底部が少なく、胴部破片が極端に多いことや、磨滅がみられることから、流れ込み等で運ばれてきた様相を呈している。大木8式期のものが集中していることは注目される。

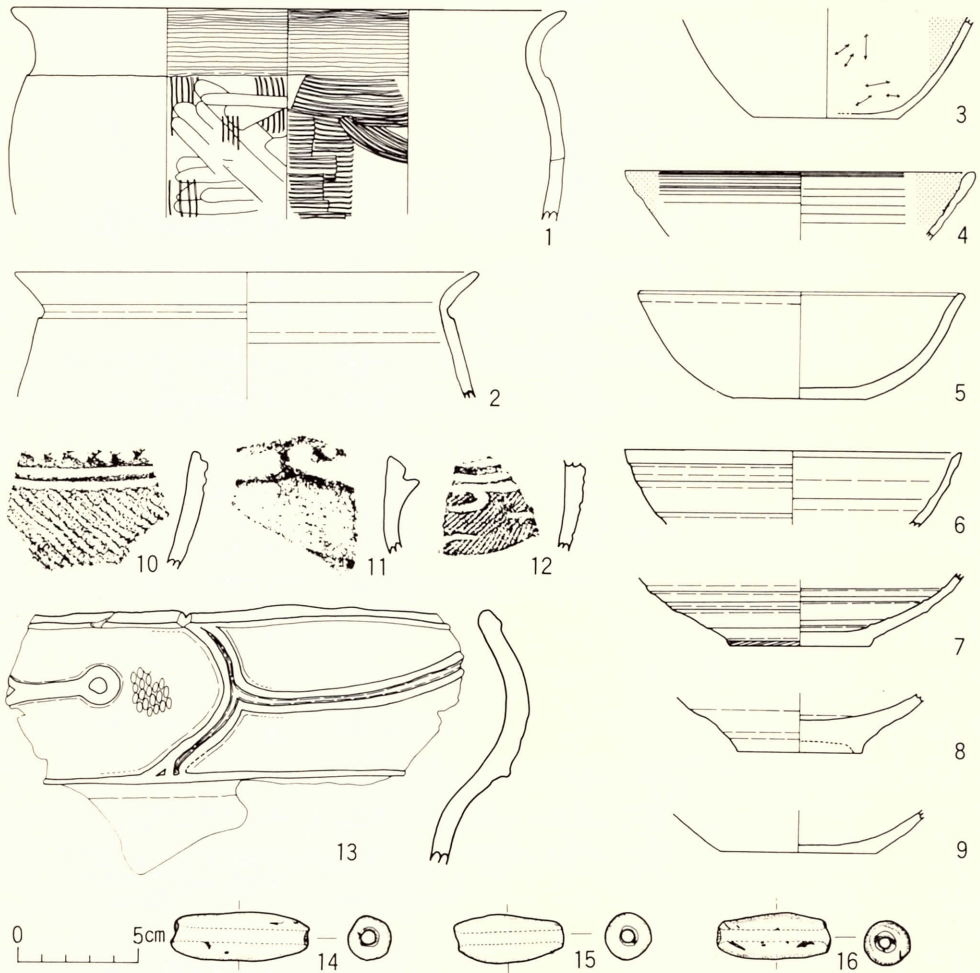
土師器、須恵器；（第7図1～9 図版26の26～51）

出土破片数11片で、坏70、高台付坏2、甕39である。

（坏）すべてロクロ使用の糸切り底である。色調、硬度により3つに分類できる。

1類-内黒の坏である。破片数は口縁部3、体部15、底部2で、実測可能3点ある。内面ヘラミガキ後、黒色処理が施され、底部下面は無調整で糸切痕をとどめる。図3は、口径は不明だが底径6 cm、図5は口径13.5 cm底径5.5 cm器高4.5 cmの、体部から口縁にかけてやや内湾ぎみの器形である。図4は口径14.5 cm、口縁が体部から外傾ぎみに立ち上がる器形、黒色処理が外面上半まで施されている。

2類-非内黒で黄褐色又は褐色の坏である。この類は軟質のものと硬質のものがあり、軟質は28片（口縁6、体部17、底部5）硬質は12片（口縁2、体部7、底部3）である。糸切り後無調整で内外面ともロクロ痕のみである。図9は底径6.5 cmで、底面も含めて外面が赤変している。朱塗りか埋土中の酸化鉄によるものか判然としない。



第7図 第2号住居跡出土遺物 (1/3)

第3表 出土遺物

遺物 地点・層位	坏			甕(壺)		縄文片(中期)			縄文片(晩期)			土 錐	石 器
	内 黒	土師質	須 恵	土 師	須 恵	口	胴	底	口	胴	底		
覆 土 II 層 中	4	12	1	7	1	13	7.7	4	2	1	0	1	0
ピ ッ ト 中	0	0	0	0	0	9	6.5	0	0	1	0	0	0
周 溝 内	0	0	0	0	0	0	9	0	0	0	0	0	0
東 側 石 礎 中	7	7	0	6	1	1	7	1	0	0	0	5	1
北 東 側 焼 土 付 近	0	0	0	4	0	1	1.2	1	0	0	0	0	0
G a 18 不定形ピット中	0	0	0	0	0	9	10.9	4	0	0	0	0	0
住居跡内層位不明	0	0	0	1	0	17	16.5	3	0	0	0	3	1
住居跡周辺の第II層中	12	21	6	19	0	2	14.9	7	0	0	0	1	1
計	23	40	7	37	2	52	59.3	20	2	2	0	10	3

3類—色調が灰色硬質の須恵器である。破片数は7（口縁3、体部1、底部3）で、糸切り後無調整1片、へら削りを加えたもの1片みられる。図7は、灰褐色を呈し、底径5.8cm、糸切り後底部の縁辺をへら削り調整している。図6は口径14cmで、体部上半には自然釉がかかっている。

（高台付坏）底部破片2点のみである。内黒で、糸切り後、粘土帯をはりつけて指頭による調整を施している。図8は底径5.2cm、調整が不十分で台部がゆがんだ形をしている。

（甕）土師器37片（口縁4、体部29、底部4）、須恵器2片（体部のみ）であり器形の判明するものは第7図の1と2の2片だけである。図1は口径23cm、口縁は短く外反し、胴部がやや張る長胴の器形であり、肩部に低い段をもつ。口縁部は内外とも横ナデを施し、体部はへら削り後、刷け目調整を縦に施している。内面は刷け目を横に施し、ロクロは使っていない。図2は、ロクロ痕を有し、肩部に強い段をもつ。

土錘；（第7図14～16 図版39の5～14）

土錘は10点出土している。特に住居跡の東壁及び東側石礫中に多くみられた。長さは3.5cm～5.5cm内外のもの、太さ（最大径）2cm内外の紡錘形をした管状の土錘である。欠損のほとんどないもの6点、先端部欠損のもの3点、判割になっているもの1点である。胎土は大粒の石英、白色砂粒を多く含む荒いもの9点、きめの細かいもの1点である。欠損のないものでも貫通孔の両先端が磨滅しており、使用状況が推測できる。図15は東側石礫中より出土、色調は暗褐色を呈し、下半部は黄褐色である。胎土は石英粒、砂粒を含み荒いが硬質の焼成である。図14は住居跡内東側覆土中よりの出土で色調は灰褐色、他の土錘よりは細長い形になっている。胎土は石英を若干含み、固くしまって焼成良好である。図16は住居跡の東壁よりの出土、色調は黄褐色、大粒の石英粒を含むが焼成はやはり固い。貫通孔の大きさは一様でなく、直径6mmのもの2こ、5mmのもの3こ、4mmのもの5こである。貫通孔が同じ大きさのグループは、形状と胎土がそれぞれ共通している。直径6mmの貫通孔をもつものは、形が細長く胎土も細かくしまっている。5mmのものはやや細長く、4mmのものは短かい形である。4mmのものは胎土も色調も全く同一である。使用する網縄の太さ、大きさに応じて成形したと考えられる。つくられた時期も同時であろう。成形の際の指頭圧痕が、残っているものが多い。

石器；

出土点数が少なく、剥片石器の石鏃1、石匙1、不定形石器1で、いずれも住居跡覆土中である。

(3) FGブロック落ち込み遺構(第8図図版4)

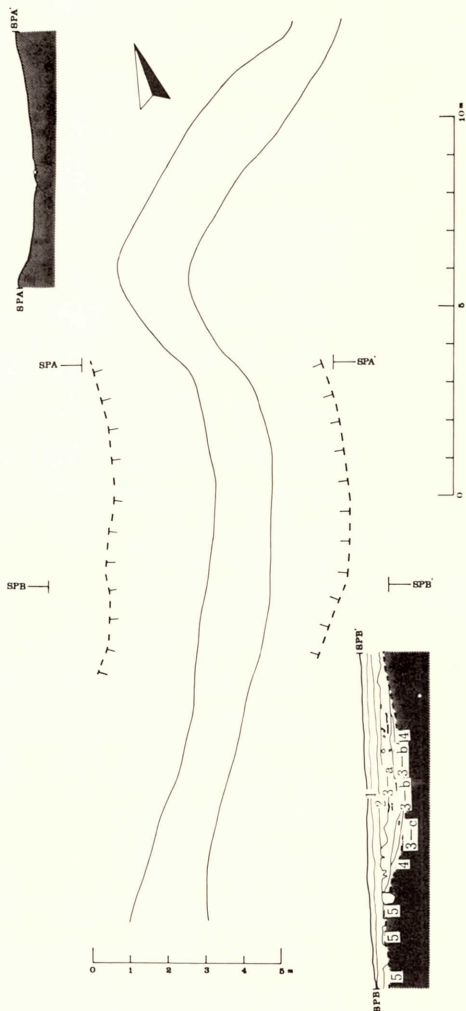
検出面は、基本層のⅢ層相当面にあたる。平地部分の同層には凹凸が見られるが、落ち込み部分はこれに比してなだらかである。蛇行しながら南北に伸び、上限はF i 24付近で浅くなり、消滅する。また、検出部分の下限は、G g 27付近に存在する宅地跡の境界までである。直線にして約24m部分を図示している。最深部約70cm、下底巾2m前後、上巾は推定でも6~7m位の規模で、両壁は緩やかな立上りを呈す。なお、上巾はG c d 24~30、G a b 24~30付近を推察して作成したものであり、図中の点線部分がそれにあたる。これは断面図あるいはレベル等による高低差から推測したものであるが、他の部分については不明である。

本遺跡内の遺物包含層は、基本的には第Ⅱ層にあたるが、出土遺物の大半はFGブロックを中心とする当遺構内に集中している。したがって、当遺構は、主たる遺物の包含地として位置づけられるものでもある。

この部分の堆積土は、基本層の項では特に明記しなかったが、Ⅱ層とⅢ層の中間に位置するものである。いわば落ち込み部分特有の堆積土である。この層は大別して2層に分けられ、3層とした部分は、更に3-a・b・cに細分される。図中の3-a、3-bとした層に遺物を集中的に包含している。

各土質については下記の通りである。

1. 耕作土(基本層Ⅰ)
2. 暗褐色土(基本層Ⅱ)
- 3-a 暗褐色土、シルトが多い。粘性、しまりあり。礫・炭化材を含み、土器片が多い。



第8図 FGブロック落ち込み遺構(遺物包含地)

- 3-b 黒褐色シルト質土、粘性はさして強くないが、3-aよりしまりがいい。砂のブロックが入る。木炭・土器片・礫等を含む。
- 3-b 黒褐色シルト質土、性質はほぼ3-bに同じだが、砂のブロックがやや少ない。
- 3-c 黒褐色砂壤土、粘性強く、しまりあり、小粒の風化礫を含む。炭化材は微量。
- 4. 褐色砂壤土、ほとんど砂質である。
- 5. 黄褐色土（基本層Ⅲ）

以上の通りであるが、このうち、3-C層は、当遺構北側の浅くなる部分では見られなくなる。また、3-a～4層は、何れも砂質に富む土壌を呈しているが、流水等の作用による堆積の結果と思われる。主たる遺物の包含層とされる3-a、3-b層における遺物のあり方は、基本層Ⅱとの関わりから生じてきたものであろう。端的にいうと、落ち込み部分への流入である。このような過程が進行する背景には、自然的な要因として流水による結果が想起され、また、人為的には、近辺に存在する縄文時代中期の竪穴住居跡との関わりから、廃棄等による堆積が考えられよう。なお、断面図中にピットの痕跡があるが、これについては、FGブロックピット群の項で記すので特にふれない。

〔出土遺物〕

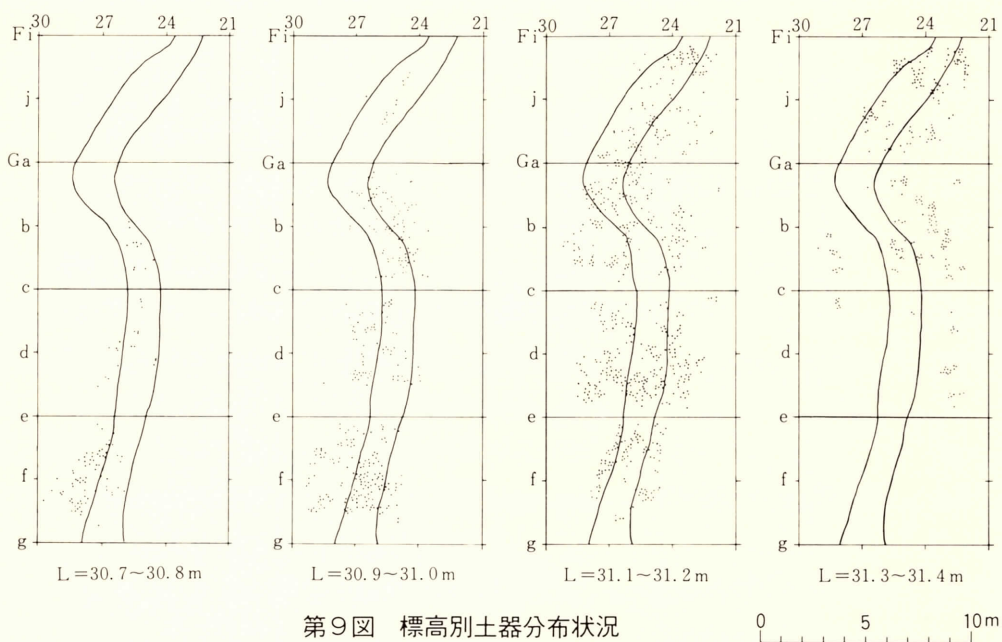
本遺構は前述のように主に縄文土器、石器が多量に出土し、遺物包含地としてとらえられるものである。溝状に落ち込んだ堆積層に、縄文中期（大木7a～8b）の土器が集中している。特に大木7b～8a式期のものが多い。土器分類の詳細は「Ⅲ、出土遺物」の項で記述するので、ここでは出土状況について述べる。

縄文土器；（第37図～第66図 図版7～23）

出土総数は分類不要な細片を除き 31,168点である。うち器形の復元可能品は239個体を数える。本遺構を北の方からFijグリット、Gcdグリット、Gefグリット、Gghグリットと5つに区分して、その出土状況を比較してみると第4表のようになる。出土数は遺構の中ほどにあたるGabグリット、Gcdグリットが多く、北又は南に離れるに従って少なくなる傾向となる。復元可能な土器の個体数をみると、破片数との割合からみて、Gefグリット、Gghグリットの多いことから、Gefグリット付近は、自然的又は人為的要因による攪乱が少なかったことを物語るものである。又、Fij、Gabグリットは破片数、分類不要の細片量が非常に多いという事実と、本遺構の北側には、いり組んだ溝が形成されていることを考え合わせると、遺構の北半部が南半部よりも攪乱、移動が激しかったことを示していると思われる。

標高別の土器分布状況は第9図のようになる。北から南にかけてゆるやかな傾斜をもち、遺物の分布状況がそれにそっており、包含物が形成された時期は、落ち込み遺構自体の大きな変動はなかったと推測される。

第4表に示されている土器の分類の詳細については後述するが、口縁部破片の第1群は大木



第4表 落ち込み遺構（遺物包含地）グリット別土器出土数

分類 グリット	縁									胴部	底部	合計	
	口	第1群	第2群	第3群	第4群	第5群	第6群	第7群	第8群				小計
Fi j		5	203	63	1	17	4	1	14	308	5.964	390	6.662
G a b		23	571	130	0	76	30	9	48	887	7.819	767	9.473
G c d		11	454	69	0	48	8	1	6	597	6.715	578	7.990
G e f		8	234	179	7	43	10	1	7	489	3.938	297	4.724
G g h		0	89	104	24	15	0	0	0	232	1.950	137	2.319
合計		47	1.551	545	32	199	52	12	75	2.513	26.386	2.169	31.168

7a 式期、第2群は大木7bに含まれる時期、第3群は大木8a式期、第4群は大木8b、第5群は地文のみ、第6群は無文のもの、第7群は前期、後期、晩期、第8群は所属時期の確定できない小片としたものである。胴部、底部は文様の有無にかかわらず、一括して個数を記している。

各群毎の分布数を比較してみると破片数の中で、第3群土器の割合の高いのがGef、Gghグリットであり、Fijグリットは低い。これは大木8式期の住居跡が落ち込み遺構の南側に多かったのか、あるいは土器が堆積される時期に流水量が増え、流れて移動してきたものかと考えられる。Gghを含む南端は宅地による攪乱を受けているため、溝の方向は不明であり、出土数も少ないが、やはり第3群土器が多い。

出土破片の中で第7群土器に分類されるものは12点のみである。縄文前期（大木4～6）に含まれるもの6点、後期1点、大洞BC、C₂式4点、不明1点である。本遺構は、縄文中期初

頭から中頃まで連続して堆積した遺物包含層とみなすことができる。細片が多く、磨滅したものや水に洗われた様相（砂粒が荒く表面に見えたり、シルト質化している）をもつものが大部分であることから、かなり流水があったと思われる。しかしある程度復元できる土器片が押しつぶされた形で一括して出土する場合も少なくないので、離れた地点から流されてきて堆積したものではなく、落ち込み遺構部分に廃棄されたと見るべきであろう。

石器；（第67図～82図 図版27～38）

出土総数は87点（剥片石器68、磨製石斧5、凹石1、磨石5、石皿等8）である。これらの他に碎片、剥片、石核など約660点出土している。分布状況は第10図の如くである。剥片石器は本遺構の3-a層、3-b層に多く、磨製石斧、石皿、磨石は3-c層の出土である。分類の詳細は「Ⅲ 出土遺物」の項で述べる。

第5表 落ち込み遺構石器出土数

分類 地点	剥片石器					製磨 石斧	凹石	磨石	石皿 等	計
	1群	2群	3群	4群	5群					
Fi jグリット	1	1	1	4	4			4	2	17
G a b "		3		11	9	2	1		2	28
G c d "	4	2		4	15	3		1	3	32
G e f "				1	4				1	6
G g h "	1	1			2					4
計	6	7	1	20	34	5	1	5	8	(87)

土製品；（第83図 図版6及び39）

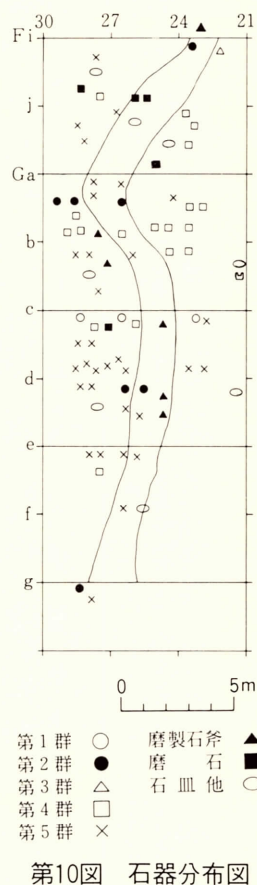
土偶完形品1点、土偶の足とみられるもの1点、小形手づくね土器1点、耳栓1点である。土偶完形品は、Gefグリットの3-b層、土偶の足Gcdグリット3-b層、小形手づくね土器と耳栓は、Fi jグリット3-a層からそれぞれ出土している。土偶出土層の同じ面には、第2群土器が共伴し、同時期と見られる。

土師器、須恵器；（図版40）

出土破片数は、内黒坏体部2、土師質坏体部1、須恵器の壺の体部3と非常に少ない。いずれも細片で、器形は不明であるが、ロクロ痕が残っている。

陶器；（第88図1 図版41の24）

Gefグリットの3-a層から、復元可能な三足陶器が出土している。大きく半分に割れ目が入り、左半分が黒色を呈し、右半分がにぶい黄褐色となっている。右半分は、埋土中に黒色部分がはげ落ちたのであろう。体部中ほどに雷文の連続文様がほり込まれている。香炉と思われる。



第10図 石器分布図 (87)

(4)溝状遺構

本遺跡内に於いては、1号・2号・3号溝が検出されているが、1号溝については詳細が不明であるので、図示するにとどめる。以下については、2号・3号の順に記す。

第2号溝（第11図 図版5）

本遺構は、F f 24グリッドを中心とする地区に存在している。検出面は基本層第Ⅲ層に相当する。図示した部分における規模は、最大上巾1.6 m、同下巾1 m、深さ約30 cmほどである。南側でA・Bの二溝に分かれており、A溝は本流と同様に多量の礫を含むが、B溝はそのあり方が異なる。しかし、これらは部分的な検出プランのため、本来的な全体の形状を含めた詳細については不明である。ただ、グリッド毎の土層断面図で追跡してみると、A・Bの両溝は、



第11図 第1・2号溝平断面図

ある程度の復元が可能である。A・B溝は、図中の点線方向に伸びていくと推察される。これは、Fi 24～30、Fi 30ライン等、即ちFi 30、Fi 27グリッドの北壁、Fi 30グリッドの西壁部分、あるいは、Fgh 24グリッド西壁等の土層観察による結果を点線でつないだものである。各々の壁には、A・B両溝の延長部分に溝状の落ち込み層が確認され、レベル差から推しても不自然ではない。ただ、A溝については、中間部分でのセクションがないため、不確定的な要素があることは否めない。

この地区の周辺は、流水による激しい攪乱・侵蝕等を受けているため、II層以下の層位が特に一定しない部分でもある。これは、1号溝・2号A・B溝に限らず、FGブロックの包含層を形成する落ち込み遺構をも含めた不定方向への流水・氾濫等を中心とした影響による結果であろう。

年代的には、端的にいつて不明であり、A・B溝の先後関係についても同様である。ただ、礫のあり方や、Fg 24～Fi 24ラインに図示した埋土の相違からみれば、両溝が同時期に使用されたものではなく、各々時間差を持って存在したことは確かであろう。一方、本遺構とFGブロックの落ち込み遺構との関係について言及するが、この場合は、前述の様にB溝が点線方向に続くとした前提であることを明記しておく。B溝は、Fi 27グリッド付近でFGブロック落ち込み遺構と一部分ながら重複していると思われる箇所があるが、落ち込みの包含層とされる堆積層を切る形で形成されているため、少なくともこの部分では、B溝の方が後世のものであるといえる。しかし、基本層第III層以下の例でも解る通り、包含層形成以前であっても、同じ方向からの流水・氾濫のあったことが考えられ、また、それ以降にあって同様であることから、先の事実だけで、溝の形成そのものが、FGブロック落ち込み遺溝と時間差を持たねばならぬという必然性はない。したがって、本遺跡にあっては、度重なる流水・氾濫等による土砂の侵蝕・堆積・流失等による作用を配慮すれば、本来的な溝そのものの形成が、落ち込みやその包含層より新しく形成されたものと明言できるものではない。ここでは、特に、溝内の堆積土との関わりから最終的なあり方としては、FGブロック落ち込みの包含層よりは新しい時期にB溝が埋没していったという解釈にたつものである。

B溝における遺物包含層は、5層以下の全ての堆積土が相当するが、これらは、何れも前述の如く、FGブロックの包含層より後に形成されてきたものである。したがって、時期的には近接するものではなく、かなりの隔りがあると思われる。

以下、土質について記す。

- 1 - 褐色土 (基本層 I)
- 2 - 黒褐色土 (基本層 II)
- 2' - 黒褐色土、細粒で粘性が強い。

- 3 - 黒褐色土、固くしまって粘性あり、炭化物、風化礫等を含む。
- 4 - 黒褐色土、シルト質の褐色土が混じり、堅くしてしまりがあ。細かい土器片を含む。
- 5 - 黒褐色土、炭化物、土器片混じり、粗砂僅少、礫を含む、粘性が強くしまりがあ。
- 6 - 黒色土、細粒で粘性あり、やわらかい腐蝕土、土器片あり。
- 7 - 黒褐色土、細粒である、土器片が多い、褐色が強くなる。
- 8 - 黒褐色土、堅くしまっている。粗砂が入りこむ。
- 9 - 黒褐色土、褐色が強い、かたくてしまりがあ、底部に粗砂が入る。

第3号溝（第12図）

本遺跡内、伝大手門跡と伝えられる範囲に検出された。Jd 74からJd 83地点まで東西に走る。遺構検出面は、基本層第Ⅲ層に相当し、耕作土下より20～40cm付近にあたる。この地域は礫層が上位にあり、当遺構は褐色を呈す同層を50～90cm位掘り込んでいる。

発掘部分における規模は、全長約9.5m、上巾0.7～1.7m、下巾0.3～0.7m、深さ平均は70cm位である。西側は小成沢に面する段丘崖まで、東側は宅地跡下にあり、全容を検出してない。

覆土については下記の通りである。

1. 黒褐色土、耕作土、基本層Ⅰに相当。
2. 黒褐色土、小粒の礫を混入し、褐灰色に近い。混入する石の大きさによって細分することも可能であるが、2層として一括する。基本層Ⅱに相当。
3. 炭化物を混入する明褐色土。場所によってない所もある。
4. 暗赤褐色土+礫、礫のあり方はかなり多い。掘り込んだ礫層の壁より崩れたと思われる。
5. 黒褐色土、礫を混入。

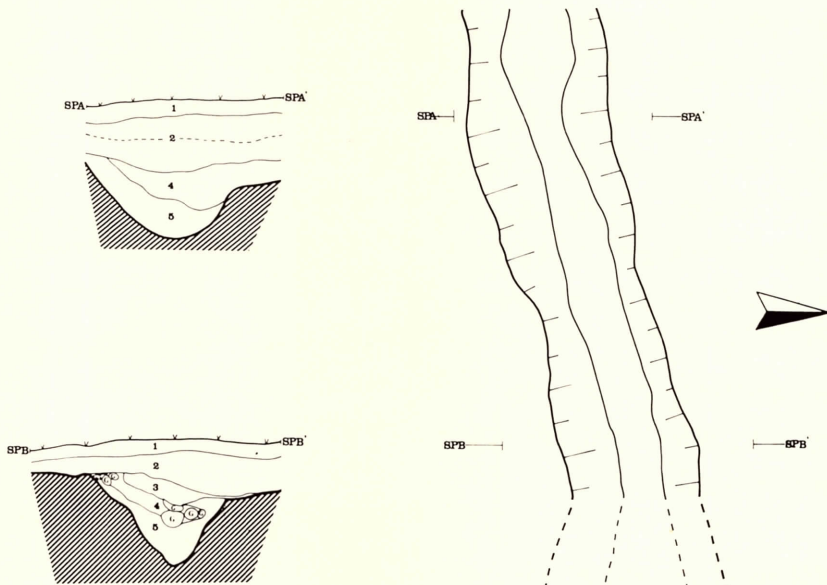
以上の5層に分けられ、以下は礫層となる。なお、このうち4・5層が主に遺物を包含する層である。

当遺構は、先述の如く伝大手門跡、あるいは小松柵擬定地に連なる段丘上に位置しているが、南北にのびる舌状部分を東西に切る形で存している。ただ、東側部分は、調査範囲外のため検出してない。したがって、この部分が衣川に面する段丘崖縁にまで及ぶものであるかどうかは不明である。

〔出土遺物〕

縄文土器及び石器のみで、他の遺物の出土はみられない。

縄文土器；1号、2号溝から出土の総破片数は1,920点、復元可能浅鉢1点である。第6表の如く、口縁部、底部破片が少なく、胴部破片が非常に多く、いずれも磨滅がひどい。本遺跡の分類基準に従えば第2群土器が多く3群土器は少ない。特に隆起線にそって擦糸圧痕を施したものの（2群1類d）や擦糸圧痕文だけのもの（2群1類a、b）、沈線による文様表現（2



第12図 第3号溝断面図

群2類 a、b) などが主になっている。北方にあたるF b グリット第2層、第3層に遺物がかなり出土していることから、その地点からの流れ込みと思われる小片が大部分である。

3号溝は、出土数103点(口縁12、胴部75、底部16) 復元可能品はない。4層、5層からの出土で、沈線を主文様体にした2群2類や3群土器が混在している。遺物からみて、FGブロック落ち込み遺構(遺物包含層)と時期的には大きな隔たりはない。

石器；1、2号溝から、石鏃2、石筥状石器3、不定形石器2、磨製石斧4の計11点の出土を見た。石核、その他の剥片は89点である。第3号溝からの出土はほとんどなかった。



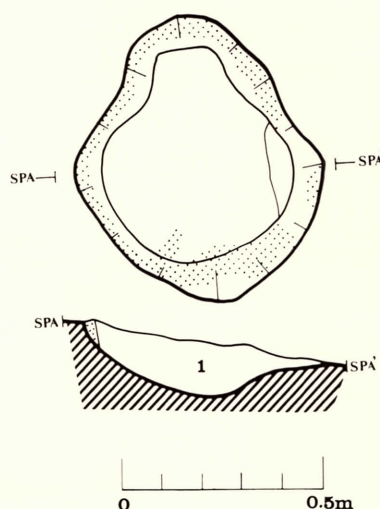
第6表 溝出土土器、石器

分類 地点	縁部								胴部	底部	剥片 石器					磨石製器	凹石	磨石	石等
	1群	2群	3群	4群	5群	6群	7群	8群			1群	2群	3群	4群	5群				
1号・2号溝	1	44	9	0	0	3	0	1	1,795	67	2	0	0	3	2	4	0	0	0
3号溝	0	4	5	0	0	0	0	3	75	16	0	0	0	0	0	0	0	0	

(5) Ga 30 焼土ピット (第13図)

第2号竪穴住居跡の西側約13m付近に存する。60×70cm径のピットで深さは12cm位である。周囲の壁面に焼土が密着しており、その厚さは北側部分で約10cm、西から南にかけては6cmほどになる。なお、東側の一部にはみられない。この焼土は第Ⅱ層黒色部分にあらわれ、また第Ⅲ層は焼けた形跡がない。埋土は壁部分の焼土を除くと黒色土の単層となる。この土は若干の炭化物を含み、固くしまっている。

出土遺物はなく、このような焼土遺構が形成された過程についても不明であるが、焼土のあり方からみて焚火の跡であろうと思われる。



第13図 Ga-30焼土遺構平面断面図

(6) FGブロックピット群遺構 (第14図)

FGブロックには、大小27個のピットが検出された。このうちの2個は詳細が不明なため省略することとし、ここでは残る25個についての記述である。

これらのピットは、同ブロック内に存在する落ち込み遺構をささむような形で存在しているが、№25ピットを除いてその落ち込み遺構外にある。ただ、№25ピットもまたほとんど落ち込みの端に存しており、あり方そのものは他のピットと大差ないといえる。№25ピットは、Gd 24～30グリッドの北壁セクションで確認されたもので、平面図には点線で記載している。全体的にみて、何れも建物遺構の配置として確定されるものではなく、端的にいて性格不明である。僅かに№6・4・7・8のピットが約2.2mの間隔で直線的な配列をみせ、また、№1・3のピットは2.2mの間隔で方向的には前者に沿うものでもあるが、明確な対応関係が把握されるというものでもなく、本項では一括してピット群として取り扱った。これらに対応すると思われるピットは、本来的には落ち込み遺構にも存在していたものであろうが、暗～黒褐色堆積土層中のため、平面的には把握・確認されなかったものと思われる。これは、後で再述する№25ピットの例や、ピット群のちらばり方からみても明らかであり、特に落ち込み遺構を避けて掘り込まれたというようなことではあるまい。№25ピットのあり方については、FGブロック落ち込み遺構(第8図)の断面図にある通り、検出面はⅢb層にあたる部分であり、底部は基本層の第Ⅲ層に達しているのが解る。少なくとも落ち込み遺構内の遺物包含層形成以降のピットである。№25ピットの周辺に散在する№12・13・14・17・20ピット等との比較でみた場合は、近くにあるにも拘らず、前者と後者の検出面高低差がかなりあるようであるが、底面高の高低差は

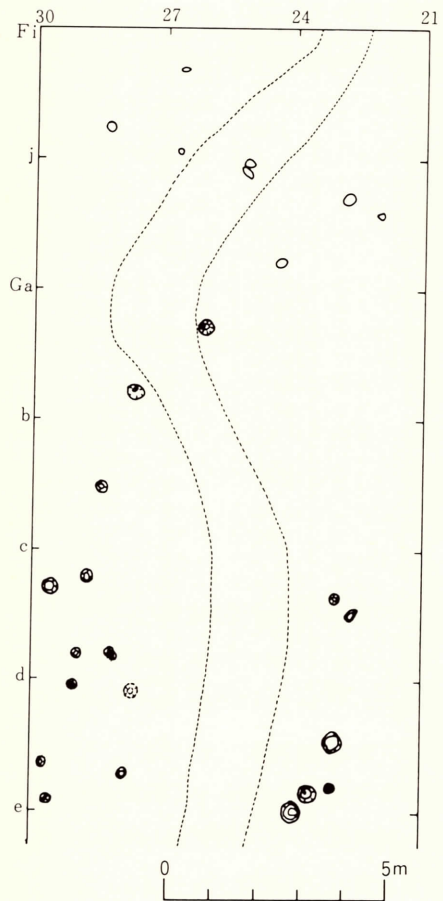
相対的に少ない。このことは、時期差がないという観点でみる限りは、検出面が基本層の第Ⅲ層とされる他のピット群もまた№25ピットに近いレベル段階での構築が考えられ、層位的にはⅡ層中における掘り込みの可能性があるということである。Ⅱ層そのものも流水の影響を受けているため、確実にそうであると断定するものではないが、少なくとも Gcd ブロック付近のピットは、前述のような視点で扱えば、時期的に新しい遺構とみなされよう。このブロックのすぐ南側は、現状で宅地として利用されていた地柄であるが、同ピット群は丁度その裏側に位置している。したがって、この建物に近い部分にあっては、それらに関わる何らかの施設の痕跡とも推察される。そういう中において、ピット内に土器細片の混入がある例を多くみるが、ピットそのものが、基本層Ⅱ層（本来の遺物包含層）をも掘り込んだものであるならば、紛れ込みと判断することも大過ないであろう。

なお、Ga 30ブロックには、焼土遺構が検出されているが、時期、性格等は不明であり、その周辺に存在するピットとの関係も明らかにすることはできない。

以下各々のピットの計測値と特徴を記す。(第7表)

〔出土遺物〕

遺物のとりあげ時点で、ピット中のものを一括してとりあげたのは、Gabグリット内のピットだけであったため、他のグリットのピット中の土器片は、包含層中の土器片としてその中に含まれている。Gabグリットのピット中の土器片は、第2群～第3群及び第8群のものである。いずれも小破片であり、ピット周囲からまぎれ込んだものであろう。石器その他の遺物は見られない。ピット群の存在する落ち込み遺構には、縄文中期以外の時期のまとまった遺物の出土がないし、又、ピットの配置等に関連するような遺物分布もとらえることはできなかった。



第14図 FGブロックピット群遺構平面図

第7表 FG ブロックピット群計測値一覧表

番号	検出面径 cm	底面径 cm	検出面高 m	底面高 m	深さ cm	据え方 cm	備考
1	22×23	21	31.04	29.93	11		底面径はセクションからの推定
2	14×14	7	31.03	30.92	11		土器細片あり、底面径はセクションからの推定
3	22×17	12	31.00	30.93	7		腐蝕多く混在、
4	25×23	13	30.92	30.77	15		土器片、植根あり、
5	17×16	12	30.89	30.76	13		”
6	29×30	13	30.92	30.78	14		炭化物・焼土粒多い
7	37×35	29×19	30.98	30.67	31	8×10	
8	42×35	14×12	31.05	30.66	39	10×10	
9	27×25	15×13	31.07	30.86	21		
10	37×36	24×26	31.08	30.65	43		砂質褐色ブロック混入。腐蝕。木炭少片、土器小片混入。
11	29×30	17×20	31.01	30.70	31		砂質褐色ブロック混入。木炭片・土器少片混入。
12	23×22	14×13	31.00	30.79	21		砂質褐色ブロック混入。木炭少片混入。
13	23×20	16×12	30.89	30.77	12		砂質褐色ブロック混入。木炭片・土器片混入。
14	15×17	9×11	30.89	30.85	4		
15	22×23	15×15	31.12	30.97	15		砂質褐色ブロック混入。
16	25×31	16×22	31.24	31.00	24		砂質褐色ブロック混入。木炭少片・土器少片混入。
17	22×23	14×13	31.03	30.72	31	6×12	砂質褐色ブロック混入。木炭少片混入。
18	22×21	12×12	31.06	30.99	7		
19	24×26	21×21	31.08	30.72	36	15×18	砂質褐色ブロック混入。木炭片・土器少片混入。
20	22×25	16×14	30.84	30.67	17		砂質褐色ブロック混入。木炭少片混入。
21	42×46	36×37	31.07	30.90	17	26×23	砂質褐色ブロック混入。木炭片・土器少片混入。
22	41×42	28×28	31.13	30.91	22	11×9	
23	18×21	14×17	31.28	31.10	18	5×8	砂質褐色ブロック混入。土器片混入。
24	44×48	40×40	31.25	31.11	14		砂質褐色ブロック混入。木炭少片・土器少片混入。
25	30×30 推定	15	31.32	30.96	36		

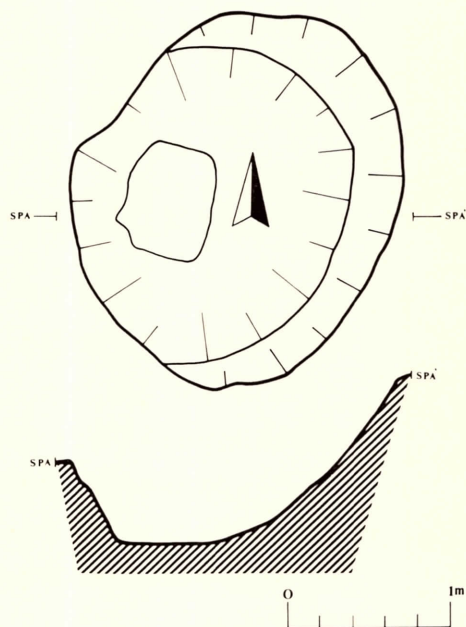
(7)Hブロック土壌群 (第15図)

Hg 9～Hg 12グリッド地点に検出された。本遺跡の西寄りに流れる小成沢を臨む崖上であり、西側に向かって傾斜する段丘縁や落ち込み部分にあたる。この地区には全体の形状を知り得る土壌が三基確認されている。この他に小規模のピット類や土壌の一部が存在するが、これらの詳細については省略する。ここでは、P₁、P₂、P₃の各土壌についてのみ記す。

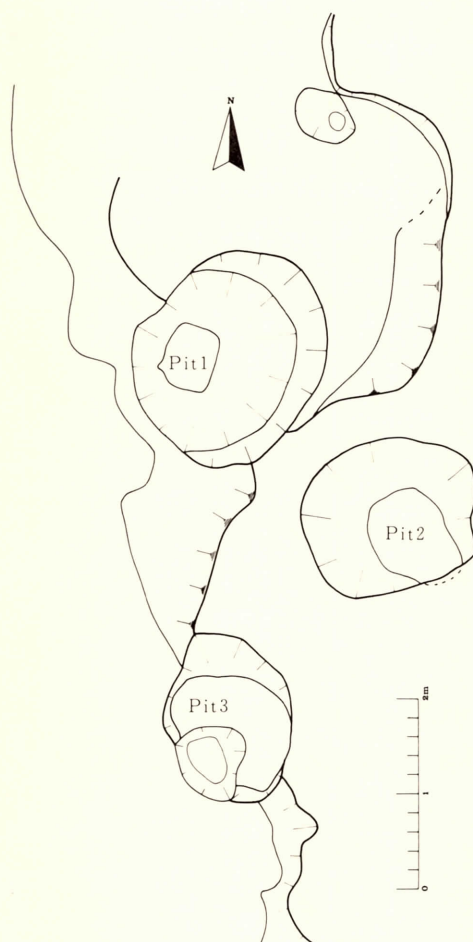
P₁土壌 (第16図)

上巾2×2.2 m前後で若干南北に長く、下巾は0.7×0.6 m位で隅が角張っている。記載の断面図は、レベルによる数値から推して作成したものであるが、堆積土の層位については不明である。SPAとSPA'地点のレベルは、50cm弱程度の落差があり、西側が低くなっている。構築時において、両者の地点は本来的には同じ位のレベル上にあったものであろうが、河川の開析・氾濫等の作用により、西縁部分が浸蝕されたものであろうと思われる。また、当遺構の東から北側にかけては、P₂土壌が検出された面より約20～30cm程度の落ち込みが見られ、P₁を含めて西側の崖縁まではほぼ平坦に続く面を構成している。この面はSPA地点のレベルと同位に存するものであるが、P₁土壌の南東壁部分の一部がP₂・P₃土壌と同じレベルにあることから、自然的な地形における傾斜差を配慮してもなお、SPA'地点の本来的な掘り込み面はそれより上

位にあったと推察される。したがって実際の浸蝕範囲は、P₁の西側だけに留まらず、東側部分も含めた部分に及んだと思われ、周辺の落ち込み部分もまた同様の作用による結果なのであろう。



第16図 HブロックP₁平断面図



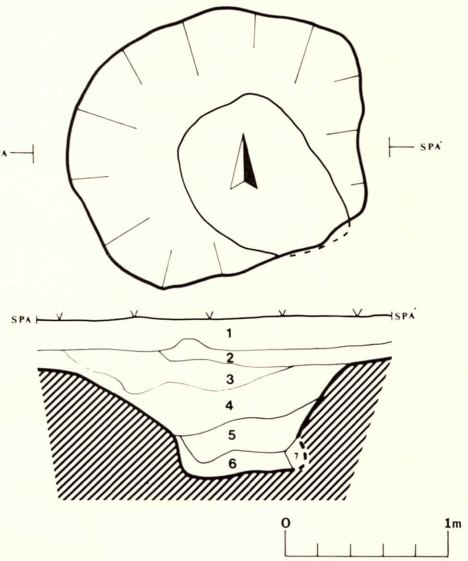
第15図 Hブロック土壌群

P₂土壌 (第17図)

上巾 1.8×1.6 m、下巾 1.1×0.8 m前後。検出面からの深さ約70cmの規模である。南寄り部分の壁の一部がオーバーハングする形にあり、下底部はその20cm位上の部分からほぼ垂直に掘り窪められている。P₁土壌の南東60cm地点に位置しており、現状における平坦面に検出されている。ただ、上層部分は攪乱された土で被われている所があったり、大粒の風化礫が浮き上がって混入している層のあることや、最下層が砂層で占められること等から、通常自然堆積とは異なり、洪水などによる二次的な作用の結果と思われる。したがって、P₂の周辺にあってもP₁ほどではないとしても、何らかの浸蝕を受けていることが予想される。なお、遺物は4層以上の覆土にはみられるが、その下層にはない。また、土性については下記の如くである。

1. 表土

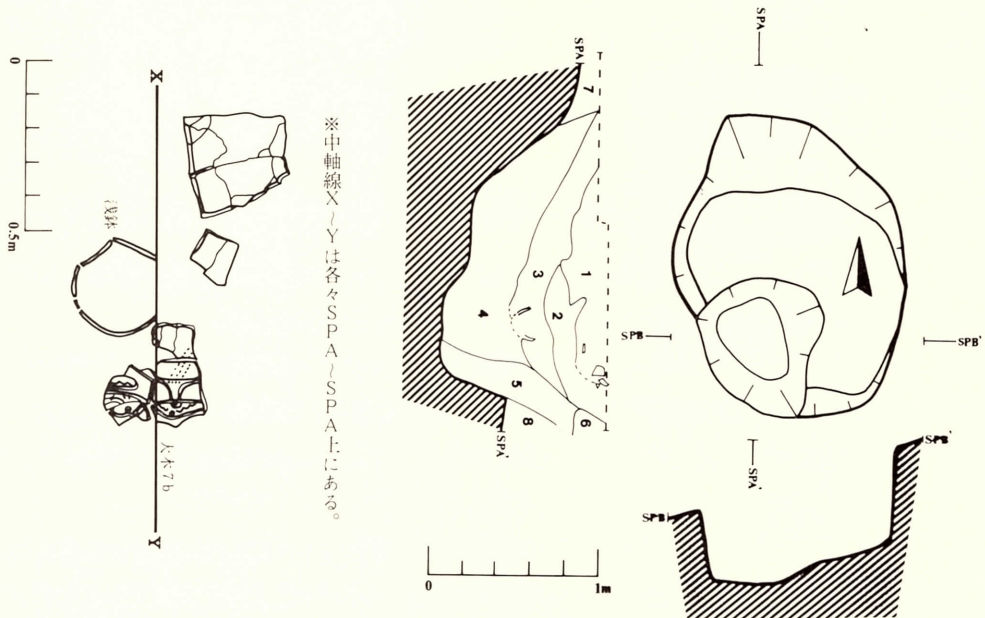
2. 黄褐色の攪乱土
3. 黒色土、土器片、風化礫が若干混じる。粘性が弱く、しまりは悪い。
4. 暗褐色土、粘性中位でしまりがいい。SPA→
中粒の風化礫を含む。
5. 暗褐色土、4より若干黒味がかり、粘性弱でしまりがいい。大粒の風化礫を含む。
6. 暗褐色土、粘性強く、粒子の整った緻密な層、砂質に富み、風化礫の混入は少ない。
7. 黄色を呈す砂層、粘性なくしまりがいい。



第17図 HブロックP₂平断面図

P₃土壌 (第18図)

P₁土 の南側1.6m付近に検出された。上巾は1.8×1.4m位の東西に長い楕円形を呈し、北側方向には中段を有す。下底部は、最深部で0.4×0.5m程度の径となる。断面図における最上層



第18図 HブロックP₃土壌平断面図と遺物出土状況平面図

の点線は、P₃の平面を確認するために掘り下げたことを意味しているが、実際の掘り込み面がどの層位からであるかは判明しない。このピット周辺の地山は起伏に富み、堆積層そのものも一定しない部分があるが、砂壤土で形成される層が多い。水力などによる影響を受けたものであろう。P₃は、それらを切り込んで作られたものと思われる。しかし、P₃の埋土そのものもまた、砂を多く含む部分にあって水力に関わる土砂の流入による結果と思われ、P₁・P₂と同様の経緯を経たものであろう。ピット外周辺における若干の土器片の出土は、ほとんど黒色土の6層からの出土であるが、P₃内においては、1・3・5層内の黒色～暗褐色土中にみられる。なお、1・6層は砂をあまり含まないが、3・5層には多くみられ、4層にあっては砂質土に近い。

以下は土性について記す。

1. 黒色土層 粒子の細かく整った非常に緻密な土層。粘性強く、炭化物を散在させる。1～2 cm程度の風化礫を若干混入する。
2. 暗褐色土層 比較的多くの砂を混入しているが、しまりは良い。粘性あり。1～2 cm程度の風化礫混入。
3. 暗褐色土層 2層に比して砂の混入が多く粗となり、小礫も若干入ってくる。
4. 暗褐色土層 全体に3～5 cm程度の礫が混入。やや荒い砂を多量に含む。完全な砂質土ではない。色調は3層よりやや明るい。
5. 黒褐色土層 6層より砂が多く混入する粗な層。礫混入はとどろなし。
6. 黒色土層 軟質でやや粘性あり、有機質土に幾分か細砂を混入。2～3 cm程度の風化礫混入。炭化物なし。
7. 暗褐色土層 4層と区別はむずかしい。ただ、礫の入り方が少ないと同時に小型化している。
8. 暗褐色土層 砂壤土、3～5 cm程度の風化礫の混入が多い。

〔出土遺物〕

土壌群の周辺部も含めて、縄文土器片1,576点、石器30点、内黒土師器2点、陶器1点、鉄製品3点である。

縄文土器；（第19図～20図 図版24）

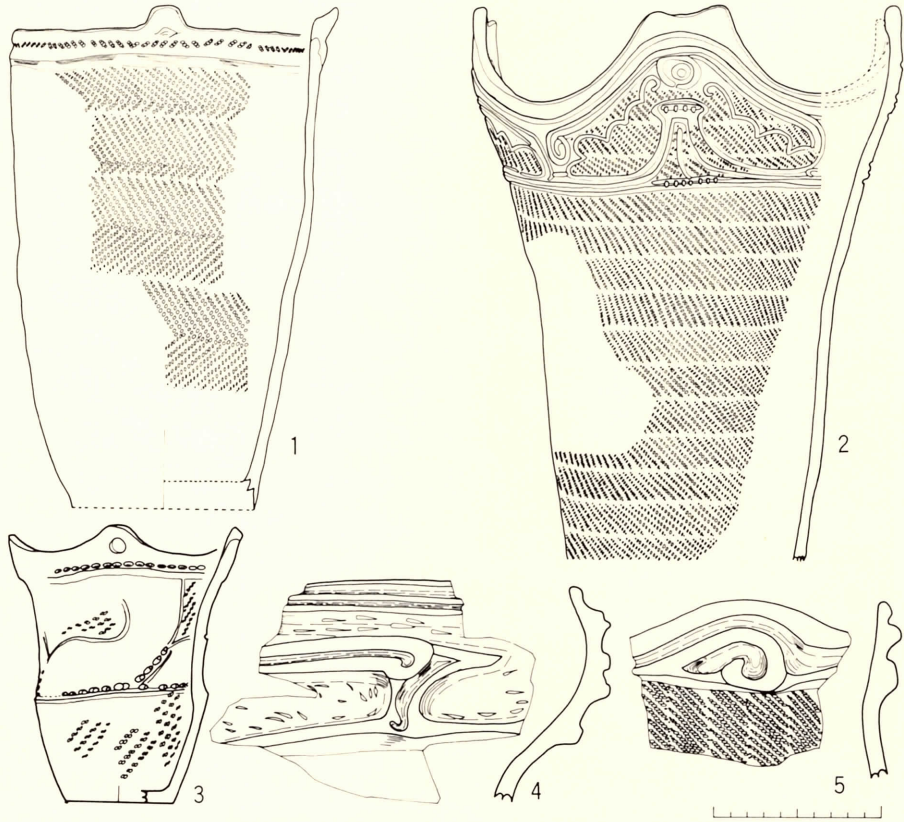
土壌埋土中の土器片は第8表のように少なくしかも小破片であり、ほとんどはピット直上面を含む周辺の第1層～3層から出土している。ただ第18図に示したようにP₃では、埋土第3層に、地文のみの浅鉢1個体（図版24の6）検出された。浅鉢は地文のみの口縁が外傾ぎみにそっている平縁で底部に網代痕を残す。地文は磨滅のため一部しか見えないが、4/6残存で復元可能、口径27.5 cm、底径12.0 cm、器高13.9 cmである。胎土に金雲母、石英含み、にぶい褐色を呈す。埋土上面（約50 cm上部）に大木7b（第19図2）の土器片があり、ほぼ同期とみられる。

第19図1の土器は、底部を欠くが2/3残存、円筒形の深鉢で、胴部横方向の羽状縄文、口縁部に1本の撚糸圧痕文の横帯が施され、1ケの突起をもつ。口径18.2 cm、器高推定30 cm、色調は褐色、胎土に金雲母を含み焼成は良好である。胴部下半は二次加熱とみられる赤変が著しい。同じ第2群1類土器は第20図2～5などがみられる。

第19図2の土器は底部を欠き、1/2残存、大きな山形突起を4ケもつ大波状口縁の深鉢であ

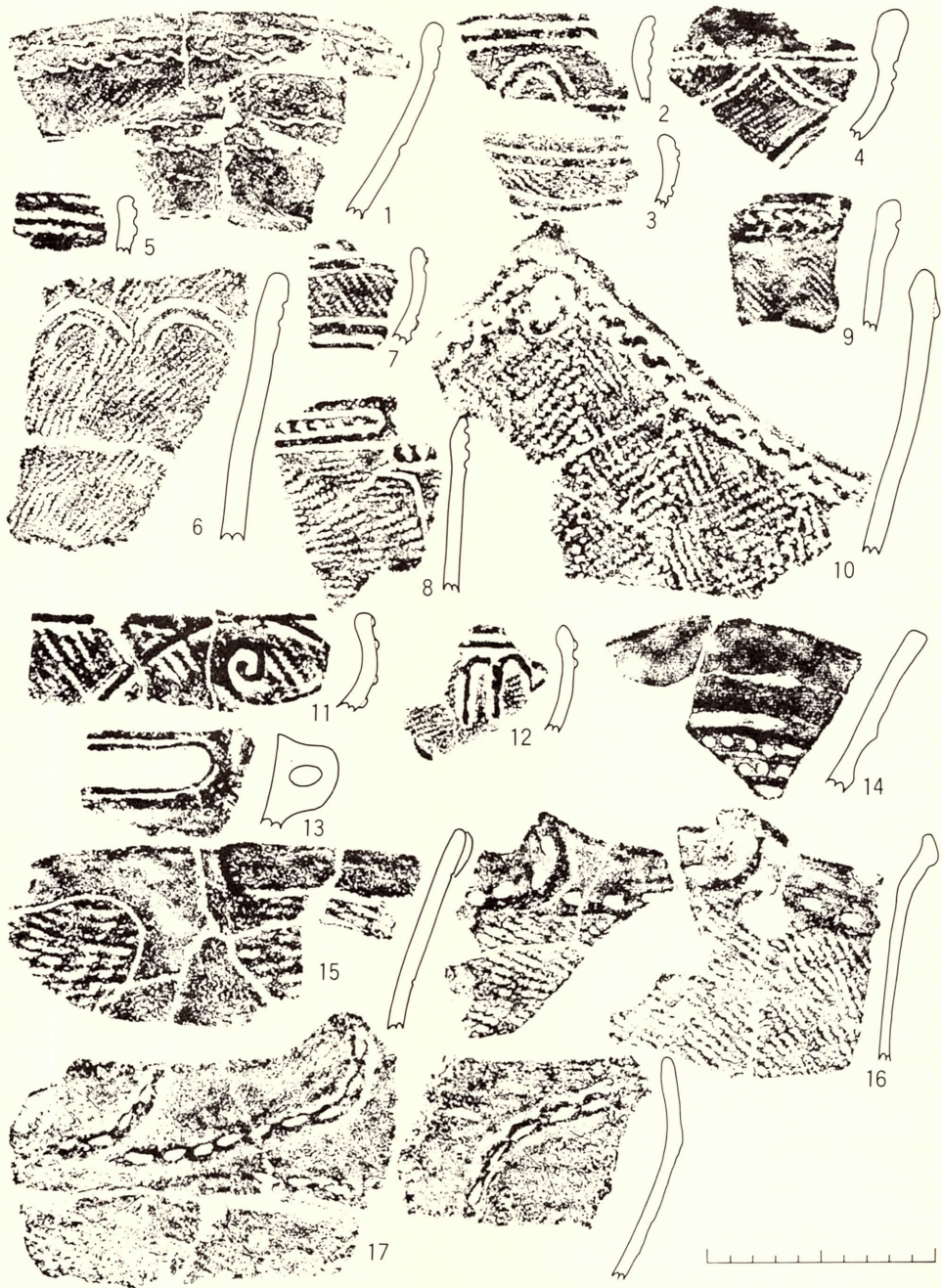
第8表 Hブロック土壌群層位別出土数

分類 地点	口								胴部	底部	剥片石器					磨石 製器	凹石	磨石	石皿等
	1群	2群	3群	4群	5群	6群	7群	8群			1群	2群	3群	4群	5群				
1 層		7	8				2		103	15	8	2		3					
2 層		8	16	6			1	6	628	40	2			2				1	
3 層	1	16	6	1					210	19	1			4					
4 層																			
5 層				2					12										
P ₁ 埋土		1						2	14	1		1							
P ₂ 埋土									1										
P ₃ 埋土		1			1				5										
不明	1	4	13	3			2		383	37	1			4			1		
合計	2	37	43	12	1	0	5	9	1,356	112	12	3	0	0	13	0	0	1	1



1 (第2群1類a) 2 (第2群2類b) 3 (第7群)
4 (第4群) 5 (第3群6類)

第19図 Hブロック土壌群出土土器 (1/4)



1 (第1群) 2~10 (第2群) 11~13 (第3群) 14~17 (第7群)

第20図 Hブロック土壌群出土土器 (1/3)

る。P₃埋土層上部より出土し、文様帯は口縁部のみ、胴部はR-Lの単節斜縄文である。突起毎に沈線文による曲線区画文、渦文、連弧文が施されている。胎土に金雲母、石英粒を含み焼成は良好である。胴部には煤が付着している。器形は異なるが同じ第2群2類の土器は第20図6・8～9などである。この類が、出土した第2群土器の中で比較的多い。

第20図10の土器は、両側から交互押圧したジグザグ状の隆起線が口縁部をめぐる、大波状口縁の突起部に渦文をつくるもので、第2群3類に分類されるものである。地文は縦の羽状縄文であり、色調は暗褐色を呈す。同じ2群3類土器片は他に8点である。

第19図5、第20図7、11～13は、第3群土器（大木8a）である。渦巻状の突起、細い隆起線による区画文様表現、橋状の把手、隆起線を沈線でふちどるもの等43点の出土をみた。器形はほとんどキャリパー形の深鉢と思われるが、第19図5は、やや外傾ぎみの口縁となっている。

第19図4は、口縁部は太いなめらかな隆起線による渦巻文のみられるキャリパー形深鉢である。隆起線は両側から横ナデ調整され、広い沈線帯には刺突文が施されている。第4群土器（大木8b）とみられるが、胎土は磨滅をうけてシルト質化している。同じ第4群土器は他に12片出土している。

第19図3の土器は、胴部中ほどからやや外反ぎみにそり、有孔突起をもつ大波状口縁の小形深鉢である。低い隆起線の陵線にそって刺突文が施され、その内部は沈線で区画し外側を磨消している。地文は複節斜縄文、 $\frac{2}{3}$ 残存で口縁部上端はミガキが加えられている。石英粒を含み焼成は不良である。胴部に赤変が見られる。後期初頭に比定できるので第7群に分類した。同じ類の土器群は第20図14～17など5点出土した。いずれもにぶい黄橙色の色調で、連鎖状隆起線、浅い鱗状突起、口縁部ミガキを加えた無文帯をなす等の特徴がみられる。器形は口縁部外傾又は内傾する深鉢、浅鉢である。

縄文中期又は後期初頭の土器片が散在しているが、P₃周辺に第2群土器片が多く、又、P₁付近は第3群、4群及び7群土器がより多く集まっている傾向がある。Hブロックの中では、本遺構周辺に遺物が集中することから、土壌の使用時期にかかわっていると推定される。

石器； 出土点数30点、うち石鎌が多い。他に石核類や剥片類、碎片など90点出土している。

土師器・須恵器； 内黒坏胴部1点、高台坏底部1点のみである。高台坏の高台径7.8cm、内面ヘラミガキ後、黒色処理を施している。高台部の成形が不完全でゆがみがある。

陶器； 瀬戸系の磁器化した陶器片1点のみである。

鉄製品； 鍋の体部破片とみられるもの1点、釘1点、種別不明の小片1点だけで、いずれも土壌埋土外の周辺出土である。

(8) Id59、Ie59の土壌及び石組遺構

Id59土壌 (第21図)

I e ブロックの中軸線より東側に約 9 m の地点に検出。表土面より約 20 cm 下で確認されたものである。プランで見ると限りでは重複関係が判明せず、同一の土壌にも思われるが、本来的には二つのピットがあったものと推察される。7 層部分の不自然な立ち上がりは土壌のくびれ付近に相当し、また、埋土の様相が同層を境にして異なることから、この 7 層は P₁ と P₂ の境界、即ち壁としてとらえることが可能である。両者の先後関係については、重複する部分と思われる覆土のあり方から、P₁ が新規のものと推察される。なお、P₂ の東側部分には表土下に 10～20 cm 位の落ち込みがあり、その堆積層がそのまま P₂ の上部にまでつながっているが、この凹みと土との関係は明確ではない。各土壌の規模については下記の如くである。() 内は推定。

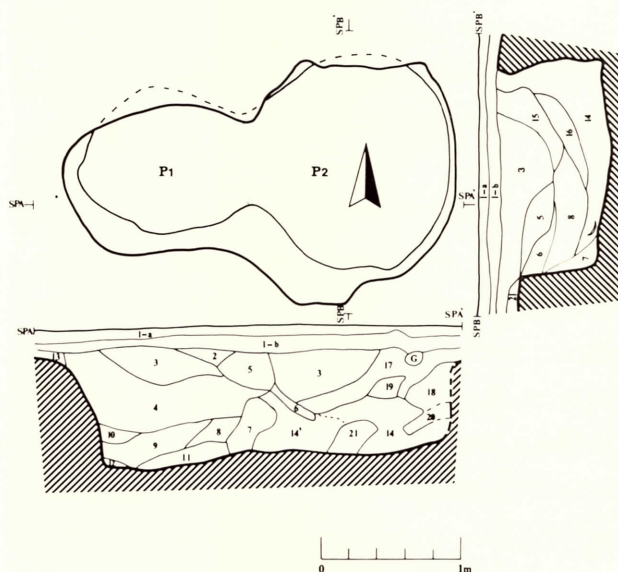
第9表 計測値

測定値 ピット	上 巾 径 (cm)	下 巾 径 (cm)	深 さ (cm)
P ₁	(145) × 100	(130) × 110	90
P ₂	(145) × 155	(140) × 152	75

以下、土層断面における土質について記すが、不明な部分のあることをも付記しておく。

1 - a、b、表土

2 - 黒褐色土 有機質を胎土とし、小さな風化礫及び小形の礫を含む。



第21図 Id59土壌平面図

- 3-黒褐色土 土質はほぼ2と同じ、粒子は細かく、しまりがいい。霜降状に極小の礫粉を含み、全体に小さな炭化物が混在する。
- 4-黒褐色土 3より若干褐色味が強い。胎土自体に含まれる砂土が多く、ザラザラした粘性の弱い土。小礫が全体に均等に入る。
- 5-褐色土層 微小から5cm位までの礫層。土性は乾性で粘質弱。
- 6-暗褐色土 土層の有機質土壤に比較的小量の砂質土が混入。
- 7-暗赤褐色土 暗赤褐色の粗砂を胎土とし、全面に3~5cm程度の礫を含む。
- 8-暗赤褐色土 7より若干暗い色調。砂壤土を胎土とし粘性弱。粒の小さな礫を若干含む。
- 9-暗褐色土 砂質植土、風化礫(1~2mm大)がまばらであるが全体に入る。
- 10-暗赤褐色土 8より褐色が強い。粗砂の入った砂壤土。
- 11-暗褐色土 9よりも含まれる砂土が少なくなり、粘性がやや強い。粗雑な胎土で3~5cm大の小礫を全面に含んでいる。
- 12-褐色土 ほとんど砂土。
- 13-灰褐色土 細やかな砂土。
- 14-黒褐色土 軟質で粘性弱のやや雑な層。3cm前後大の礫が全体に入る。
- 14'-不明だが、殆んど14に類似したものであろう。
- 15-褐色土 大小の礫が混じる。胎土は8層に似ている砂壤土。
- 16-暗褐色土 3~5cm大の礫が整然と層をなす礫層。砂壤土を胎土とする。
- 17-黒褐色土 全体に小礫を含む。炭化物も多い。
- 18-暗赤褐色土 3~4cmの風化礫混入。粗砂が多い。
- 19-黒褐色土 1~4cm大の礫混入。しまり良好。
- 20-不明
- 21- Id 59の2層に同じ

Ie 59 土壌 (第22図 図版5)

Id 59土壌の南側約1mの地点に検出され、Ie 62石囲い組み遺構との切り合い関係にある。隣接するId 59土壌との関係については、当遺構の1・2層がP₂によって切られて掘りこまれているため、P₂より以前の遺構であることが察せられる。また、石囲い遺構の方は当遺構の北壁の一部を破壊しているため同様のことがいえる。

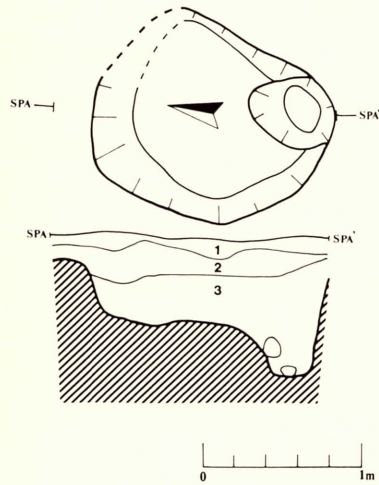
土壌の規模は上巾で約150×120cm位であり、下底部分については断面図でも解る通り、南側が特に窪む。この部分での深さは検出面より約60cm、他の部分にあっては30cm平均である。なお、窪み部分には15~20cm大の礫が混入する。

覆土については下記の通りである。

- 1 - 黒色土 遺物はこの面に多い。他詳細については不明。
- 2 - 暗褐色土 緻密でしまりがいい。粘性は弱い。微細の風化岩、小礫を含む。
- 3 - 黒褐色土 2層とはほぼ似た色調を示す。小礫を全体に含み、軟質で比較的粗い。I d 59土の21層に相当する部分である。

以上、当遺構の概略について記したが、土層・断面図のあり方が周辺のそれとの脈絡を

欠く部分があり、不明な点のあることを否めない。したがってここでは、先後関係については前述の通りで大過ないが、性格等については触れない。



第22図 I e 59土層断面図

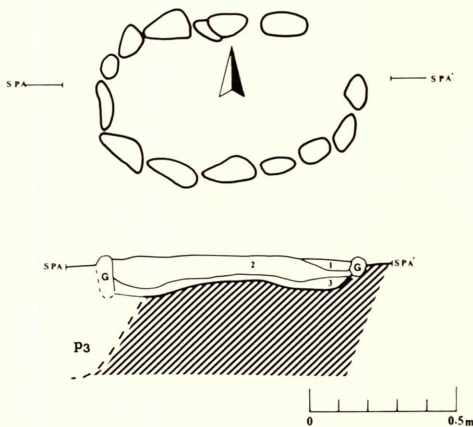
I e 59 石組み遺構 (第23図 図版5)

I e 59グリッド内から検出された。南北57cm、東西90cm、深さ10~14cmの長円を呈す石囲い遺構である。使用された石は14個あり、小さいもので6×8cm、大きいもので12×17cm大である。北東部分における配石間隔が広がっているが、流失したものであろう。

I e 59土層の北壁の一部を破壊して構築されており、両者間の新旧関係は明白であるが、この遺構そのものが単独に存在するのか、あるいは他の何らかの遺構に関わる施設の一部であるのかは明言できない。

覆土は、地山に至るまで大別三層に分けられ、

1. 褐色土 細かい砂を含む砂土 (基本層IIに相当)
2. 暗褐色土 I層より砂の混じりが少ない。軟質でしまりが少ない。風化礫を全体に含む。炭化物が若干混入。
3. 黒褐色土 全体に微少の風化礫を含む。



第23図 I e 59石組み遺構

の順に堆積している。このうち2層には炭化物が含まれているが、何れの層にあっても焼土は含まれず、炉址としての機能を果たし得たかは不明である。また、当遺構内からは後述する縄文土器片が出土するが、時期的には大差ないとするものの、構造的には石組みに関わる施設の一部を形成するものではない。土器類は2層の上位面以上からの出土であり、どちらかといえば、石組み部分のレベルより高くなっている。したがって、これらの遺構は、本来的には当遺構との関わりよりも、基本層Ⅱとのそれから派生してきたものととらえられよう。このことは遺構外のⅡ層中に土器が浮き上がって存在している例からも首肯される。なお、当遺構の周辺には Id 59、Ie 59土壌等があるが、その他、柱穴とみなされる遺構や、住居跡の壁痕も検出されず、結論的には性格不明の遺構といわざるを得ない。

〔出土遺物〕

土壌及び石組遺構周辺の Id 59～62、Ie 59～62、If 59～62グリットからは、縄文土器片 876点、石器28点、陶磁器5点、鉄製品1点、銅製品1点の出土である。

縄文土器；（第24図～第25図 図版25）

出土破片数 876点（口縁部84、胴部723、底部69）のうち復元可能なものは8点だけである。第3群土器（大木8a）を主にして、第2群土器が混在している。ピット埋土内にも底面から上面まで流入した形でかなりの量が出土した。ピット3及び石組遺構周辺に遺物が多く、時期的にかかわりがあるものと推定される。

第25図3や4は第2群1類土器で同類のものは4点ある。第24図1はきざみのある太い隆起線の横帯及び口縁部に立体的な突起をもつ大破片で、口縁やや外傾する深鉢であろう。第2群3類に分類したが、同類の土器は5点である。第24図2は平行沈線で胴部に区画文様を施したもので第3群2類に分類され、器形は異なるが同類のものに第24図5や第25図10などがある。細い隆起線の曲線文、区画文にそって沈線が施された第25図8や13は、第3群3類土器であり9点の出土をみた。第24図4や7、第25図の9は口縁部が強く内湾した浅鉢で、口唇部に4ヶの渦巻状突起を有する第3群4類土器で、他に3点ある。第24図3や第25図6や11、14は渦巻状の突起、貼付文、把手など第3群6類に分類されるもので、10点出土した。第25図12は、細い隆起線で区画したキャリパー形の深鉢の口縁部だが、渦巻文の横に「フ」字状の棘がついており、第4群（大木8b）として分類、他に1点のみである。第24図6は地文のみと思われる壺形の土器で、このような器形は、本遺跡でこの1点だけである。

石器； 出土数は第10表の如く、総数28点だが、その他の石核や剥片類は25点であった。

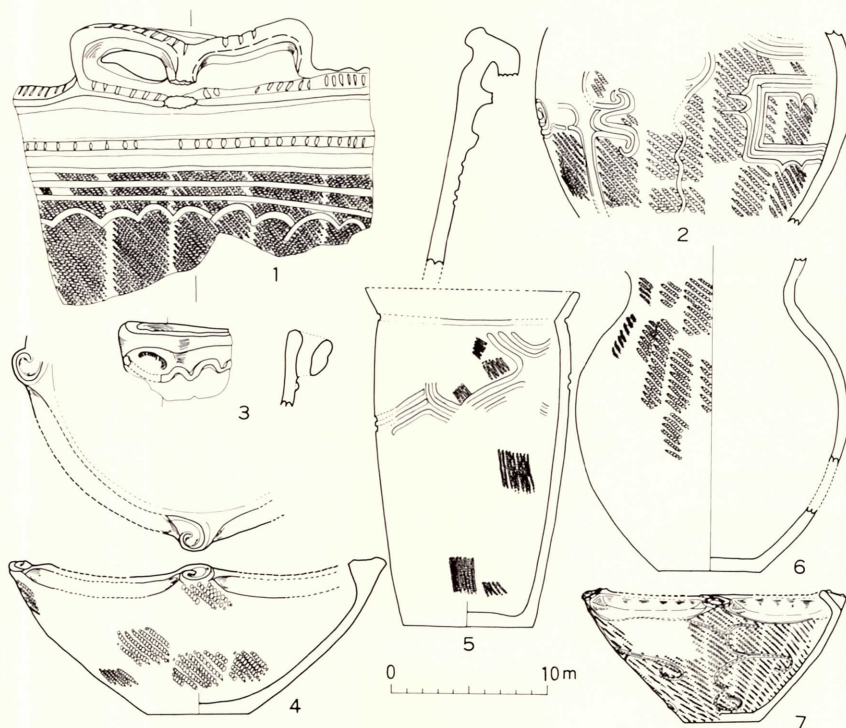
陶磁器； 灰青色の線文様の入った磁器の体部細片1点、陶器は皿の底部1点、口縁部1点、体部3点、表土から壺形の口縁部1点が出土している。いずれも近世のものであろう。

鉄製品； 鍋の底部片で、底部は 7.5 cm、体部の立ち上がりが明瞭である。（図版42の27）

銅製品； 第89図12（図版42の30）第2層よりの出土で、刀の鏝と思われる、半分欠損している。厚さ 3.5 mm、縦 4.8 cm、横（推定） 4.2 cmの比較的小形のものである。

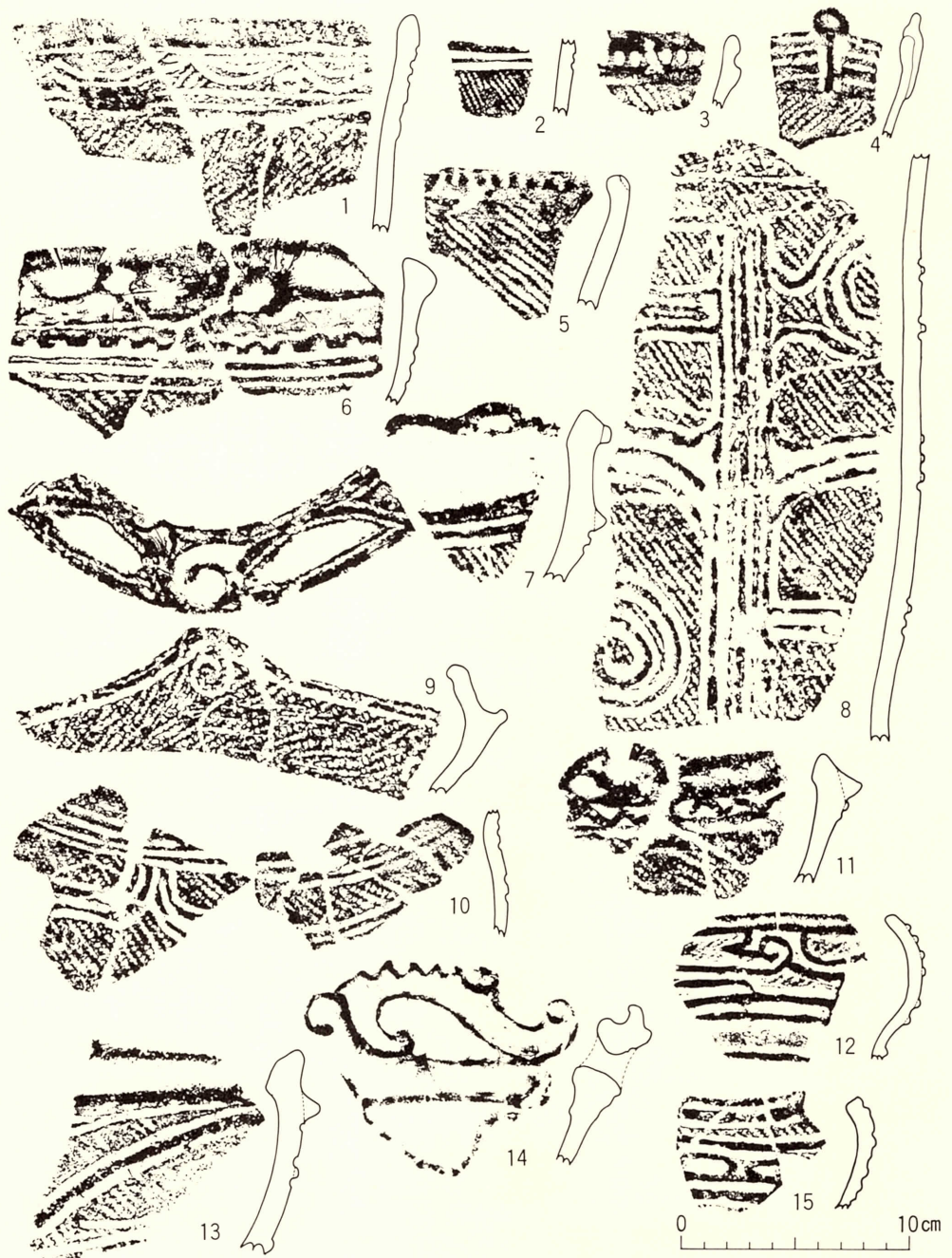
第10表 Ie・Idグリット出土遺物

分類 地点	口								胸 部	底 部	剥片石器					磨石 製器	凹 石	磨 石	石 皿等
	1群	2群	3群	4群	5群	6群	7群	8群			1群	2群	3群	4群	5群				
1 層											3				5				
2 層		2	4	1	1			3	160	10	3		1						
3 層		8	25		1			1	280	16	1			2	1		2	1	
P ₁ 内		3						3	71	5							1		
P ₂ 内			6					2	68	8							2		
P ₃ 内			1					3	20	3					1				
石組									1										
不明		7	9	1	2			1	122	24	1					1		2	
合計	0	20	45	2	4	0	0	13	722	66	8		2	7	2	1	5	3	



1（第2群3類a） 2、5（第3群2類） 3（第3群6類） 4、7（第3群4類） 6（第5群）

第24図 Ie・Idグリット出土土器（1/4）



1～5(第2群) 6～11, 13, 14(第3群) 12, 15(第4群)

第25図 Ie・Idグリット出土土器(1/3)

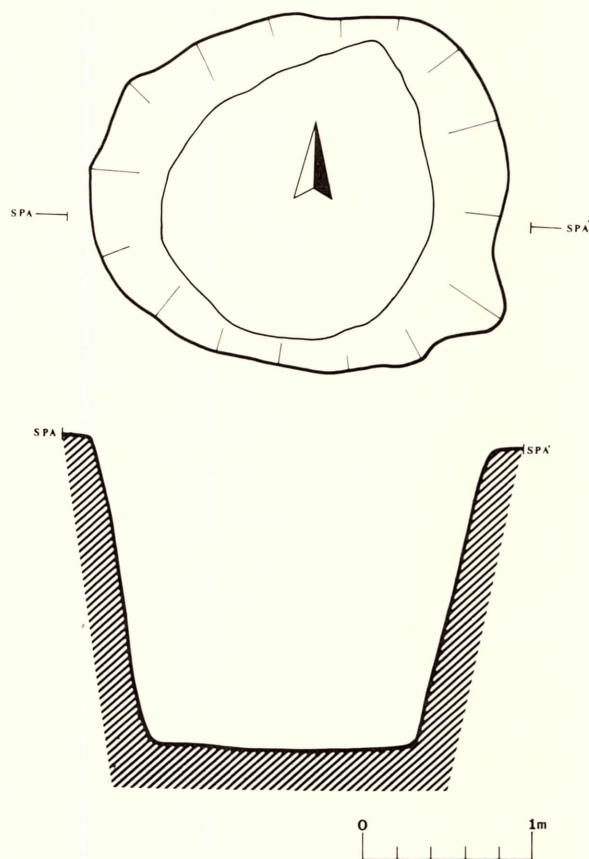
(9) Ji95土壌

伝大手門跡と伝誦される地域内に位置する土壌である。Ji95グリッド内に検出され、上巾径2.4×2.1 m、下巾径1.6×1.7 m、深さ約1.8 m位の規模である。所謂ピーカー状を呈す土であるが埋土の状況については不明であり、基本層との関わりについても同様である。

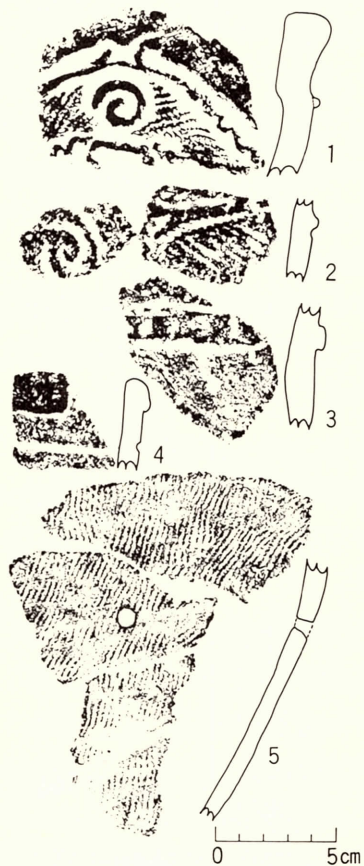
〔出土遺物〕

縄文土器； 出土破片数は120点（口縁部13、胴部93、底部14）である。埋土層の土質については不明であるが、遺物とりあげ時点では5層に細分してあり、それによれば第3層、第5層からの出土が多い。第2群土器が大部分で、撚糸圧痕を多様するもの（第27図2）、太い隆帯をもつもの（第27図3）などが主である。又図1のように大きな山形突起もみられる。第27図5の細い撚紐による斜縄文と補修孔をもった地文のみの浅鉢1個体分（胴部1/3残存）も、第3層より出土している。

石器； 石匙状石器1点のみである。



第26図 Ji95土壌平面断面図



第27図 出土土器 (1/3)

2 北半部 (A-E区) の検出遺構

(1) 掘立柱建物跡及び柱列穴 (図版2)

Cg9 建物跡 (第2, 28図 図版3)

Cj 12、Cj 9 掘立柱建物跡(以下建物という)より北側約 3 m に位置する。梁行方向は N 8° 17'E を計り、Cj 12、9 建物の桁行方向とは直交せず、これより若干東偏している。梁行 4.04 m (13.33尺) 1 間、桁行 4.2 m (13.86尺) 2 間、建物面積 16.97 m² (5.14坪) の小規模な方形の建物である。

柱穴の掘り方は南東隅の P 10、11 を除いて径 0.68~0.63 m の不整な円形をなす。検出面下の深さは 0.48~0.12 m で深淺の差が著しい。据え方は 0.18~0.21 m の円形をなし、P 4、5、10 では柱脚痕を径 0.10 m 前後の自然石が巡り、固定強化に利用されている。確認された建物内では、関連するとみられる遺物は検出されていない。

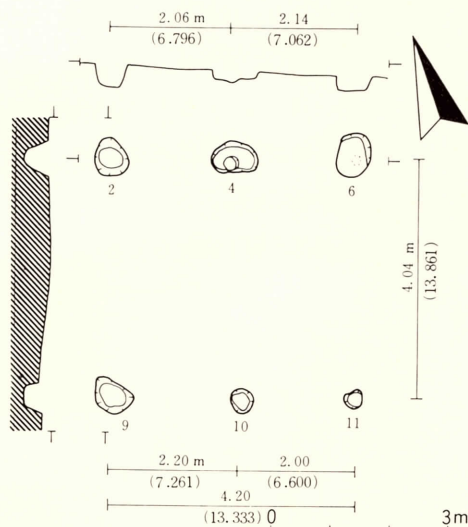
Cj 12 建物跡 (第2, 29図)

Cj 9 建物跡と重複し、梁行方向は N 13° 28'E を計り、ほぼ同一方向に位置する。梁行 6.06 m (20.00尺) 2 間、桁行 16.62 m (54.85尺) 7 間で、建物面積 77.55 m² (23.5坪) の

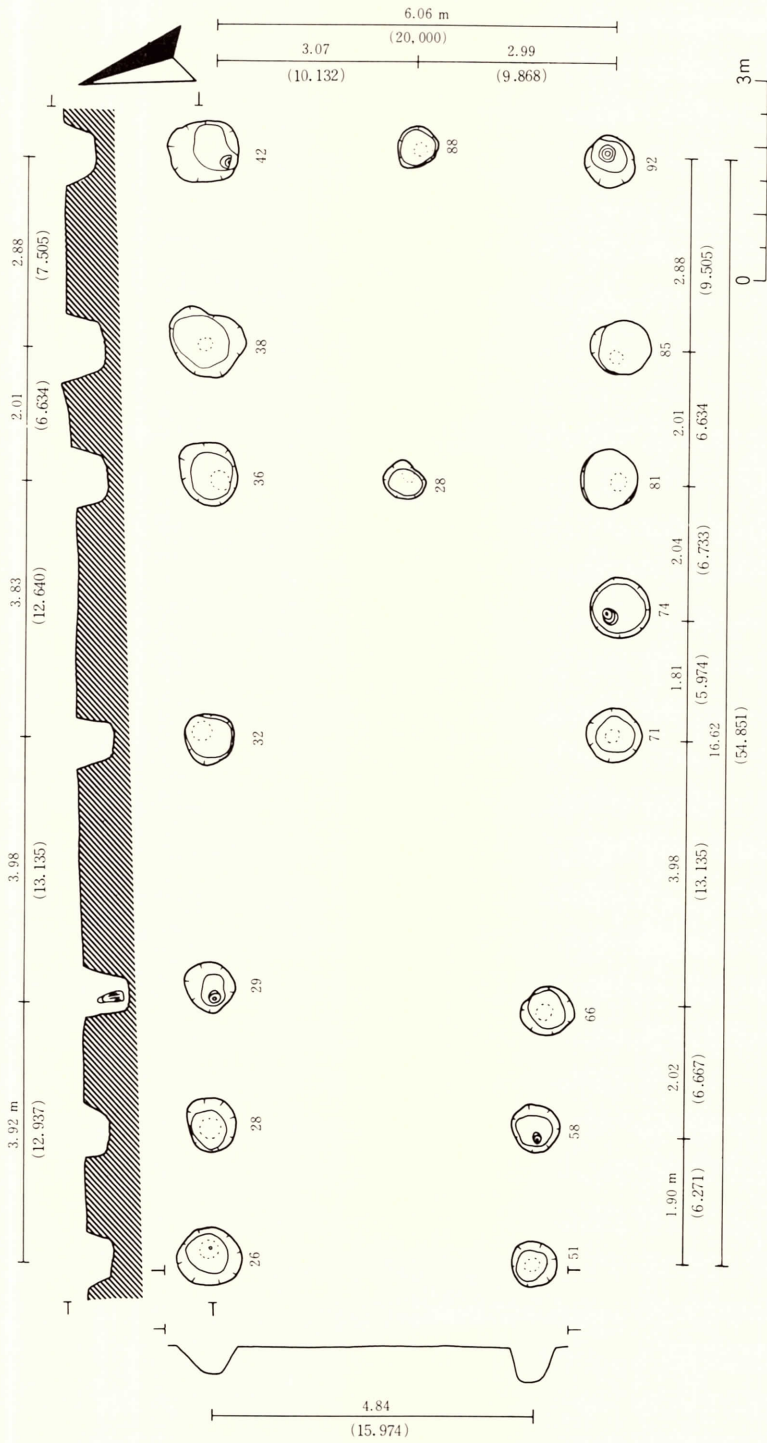
矩形をなす建物である。梁間西面は 4.84 m (15.97尺) 1 間で、東面より 1.22 m (4.03尺) 狭少となり、桁行方向では南・北面で広狭の相異があるが、いずれも柱穴配置には規則性が認められる。

桁行方向の柱間は 1.90 m (6.27尺) ~ 2.04 m (6.73尺) が最小であり、3.83 m (12.64尺) ~ 3.98 m (13.14尺) は最小柱間の倍数をとる。東隅では東西の梁間 6.06 m (20.00尺) を 2 分する 2.99 m (9.87尺) ~ 3.07 m (10.13尺) となる。梁行方向にあっては西面の 4.84 m (15.97尺)、中央部分では 6.06 m (20.00尺) となり、それぞれ最狭柱間を 2.5~3 倍する柱間配置である。

柱穴の掘り方は 4 棟のうちもっとも大きく検出面径 0.80 m 前後の円形をなし、底面積は 0.50 m² 前後である。検出面下の深さは P 78、88 の 0.19 m を除き、0.33~0.58 m である。南面柱列は検出面がやや浅いが、底面高は北面の柱列に比して 0.04 m 高い。掘り方底部より壁面にかけては橙色に酸化した変色部分が観察されるほか、第 V 層の礫層に及んでいる柱穴では柱脚痕に近接して拳大の玉石が円形に残る。据え方の認められるものを含むほか P 29、42、66、74、92 には柱根が遺存する。柱根はほぼ円形をなし、木口は径 0.25~0.30 m を計る。底面より不定方向に 10~15° の傾きを有しているが、据え方が直上していることから廃絶以後の傾斜とみられる。



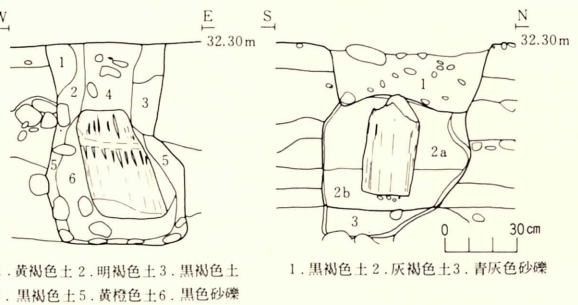
第28図 Cg9 建物遺構



第29図 Cj112建物平面図

建物敷地内では建物に関連する炉址、あるいは土間叩き等の痕跡は認められず、柱根以外の遺物は出土していない。P32付近にのみ焼土粒の混入する暗褐色土の薄層が散見されるが柱穴埋土には認められない。

複合するDa12溝は内部柱穴P78、88を切ってCj12溝より新しく、北東隅柱穴P42はP43を切ってCj12建物がCj9建物より新しい。



第30図 Cj12建物P74及びP79の断面図

Cj9建物跡 (第2, 32図)

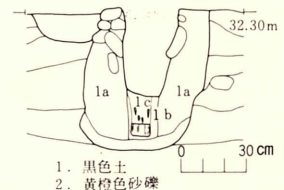
梁行8.53m(28.15尺)4間、桁行16.79m(55.41尺)7間で確認された建物中ではもっとも規模が大きい。北面側廻り柱穴の一部はCj12建物柱穴によって失われているが、一定の規則性をもった配置を示し、梁行方向N14°48'Eの長方形を呈する。

北東隅を除く側廻り柱間は1.06m(3.50)~1.26m(4.16尺)を計って多少の出入りがあるが、最狭の等間とみられる。内部柱間は1.90m(6.27尺)~2.25m(7.43尺)、2.81m(9.27尺)~3.08m(10.17尺)となり、それぞれ最小柱間の整数倍をとる。西面側廻りの3間P48-59はP69-68を3等分し、P70、72、79は2等分する配置である。

柱穴の掘り方はいずれも円形で、側廻り柱穴が径0.50×0.47mに対し、内部柱穴は0.63×0.67mでやゝ大きく、検出面下の深さも0.48mで側廻り柱穴に比して0.16m深い。隅柱、または荷持柱とみられるP33、37、39、49、68、75、93は検出面下0.67~0.52mを計る。しかし柱痕は遺存せず、P65、75、145に腐蝕の著しい木片が残存したのみである。柱脚痕は内部柱穴P43、68、69、84では径0.11~0.13m、側廻り柱穴のP45では0.09mのいずれも円形である。P69、74には柱根を回る拳大の玉石が認められ、Cj12建物柱穴と同様の方法が認められる。また、一部の内部柱穴の底面には橙色に変色した酸化部分がみられるが埋土に著しい相違はない。

遺物は柱穴の腐蝕する木片のほか、東内柱柱穴P89柱痕際に砥石片が出土しているのみである。

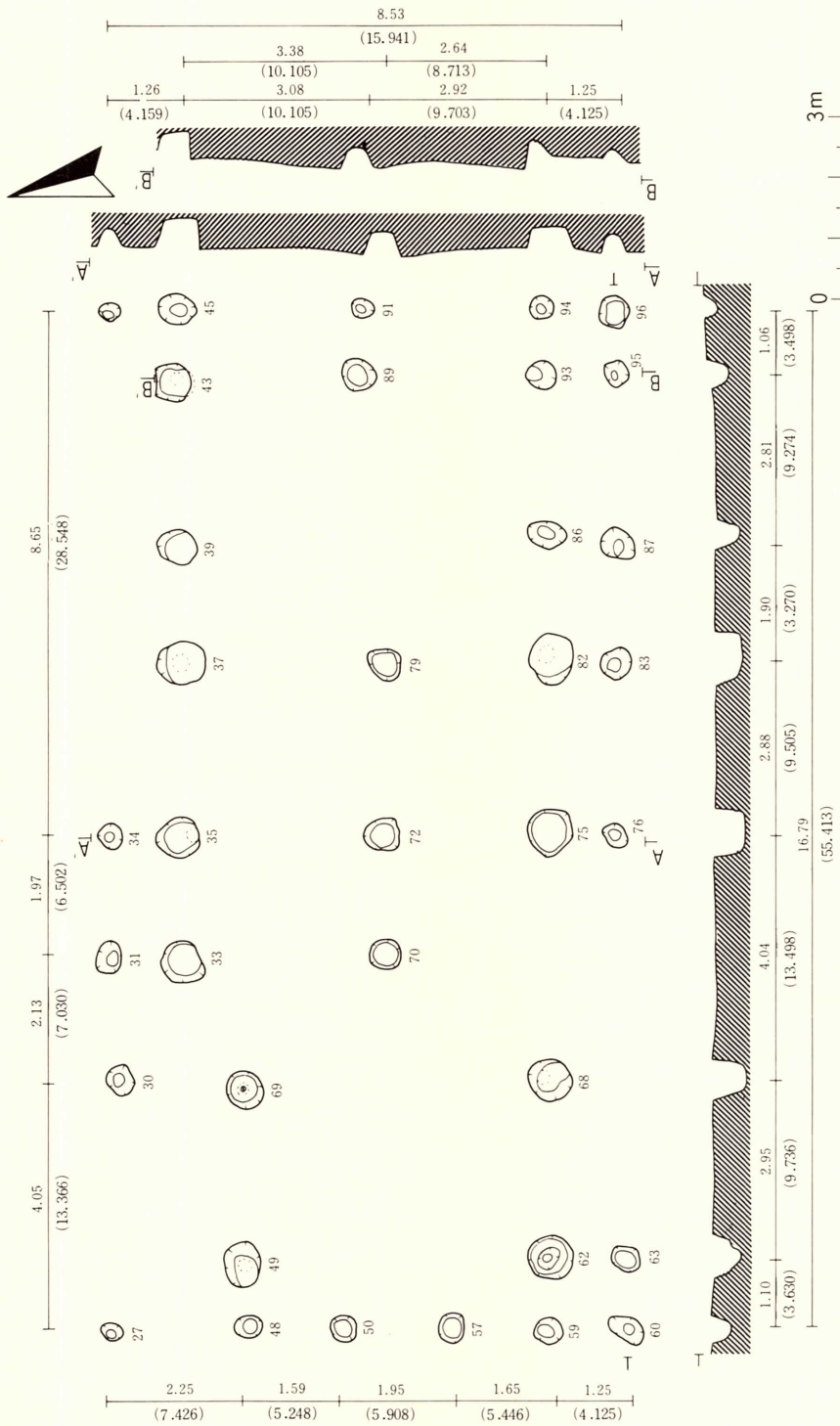
重複するCj12建物とは北東隅柱穴P43で複合しているが、切合関係によってCj12建物の先行する建物である。そのほかP48、89、91は東西に走るDa12溝に複合し、柱穴はいずれも覆土を切っており、Da12溝廃絶以後の建物と認められる。



第31図 Cj9建物P69断面図

Dd15建物跡 (第2・33図)

Cj9建物の南西方向に位置し、北東隅柱穴は1.20mで近接している。南北の桁行方向はN



第32図 Cj9建物平面図

6°28'EでC j 12、9建物と直交せず
7°~8°20'東へ偏る。梁行5.08cm（
16.77尺）3間、桁行7.79cm(25.71尺)
4間の建物であり、内部柱穴を欠く。
梁行柱間は1.69m(5.59尺)で桁行柱
間の2.5間を3等分する配置をとり
桁行柱穴は1.69m(5.58尺)~2.21m
(7.29尺)を計る。若干の広狭がある
が、桁行柱間平均1.92m(6.32尺)
となって等間とみられる。

柱穴は検出面径0.29×0.35m~0.
65×0.50mの不整な円形をなし、東
面の桁行柱穴と南西のP 138、135
がやゝ大きく、検出面下の深さも北
東隅柱穴を除いて0.40m前後と深い。
据え方はP 134、137でのみ確認さ
れ、径0.28~0.24mの円形である。

埋土には炭化物の混入する暗褐色土

が入り、P 120、123には0.10m以下の玉石が含まれている。

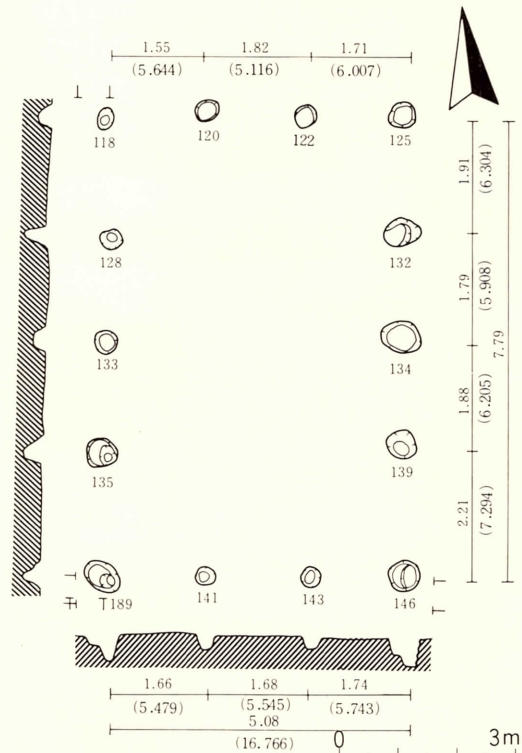
敷地内には若干の浅い小ピットが検出されるが、直接建物に関連する遺構とは認められず、
また、複合する遺構や遺物も検出されていない。

Ch59、Cj59、Da12柱穴列（第2図）

Ch59柱穴列（以下柱列という）はCj9建物の東約2.00m（6.60尺）に平行する南北11.82
m（39.01尺）6間の柱列である。P 104 - 114の4間は1.90m（6.27尺）~2.03m（6.70尺）
の等間であり、北2間ではP99-100、P 100 - 104はそれぞれ1.56m（5.15尺）、2.40m（
7.92尺）となってP99-104は南柱間2間に相当している。

柱穴の検出面径は0.49×0.58m、底面径0.34×0.35mではゞ円形をなし、Cj9建物の側廻り
柱穴に近い。据え方は確認される南・北端のP99、114で径0.12×0.19mの円形である。柱
根はP 100に遺存し、木口径0.07mの円形で、高さ0.19mを残す。

Ch59柱列と重複してP 106 - 112のCj59柱列もみられるが、一部に木根による攪乱があ
って明らかでない。P 106には0.18×0.16mの腐蝕した柱根、P 108では木片のほか、摺鉢の
破片が出土している。柱間はP 106 - 108、P 110 - 112が1.50m（4.95尺）~1.56m（5.15



第33図 D d15建物跡平面図

尺)、P 108 - 110 は 1.90 m (6.27 尺) で不定である。

D a 12 柱列は C j 12 建物跡の西方 1.20 m にほぼ平行して南北 4.10 m (13.53 尺) 2 間のみ確認される。P 47 - 52、P 52 - 55 はそれぞれ 2.10 m (6.93 尺)、2.00 m (6.60 尺) で等間とみられる。柱穴の掘り方は径 0.30 m 前後の円形をなし、上部の削平をうけて浅い。

第11表 掘立柱建物柱間寸法表

C g 9 建物

グループ	柱間位置	実測値	算出規準	造営規準	実測値 - 造営規準
1	P 2 - 9 P 6 - 11	4.04 m	2.121 m × 2	4.242 m (14.00 尺)	0.202 m (0.667 尺)
2	P 2 - 4 P 4 - 6 P 9 - 10 P 10 - 11	2.00 ~ 2.14	2.121	2.121 (7.00)	0.121 ~ 0.140 (0.462)

C g 12 建物

グループ	柱間位置	実測値	算出規準	造営規準	実測値 - 造営規準
1	P 62 - 28 P 28 - 29 P 51 - 58 P 58 - 66 P 71 - 74 P 74 - 81 P 81 - 85 P 36 - 38	1.90 ~ 2.04	1.970 m	1.970 (6.50)	0.070 (0.231)
2	P 36 - 78 P 78 - 81 P 42 - 88 P 88 - 92 P 38 - 42 P 85 - 92	2.88 ~ 3.07	$\frac{1.970 \times 3}{2}$	2.954 (9.75)	0.074 ~ 0.116 (0.383)
3	P 29 - 32 P 32 - 36	3.83 ~ 3.98	1.970 × 2	3.940 (13.00)	0.040 ~ 0.110 (0.363)
4	P 26 - 51 P 28 - 58 P 29 - 66	4.84	1.970 × 2.5	4.924 (16.25)	0.084 (0.277)
5	P 32 - 71	6.06	1.970 × 3	5.909 (19.50)	0.151 (0.498)

C g 9 建物

グループ	柱間位置	実測値	算出規準	造営規準	実測値 - 造営規準
1	P 48 - 49 P 59 - 62 P 60 - 63 P 59 - 60 P 62 - 63 P 75 - 76 P 82 - 83 P 86 - 87 P 93 - 95 P 94 - 96 P 93 - 94 P 95 - 96 P 89 - 91 P 44 - 45 P 43 - 45 P 34 - 35 P 31 - 33	1.06 ~ 1.26	$\frac{1.970}{2}$ m	0.985 (3.25)	0.075 ~ 0.275 (0.908)
2	P 48 - 50 P 50 - 57 P 57 - 59	1.59 ~ 1.79	$\frac{1.970}{3}$	1.642 (5.427)	0.052 ~ 0.148 (0.490)
3	P 27 - 48 P 30 - 69 P 30 - 31 P 31 - 34 P 33 - 35 P 70 - 72 P 37 - 39 P 82 - 86 P 83 - 87	1.90 ~ 2.25	1.970	1.970 (6.50)	0.070 ~ 0.280 (0.942)
4	P 72 - 75 P 79 - 82	2.64	$\frac{1.970 \times 2.5}{2}$	2.462 (8.125)	0.178 (0.587)
5	P 43 - 89 P 89 - 93 P 45 - 91 P 91 - 94 P 49 - 69 P 62 - 68 P 35 - 37 P 72 - 79 P 75 - 82 P 76 - 83 P 39 - 43 P 86 - 93 P 87 - 95	2.81 ~ 3.08	1.970 × 1.5	2.954 (9.75)	0.126 ~ 0.144 (0.475)
6	P 33 - 70 P 35 - 72 P 37 - 79	3.38	$\frac{1.970 \times 3.5}{2}$	3.448 (11.378)	0.068 (0.224)
7	P 68 - 75	4.09	1.970 × 2	3.939 (13.00)	0.151 (0.498)
8	P 63 - 76	7.04	1.970 × 3.5	6.895 (22.75)	0.145 (0.476)

D d 15 建物

グループ	柱間位置	実測値	算出規準	造営規準	実測値 - 造営規準
1	P 138 - 141 P 141 - 143 P 143 - 146 P 118 - 120 P 120 - 122 P 122 - 123	1.55 ~ 1.82	$\frac{1.970 \times 2.5}{3}$ m	1.642 (5.437)	0.091 ~ 0.178 (0.588)
2	P 138 - 135 P 135 - 133 P 133 - 128 P 128 - 118 P 146 - 137 P 137 - 134 P 134 - 132 P 132 - 123	1.69 ~ 2.21	1.970	1.970 (6.50)	0.240 ~ 0.280 (0.924)

第12表 柱穴計測表 (柱穴ビット含む)

番号	検出面径	底面径	深さ	検出面	底面	据え方径	備考	番号	検出面径	底面径	深さ	検出面	底面	据え方径	備考
1	18×18 _{cm}	10×12 _{cm}	12 _{cm}	32.36 _m	32.25 _m			57	46×42 _{cm}	35×31 _{cm}	18 _{cm}	32.20 _m	32.02 _m		
2	62×65	49×40	42	32.31	31.89			58	73×70	46×55	35	32.22	31.87		
3	23×26	19×22	4	32.11	32.07			59	45×50	27×29	48	32.20	31.72		
4	81×52	75×36	27	32.21	31.94			60	40×64	16×45	37	32.16	31.79		
5	18×16	12×11	10	32.20	32.10			61	48×50	35×44	18	32.17	31.99		
6	60×77	49×70	26	32.21	31.95			62	75×75	66×63	40	32.17	31.77	18×20	柱 痕
7	23×20	12×12	17	32.41	32.24			63	53×48	31×40	31	32.18	31.87	24×20	"
8	26×32	19×21	21	32.41	32.20			64	26×32	15×23	14	32.16	32.02		
9	71×57	43×38	32	32.26	31.94			65	20×23	8×8	48	32.49	32.01		
10	45×42	30×35	49	32.24	31.75			66	74×84	54×54	65	32.23	31.58	28×25	木片残存
11	33×35	21×28	12	32.28	32.16			67	44×40	23×27	3	32.24	32.21		
12	24×34	16×15	7	32.29	32.22			68	67×75	54×55	61	32.25	31.64	28×22	木片残存
13	14×14	11×9	11	32.29	32.18			69	70×68	46×44	61	32.28	31.67	24×9	"
14	45×25	16×15	32	32.29	32.07			70	48×49	42×43	30	32.22	31.92	28×28	"
15	58×40	25×25	38	32.34	31.96			71	85×83	65×54	32	32.28	31.96		
16	25×53	24×21	31	32.39	32.08			72	54×60	42×37	38	32.38	32.00		
17	39×32	19×19	28	32.34	32.06			73	42×54	29×34	38	32.28	31.90		
18	38×27	20×18	25	32.19	31.94			74	85×89	72×81	83	32.24	31.41	25×24	柱 根
19	52×53	26×46	30	32.27	31.97			75	78×76	70×60	55	32.20	31.65		
20	34×44	21×30	11	32.35	32.24			76	43×44	24×26	35	32.34	31.99		
21	28×30	14×16	14	32.31	32.17			77	45×45	34×34	4	32.26	32.22		
22	21×22	12×18	9	32.42	32.33			78	62×60	45×50	20	32.24	32.04		
23	17×14	10×7	10	32.41	32.31			79	47×53	43×44	35	32.21	31.86		
24	50×49	37×35	17	32.26	32.09			80	43×49	30×31	35	32.23	31.88		
25	25×25	17×17	20	32.22	32.02			81	89×83	86×82	34	32.22	31.88	31×27	柱 痕
26	91×98	51×67	48	32.29	31.81	27×30	木片残存	82	87×72	76×71	48	32.19	31.71	32×30	"
27	32×40	21×23	18	32.23	32.05			83	57×54	35×41	44	32.17	31.73	28×25	"
28	75×70	55×45	42	32.25	31.83	30×28	柱 痕	84	28×25	9×8	17	32.34	32.17		
29	71×80	46×47	67	32.21	31.54	27×20	"	85	81×91	54×53	49	32.22	31.73	30×25	柱 痕
30	49×44	40×20	45	32.25	31.80			86	42×71	32×27	40	32.11	31.71		
31	56×43	28×23	25	32.24	31.99			87	53×59	48×44	33	32.19	31.86		
32	71×76	54×57	56	32.26	31.70	31×34	柱 痕	88	64×61	58×51	17	32.42	32.25	20×18	柱 痕
33	71×69	50×55	63	32.26	31.63	33×25	"	89	54×56	31×41	39	32.41	32.02	25×26	"
34	50×43	27×28	39	32.25	31.86			90	65×53	61×46	6	32.29	32.23	38×26	柱根残欠
35	68×77	56×65	48	32.24	31.76	25×24	柱 痕	91	34×50	20×23	29	32.37	32.08		
36	97×83	69×57	58	32.28	31.70	34×29	"	92	78×71	50×58	60	32.25	31.65	30×32	柱根残欠
37	70×76	70×60	68	32.39	31.71	33×28	"	93	45×46	40×40	52	32.36	31.84	30×27	柱 痕
38	86×116	74×82	53	32.28	31.75	26×21	"	94	42×37	36×32	27	32.38	32.11	19×15	"
39	64×65	56×51	62	32.30	31.68	14×16	"	95	47×44	27×26	21	32.21	32.00		
40	24×19	11×10	17	32.34	32.17			96	51×50	44×33	5	32.20	32.15	19×17	柱根残欠
41	22×25	15×16	12	32.32	32.20			97	16×21	12×14	9	32.25	32.16		
42	87×107	59×63	60	32.31	31.71	27×26	柱 痕	98	19×21	10×12	6	32.25	32.19		
43	62×80	53×67	50	32.29	31.79	23×25	"	99	54×85	35×35	34	32.16	31.82	26×27	柱 痕
44	37×34	18×24	32	32.34	32.02			100	48×56	20×34	60	32.25	31.65	14×11	柱根残欠
45	53×53	48×58	40	32.26	31.86			101	39×40	17×17	42	32.28	31.86		
46	48×35	30×34	9	32.27	32.18			102	43×38	22×25	23	32.21	31.98		
47	21×27	15×20	9	32.27	32.18			103	24×30	11×12	16	32.21	32.05		木 根 ?
48	43×44	29×28	14	32.22	32.08			104	56×71	40×45	66	32.24	31.58		
49	73×62	65×45	52	32.26	31.74	27×26	柱 痕	105	23×40	20×36	7	32.26	32.19		
50	42×48	28×34	15	32.22	32.07			106	40×45	25×35	18	32.23	32.05	15×15	柱根残欠
51	70×67	48×35	53	32.22	31.69	25×30	柱 痕	107	55×60	47×48	52	32.11	31.59		
52	36×42	26×20	7	32.24	32.17			108	55×74	35×50	18	32.20	32.02		柱根・鋸片
53	35×34	24×27	10	32.12	32.02			109	48×61	33×30	19	32.21	32.02		
54	53×50	43×39	13	32.10	31.97			110	56×96	29×28	10	32.30	32.20		
55	32×36	22×23	20	32.24	32.04			111	45×39	33×25	51	32.35	31.84		ビット重複
56	20×29	15×15	10	32.25	32.15			112	40×74	36×33	102	32.30	31.28		

番号	検出面径	底面径	深さ	検出面	底面	据え方径	備考	番号	検出面径	底面径	深さ	検出面	底面	据え方径	備考
113	37×36cm	29×28cm	34cm	32.33 m	31.99 m	18×23cm	柱 痕	170	25×24cm	10×10cm	20cm	31.98 m	31.78 m	cm	
114	35×36	31×26	28	32.27	31.99	16×15	''	171	26×25	9×10	32	31.94	31.62		
115	26×44	16×20	12	32.29	32.17	11×9	''	172	27×22	13×13	17	32.02	31.85		
116	48×21	31×17	48	32.29	31.81			173	18×32	14×15	22	32.02	31.80		
117	35×55	26×40	19	32.28	32.09			174	24×22	17×16	10	32.04	31.94		
118	29×39	17×14	17	32.09	31.92			175	14×15	4×4	13	32.02	31.89		
119	33×40	19×24	2	32.10	32.08			176	26×16	11×4	7	32.05	31.98		
120	42×38	38×36	11	32.08	31.97			177	21×16	15×12	24	32.14	31.90		
121	20×23	10×10	14	32.11	31.97			178	47×30	22×17	32	32.02	31.70		
122	35×40	32×25	22	32.19	31.97			179	26×25	15×15	13	32.02	31.89		
123	48×43	23×30	19	32.14	31.95			180	28×33	16×15	12	32.12	32.00		
124	53×59	41×50	7	32.15	32.08			181	24×21	17×10	15	32.17	32.02		
125	26×28	15×20	5	32.13	32.08			182	31×43	20×14	15	32.19	32.04		
126	21×17	6×5	1	32.13	32.12			183	21×25	15×14	9	32.16	32.07		
127	25×23	22×18	15	32.11	31.96			184	22×19	15×14	14	32.11	31.97		
128	40×35	25×18	51	32.03	31.52			185	24×22	16×15	52	32.14	31.62		
129	19×20	9×11	15	32.12	31.97			186	29×31	15×15	26	32.06	31.80		
130	16×19	9×11	12	32.12	32.00			187	22×16	11×8	10	31.97	31.87		
131	53×42	32×32	14	32.02	31.88			188	18×19	7×6	17	32.09	31.92		
132	54×48	34×39	28	32.14	31.86			189	24×24	10×9	21	32.07	31.86		
133	39×41	10×9	20	31.99	31.79			190	21×21	7×11	19	31.98	31.79		
134	57×51	43×41	42	32.11	31.69	26×23	柱 痕	191	24×29	13×18	12	31.97	31.85		
135	54×50	31×33	32	31.98	31.66			192	51×32	38×30	13	31.98	31.85		
136	33×43	11×9	30	32.04	31.74			193	16×16	10×8	12	31.96	31.84		
137	57×49	40×42	42	32.11	31.69	28×24	柱 痕	194	18×16	4×9	14	31.96	31.82		
138	65×50	52×33	44	31.95	31.51			195	41×46	28×30	31	31.95	31.64		重複？
139	14×14	8×7	11	32.02	31.91			196	26×34	29×21	21	32.20	31.99		
140	15×14	11×11	10	32.05	31.95			197	30×43	25×38	15	32.19	32.04		
141	31×30	17×16	31	32.04	31.73			198	39×45	28×40	17	32.19	32.02		
142	12×17	9×7	8	32.03	31.95			199	26×37	16×29	19	32.16	31.97		
143	29×35	15×29	16	31.98	31.82			200	35×45	27×41	34	32.17	31.83		
144	20×17	10×7	60	32.01	31.41			201	22×20	11×15	10	32.06	31.96		
145	26×19	23×18	38	31.97	31.59			202	14×15	12×7	1	32.00	31.99		
146	48×50	44×42	45	31.97	31.52			203	23×19	18×10	2	32.00	31.98		
147	20×18	9×10	22	31.97	31.75			204	17×21	11×11	30	31.67	31.37		
148	21×21	12×12	16	31.97	31.81			205	21×19	11×8	14	31.92	31.78		
149	23×22	16×15	20	31.97	31.77			206	15×14	8×8	26	32.06	31.80		
150	14×16	7×9	4	31.98	31.94			207	24×35	10×12	25	32.06	31.81		
151	19×22	16×15	4	32.02	31.98			208	31×28	17×20	47	32.08	31.61		
152	28×19	14×10	7	32.02	31.95			209	20×24	12×14	23	32.06	31.83		
153	17×18	11×8	21	32.11	31.90			210	25×24	18×14	30	32.06	31.76		
154	21×21	10×11	26	32.11	31.85			211	15×18	10×11	20	32.06	31.86		
155	30×24	13×8	31	32.06	31.75			212	22×25	16×19	25	32.06	31.81		
156	16×17	14×13	21	32.05	31.84			213	18×16	9×8	32	32.06	31.74		
157	12×15	6×7	11	32.01	31.90			214	24×26	13×19	33	32.05	31.72		
158	17×20	11×11	9	32.01	31.92			215	13×15	9×9	22	32.03	31.82		
159	23×26	17×18	21	32.01	31.80			216	25×25	20×20	19	32.03	31.84		
160	19×19	13×14	18	32.07	31.89			217	31×29	20×19	28	32.07	31.79		
161	25×22	12×19	18	32.07	31.89			218	17×15	11×10	18	32.07	31.89		
162	16×17	14×13	6	32.01	31.95			219	21×18	11×7	27	32.09	31.82		
163	20×19	7×7	20	32.10	31.90			220	29×25	17×15	3	31.99	31.96		
164	13×14	7×6	20	32.10	31.90			221	28×14	9×7	4	31.99	31.95		
165	27×26	16×17	15	32.05	31.90			222	30×20	19×15	15	31.99	31.84		
166	28×22	9×9	35	32.05	31.70			223	20×20	5×4	9	31.96	31.87		
167	14×12	10×9	5	32.05	32.00			224	23×23	11×12	8	32.00	31.92		
168	29×26	22×12	9	31.01	31.92			225	32×24	9×10	38	31.98	31.60		
169	25×29	14×18	18	32.00	31.82			226	27×34	13×16	24	31.99	31.75		

番号	検出面径	底面径	深さ	検出面	底面	据え方径	備考	番号	検出面径	底面径	深さ	検出面	底面	据え方径	備考
227	21×18 cm	14×11 cm	6 cm	32.03 m	31.97 m	cm		257	40×42 cm	17×17 cm	29 cm	31.93 m	31.64 m	cm	
228	21×27	10×11	25	32.03	31.78			258	45×48	33×31	14	31.92	31.78		
229	21×22	14×11	15	31.98	31.83			259	18×20	13×8	9	31.94	31.85		
230	26×20	16×10	17	32.04	31.87			260	18×21	13×16	8	31.93	31.85		
231	39×34	14×12	25	31.98	31.73			261	18×17	15×12	27	31.92	31.65		
232	20×20	10×8	17	31.98	31.81			262	28×20	12×12	6	32.04	31.98		
233	40×65	28×22	22	31.95	31.73			263	19×20	14×14	11	31.96	31.85		
234	40×52	12×9	23	31.96	31.73			264	16×17	19×6	45	31.94	31.49		
235	32×29	20×25	22	31.95	31.73			265	14×15	7×9	7	31.94	31.87		
236	43×44	15×19	23	31.96	31.73			266	25×19	15×14	26	31.93	31.67		
237	54×30	43×17	1	31.83	31.82			267	24×26	16×18	41	32.03	31.62		
238	17×20	7×6	12	31.96	31.84			268	14×18	7×12	13	31.93	31.80		
239	22×14	4×4	21	31.95	31.74			269	21×12	6×4	10	31.93	31.83		
240	32×20	11×18	23	31.93	31.70			270	19×14	9×6	10	31.93	31.83		
241	22×21	9×11	2	31.95	31.93		杭 残 存	271	9×14	6×6	5	31.93	31.88		
242	26×23	10×9	1	31.95	31.94		”	272	34×42	9×14	28	31.94	31.66		
243	26×30	16×22	17	31.96	31.79			273	23×26	16×5	22	32.01	31.79		
244	31×29	15×20	22	31.99	31.77			274	33×40	16×19	38	31.95	31.58		
245	29×30	15×15	18	31.99	31.81			275	18×19	15×17	60	31.89	31.29		杭 残 存
246	17×16	11×10	26	31.97	31.71			276	28×30	12×15	20	31.90	31.70		
247	48×34	10×9	22	32.03	31.81			277	25×37	14×22	9	31.91	31.82		
248	24×36	11×12	25	32.05	31.80			278	20×33	12×13	20	31.90	31.70		
249	22×16	10×8	25	31.98	31.73			279	38×41	15×23	22	31.90	31.68		
250	45×41	12×13	6	31.98	31.92			280	33×32	12×9	19	31.88	31.69		
251	45×32	12×9	37	32.05	31.68			281	28×41	7×9	16	31.87	31.71		
252	30×44	19×17	15	31.93	31.78			282	35×25	20×12	13	31.85	31.72		
253	31×35	15×11	17	31.93	31.76			283	41×39	20×13	83	31.85	31.02		
254	50×30	9×9	21	31.93	31.72			284	46×50	14×13	23	31.82	31.59		
255	28×48	14×15	21	31.91	31.70			285	36×45	27×33	17	31.91	31.74		
256	16×40	26×12	7	31.91	31.84										

(2) 溝 (第2区)

Ch 56 溝

北西から南東に走り、屈曲して Ch 59 溝を切って東方へ続く。確認される溝の総長 11.02 m、幅 0.30 m 前後、検出面下の深さ 0.06 m である。底部は平坦で北西端より東端にかけて 0.07 m 低位となり、南流する水路とみられる。遺物は出土していない。

Ch 59 溝

北東より流入し、Ch 59 柱列北端付近より曲折して C j 9 建物東辺に沿って南下する。これより再び南西方向をとって D c 56 池跡に続く。池跡南口より分流するが、南端は D e 56 溝によって切断されて明らかでない。溝の総長 17.4 m、溝幅は 0.30～0.40 m の不整をなし、検出面下の深さ 0.06 m で浅い。底部は平坦で、北端より池跡流入口付近で 0.24 m、南端で 0.26 m 低位となる。覆土は砂質暗褐色土をなし、底部ほど褐色が強い。遺物は一点も出土していない。

複合する D a 12 溝、P 90、P 113 はいずれも Ch 59 溝より新しく、D c 56 池跡と同一期に共用される流水路とみられる。また、C j 9 建物東辺約 2 m を平行しており、Ch 59 柱列および C j 9、あるいは C j 12 建物とも同時に使用されている可能性が強い。

Da12溝

東西23.10mのはぼ直線状をなす溝である。東端はCh59柱列付近より確認され、西端は現在の用水路によって消滅している。溝幅0.30～0.60m、深さ0.14m、東西端の底面比高は0.33mで西流する。埋土は第Ⅱ層の褐色土で複合するいずれの遺溝よりも古い。遺物は皆無である。

Dd6溝

底部の痕跡を留める東西溝である。確認された総長11.02m、最大幅0.50m、検出面下0.30～0.06mを計る。底部は平坦で、西端に若干傾斜している。Cj9建物の桁行方向とはぼ同一方向に延びるが関連については明らかでない。

De56溝

南端では第Ⅱ層上面より検出されたが、南北端は削平されて明らかでない。北端はCh59溝を切り、溜池南側で合流し、溝幅を広くして南下する。南北12m、最大幅1.80m、検出面下の深さ0.22mである。底部は多少凹凸があり、南北端の比高は0.05mで南流する。埋土は黒褐色土に黄褐色砂質土が混入し、拳大の礫を伴う。

(3) 土壙(Dc3石積土壙) (図版3)

Cj9建物南辺約4mにはぼ東西方向に4.72m×0.60mの集石が検出され、更に東延長線上4.03mおいた池跡北西付近に0.80×0.60mの全く同様の遺構を確認する。土壙は上幅0.60m、下幅0.55m、深さ0.28mを計り、壁の立ち上りが強く断面は箱形に近い。土壙内の礫は東西いずれも0.13～0.02mの大小礫が乱雑に埋め込まれた状態であり、間隙が多く整然とした石積みは認められない。拳大の礫の一部は火熱をうけて赤色化し、崩壊するものが含まれ、二次的移動が行なわれているとみられる。遺物は東端の上面に摺鉢の細片が混入する。

(4) 石敷遺構(Df59石敷遺構) (図版3)

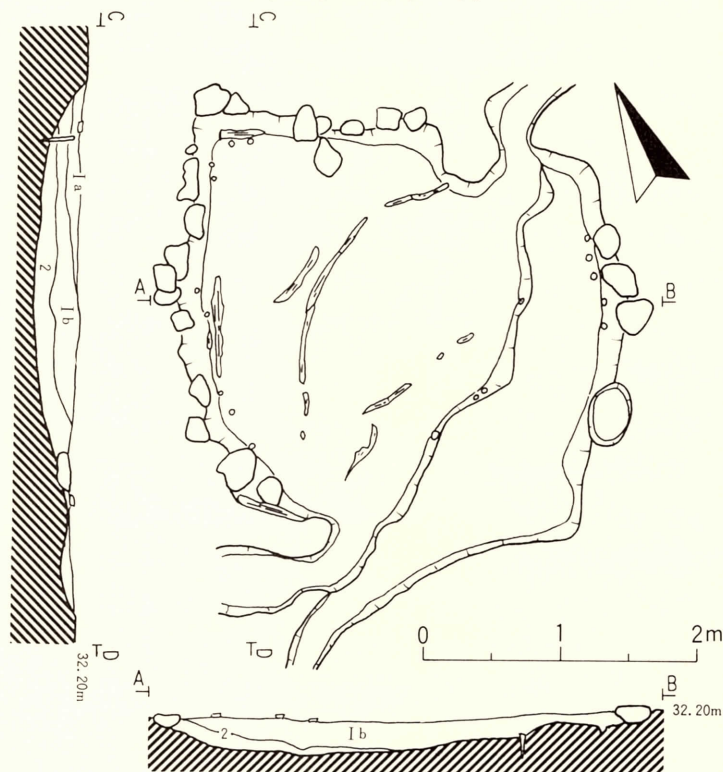
Dg50竈跡周辺の建物柱穴を検出中に確認される。北東よりやや湾曲して南西に延びる石敷である。総長21.56m、敷幅は0.30m前後を計る。径0.32～0.03mの玉石を含む大小の石を一面に敷きつめているが、特に規則的な配列や粗密の相違は認められない。また、石敷の掘り込みも明確でない。石敷上面は大小の礫によって高低があるが、殆ど平坦で南北端の比高は0.16mで地形に沿って南に低位となる。

(5) 池跡(Dc56池跡) (第34図 図版2)

東西3.62m、南北3.28mのはぼ方形を呈し、北東に流入口、南西に流出口を有する。流出口は流入口と同一方向に屈曲して西流する二条の溝に続いている。南辺を除く池端は径0.20m前後の玉石を廻らし、枅板とみられる板材と杭穴が近接して続く。北西隅に近い北側には栗材を使用した割材と杭が残存する。更に中央部よりに板材と杭穴が認められる。杉・栗材を使用した板材の多くは第Ⅰ層上面に検出されており、原位置を移動しているとみられるが、埋没途上

で再利用している可能性も推定される。掘り込みはやゝ緩やかで平坦な底部に続き、最深部で0.30mである。東辺は著しく浅く、二次的な開削も推定されるが一樣な覆土で明らかでない。

覆土は底部の黒褐色土を暗褐色土が被っている。遺物は第1層にのみ認められ、板材のほか摺鉢片1、陶磁器片2、漆器碗の底部等が出土する。第II層中の遺物と同様近世の磁器片であり、廃絶段階は住居移転時期に近接するものとみられる。



1. 暗褐色砂質土 2. 黒褐色砂質土炭化物粒を含む

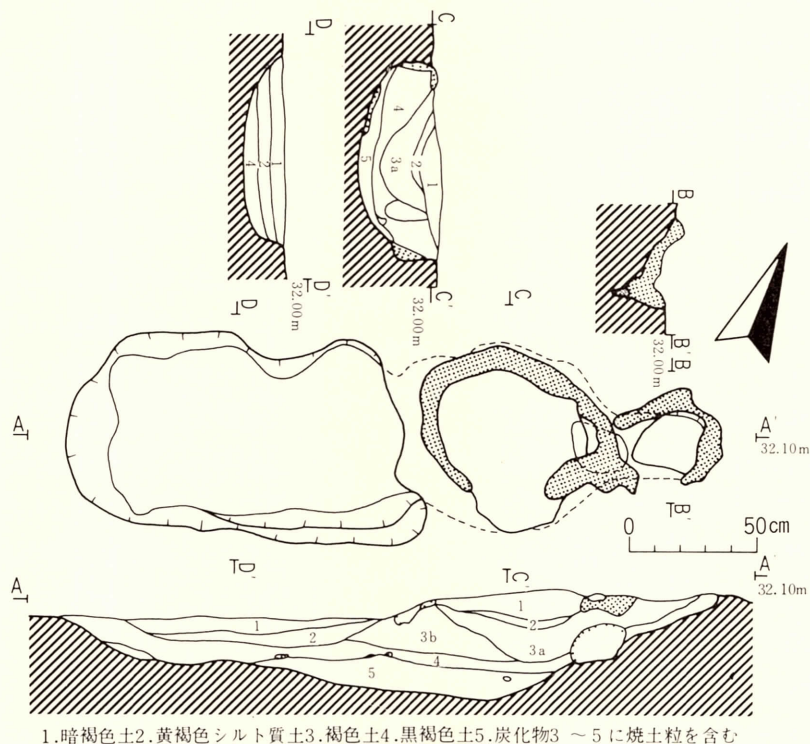
第34図 Dc 56 池跡平面断面図

(6) 竈遺構 (Dg50 遺構) (第35図 図版2)

燃焼部付近の焼土が第II層中に検出されたのち、南西に地山を切る焚口が確認される。焚口より煙出しまでの総長は2.56mを計る。焚口は1.32m、最大幅0.78mで船底状に掘り込まれ、燃焼部付近に至ってやゝ下降している。炭化物が堆積するほか、燃焼部上部より落下した焼土がブロック状に混入している。燃焼部は0.71×0.79mの平面円形をなし、焚口偏りがもっとも深く検出面下0.40mを計る。両壁はほぼ垂直に立ち上って上部の焼土に続き、焼土は中央部へ0.20m延びて環状を呈する。底部は最深部より29°の勾配で上昇し、煙道に続く。底部にはやゝ厚層をなして炭化物が堆積し、崩落する焼土が混在している。煙道は燃焼部境の玉石より0.53m

で煙出しに達し、もっとも厚い焼土を残して上面に続いている。

同一検出面で確認される周辺のピット群は何らかの関連施設の存在を推定させるが、特定できる遺構はみい出し得ない。また遺物は一点も検出されず、周辺にも認められない。



第35図 Dg 50竈跡平・断面図

(7) 井戸跡 (Cg53井戸跡)

検出面径東西 1.76 m、西北 1.82 m の円形の土井である。激しい湧水により約 1 m 掘り下げた段階で完掘を断念している。確認される上端では井桁に伴う痕跡は認められず、井壁は垂直で円形の地山井筒とみられる。覆土は黒色腐植土が一様に被い、混入物は認められず、遺物は一点も出土していない。

〔北半部 (A-E 区) の出土遺物〕

第 I ~ II 層の耕作土及び開田に伴う整地層に包含され、広汎な分布を示すが、特に西辺を南下する旧灌漑用水路に集中している。出土遺物は多種に及び、陶磁器 66 点、柱根・杭等 33 点、金属製品 29 点、石製品 18 点、古銭 5 点のほか、縄文土器 75 点、土師器、須恵器、石器等 67 点が出土している。いずれも完形の遺物は少なく、柱根・杭等を除いては小破片が多い。摺鉢片や

磁器片では同一個体が不定方向に散布しているものが認められる。

遺構に伴う遺物はC j 12建物柱穴・C j 59柱列に柱根7点が遺存するほか、C j 9建物柱穴P 89に玉石に混じる砥石1点、C j 59柱列P 108に摺鉢片が出土する。また、D c 51池跡には陶磁片14点、上部焼失の黒漆碗底部片があり、杭、板材を伴うほかは冠水による移動や投棄される遺物を含む可能性がある。詳細は後述の「Ⅲ、出土遺物」の項で述べる。

—考察—

建物遺構と付属施設

確認された掘立柱建物跡は4棟であり、その中心となる最大規模のC j 12建物とC j 9建物が重複し、北側に小建物、南西に中規模の建物が配される。4棟の建物はそれぞれ方向を若干異にし、柱間寸法の相違も認められるが、総じて整然とした規則性のある柱配置がみられる。また、柱穴の掘り方、据え方にも著しい変化は認められず、極めて近接する建物配置によって同一時期に併存する可能性が強いとみられるものである。

C j 12建物とC j 9建物は、C j 9建物の上手P 37-43-93-82、下手P 48-69-68-59はC j 12建物におけるP 36-42-81-92、P 26-29-66-51に相当し、若干西辺側柱の配置を異にするほかは殆ど同一配置をなし、等面積と推計される。C j 12建物では下屋柱が確認できず梁行方向の側柱2間だけ狭少となるが、桁行方向は16.79m、16.62mと近似値をとり、同一の機能を有する建替え建物であり、中心的な主屋と考えられる。

D d 15建物は側柱が整然と配置される建物で、北東隅はC j 12建物に近接している。柱間は桁行方向の南北2間が若干間延びしているが、梁行方向では主屋と同様の柱配置をもち、土倉等の付属建物と想定される。また、主屋に北接するC g 9建物は物置等の小規模な建物であり、建物方向や柱間寸法の相異があるものの掘り方の共通性や主屋に近接する点で付属する建物と解される。

主屋東西に確認される三柱列は一部不明な点もあるが、いずれも主屋梁行方向に平行し、同一の柱間を基本としている。特にC h 59柱列では主屋東辺に沿ってこれより南北に長く、建物北東隅にあたる部分にやゝ広い柱間となり、以南と機能を異にするものとみられる。西辺のD a 12柱列においてもC j 9建物に平行し、共に東西に関連する遺構は認められず、対応する板塀等の施設と推定される。

C h 59柱列の北端より流入するC h 59溝は、主屋北東隅付近より主屋と柱列間を南下し、D c 56池跡に続き、明らかに計画的な配置と認められる。主屋C j 9建物からは約1mの距離をもち、雨落溝を兼ねる位置にあたる。これに続くD c 56池跡は簡略な掘り込みであり、農作業等の用水に利用されるものであろうか。

主屋南面に位置するD c 3石積土壙は主屋に直接的な関連をみいだし得ない。しかし長軸方

向がC g 9建物における桁行方向に一致しており、近接する時期の施設とみられる。火災焼失による再利用を考慮するならばC j 12建物以降に位置付けられるものである。また、D g 50竈跡及び柱穴群についても推定される南限にあたる点では何らかの付属施設の存在を示すものといえる。

C g 53井戸跡については湧水によって完掘できなかったが、円形の地山井筒であり、当初より継続して使用されている可能性があげられる。

建物構造と柱間

主屋にあたるC j 12、C j 9建物についてみるならば、柱配置によって共に南面する直屋とみられる建物である。

C j 9建物の場合、東西16.79m (55.41尺)、南北8.53m (15.91尺)で下屋柱を除く梁間6.02m (19.86尺)3.5間、桁行14.63m (48.28尺)7.5間である。各柱間は多少の広狭が認められるもののほか8群に分類される。もっとも基本となる柱間は1.90 (6.27)～2.25m (7.43尺)と見られる。各柱間の実測値はこの柱間寸法を規準として算出される柱間に近似し、更に真々柱間寸法を1.97m (6.50尺)を1間とした場合、梁行・桁行共に完数に近い数値が得られ、1間を6尺5寸とした可能性が強い。造営柱間寸法を1.97m (6.5尺)とみるならば建物規模は7.88m (26.0尺)×16.74m (55.25尺)で、梁行4間、桁行8.5間となる。主屋の梁間は6.89m (22.75尺)3.5間、推定建物面積は131.89m (39.92坪)となる。

柱配置は桁行方向をP 30-68、P 34-76、P 37-83の柱通りによって4分され、梁行方向ではP 48-69、P 33-35、P 70-72、P 59-82で2～3分されるものであるが、P 37-83をもって東西の相違が認められる。大別される単純な柱配置を有する下手は土間庭とみられ、上手は居室部にあたるものと推定される。居室部の上手は更にP 27-48-69-30、P 48-59-68-69の前後二室に分割され、前室の梁行P 48-59の3間はP 68-69の1間に符合する柱間をとる。中央部は隅柱が明らかでないが、P 72-70を上手に延長させている可能性があり、3～4間取りを有するものとみられる。土間境に近い部分ではP 37-79がやゝ広く、切炉を常設する位置にあたるであろうか。以上によって居室部の間取りを想定するならば上手よりP 27-48-69-30、P 48-59-68-69、P 30-69-70-31、P 31 (P 33) -70-79-ロ、イ-P 68-75-72、P 72-75-82-79の複雑な6間取りとなる。居室に南接するP 59-60-76-75は縁と解される。類例を求めるならば、東磐井郡藤沢町の富周屋敷に近い間取りとみなされるものである。

土間庭とみられる下手ではP 37-83-96-44は^{注1)}梁行・桁行に整然とする柱配置であり、多柱式とみなされ、建物面積の35.3%にあたっている。土間庭に独立柱が配される形式は仙台領に広く分布する古民家に認められている。殊にも入隅柱を含む3本の上屋柱が妻側に並列する配置は仙台領北辺の岩手県南部の独特の形式とみられ、その時期は元禄～享保期に位置付けられ

ている。これによって又首組とする小屋組や下屋造の架構についてもほぼ同様の方法に拠って^{注2)}いるものと類推される。

C j 12建物では上屋柱が側柱となっており、また、居室部における間仕切が判然とせず、C j 9建物と相違する点もあるが、基本的には殆ど同様の間取りをもつ直屋とみなされる。柱間寸法は上手ざしきとみられるP 26-51-66-29、南面中央部のP 71-81、下手土間庭のP 36-38、P 81-85に6尺5寸間をとり、居室部ではその2～3倍、土間庭では1.5倍の柱間である。確認される柱数はC j 9建物における上屋柱と同数の17本であるが、坪当り0.85となってやゝ密度が低い。

居室部の間取りはC j 9建物と柱配置を若干異にするものの上手ざしきは同様の10畳間となり、土間境まで10、12畳の居室であり、桁行3列、梁行2列を基本とするものと推測される。土間庭はC j 9建物に比して下屋分のみ狭少となるが、建物面積の31.9%を占めて近似値が得られる。柱配置では土間境のうし梁を承ける内柱が棟通りに移動しているほかは全く同一の配置が認められるものである。共に土間庭を東方にしてみるならば、北上河西の間取りに類似しその柱配置によって近世前～中期に位置付けられる主屋と推定される。

注1) 佐藤 巧他「岩手県の民家」文化財調査報告書第26集、岩手県教育委員会(1928)

注2) 伊藤延男他「岩手県の民家-文化財建造物特別調査報告-」文化財保護委員会(1965)

Ⅲ 出土遺物

北館遺跡、伝大手門遺跡から出土した遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、土製品、剥片石器、磨製石器、礫石器、石製装身具、石製品、柱根、木製品、木材、鉄製品、銅製品、古銭、炭化物等、ダンボール箱にして106個分である。これらの遺物を分類し、接合復元作業終了後、整理と記録の作成を行った。報告書内の遺物資料は、その特殊性、遺構との関わりを考慮し、選択されたものである。時代差から、縄文時代のものと歴史時代のものと大きく2つに分けて記述した。

1 縄文時代の遺物

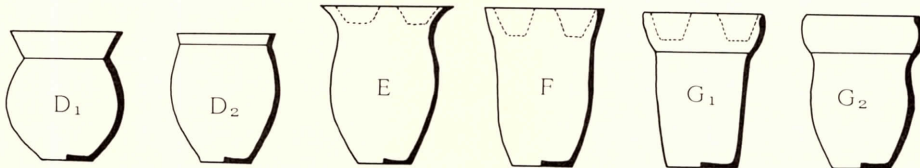
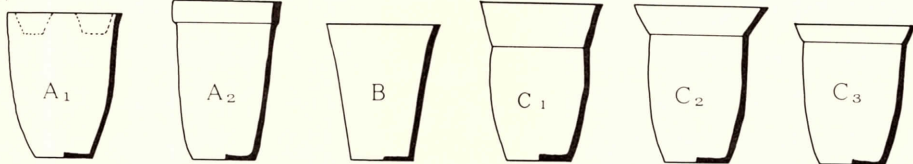
(1) 縄文土器(第37図～第66図 図版7～23)

本遺跡では、Dブロックから75点出土している他は、ほとんど南半部(F～J区)からである。特にFi j～Gghにわたる落ち込み遺構部分に集中し、その出土数は31,168点(細片を除く)を数える。大部分は縄文中期(大木7b～8a)に比定されるものである。分類の基準設定にあたっては、復元可能土器をもとに、文様表現技法、器形を重視し、その後胎土や色調を比較観察した。〈文様表現技法〉文様施文技法及び文様要素を第13表のように用語を定め、分類作業をすすめた。沈線文には、施文具の違いによる凹の断面の丸いものと三角状、四角状のものとが観察

される。しかし、大部分は丸いものであり、その区別はしなかった。小波状文、連弧文、鋸歯状文と分けたが、どれに組み入れるのかははっきりしないものは小波状文として扱った。口縁に大きくもりあがる大型の突起は、扇状把手とも言われているが、ここでは山形突起として述べる。

施文技法	文様要素
1 沈線文	直線文(横線、縦線)、文様帯を区画する区画文 小波状文(~~~~) 波状文(~~~~) 大波状文(~~~) 連弧文(~~~~) 鋸歯状文(~~~~) 連続山形文(~~~~) 櫛目文() 矢羽根状文(~~~~) 円文、楕円文 菱形文(◇◇) 懸垂文(∟) 渦巻文(㊦)
2 撚糸圧痕文 } (綾絡文も含む)	
3 隆起線文	
4 刺突文	爪形文(C字形) 竹管円文(●●○○) きざみ状() D字形(DDD) くさび形(▼▲▼) 指頭圧痕状(●●●)
5 貼付文	つまみ状(●●) 横S字状 渦巻状 X、Y字状 円又は半円状 紐状
6 突起、把手	こぶ状(〜) 山形状(∧) 渦巻状(㊦) 耳状(〜) 三角山形状(∧) 橋状、環状(㊦)
7 地文	無節斜縄文、単節斜縄文、複節斜縄文、羽状縄文、撚糸文

深鉢



浅鉢



第36図 器形の基本形

<器形> 復元可能なものを、大きく深鉢と浅鉢に分け第36図のように器形の基本形を設定した。外反や湾曲の程度に応じた、それぞれ代表的な形である。口縁部に点線の入っているのは大きな山形突起を4ケもつものを含む器形である。

- A₁-口縁部直上形の深鉢で、大波状或いは大きな山形突起をもつものがある。
- A₂-口縁部直上形であるが、口縁部肥厚し段をもつ。
- B-胴部下半から口縁部にかけて、外反又は外傾ぎみに開くいわゆる石炭バケツ形。
- C₁-口縁部外傾又はやや外反する深鉢で、頸部より上が広い。
- C₂-C₁より外傾又は外反が強く、頸部より上がC₁より狭い。C₃より広い。
- C₃-C₂より頸部の上が狭いもので、外傾又は外反の強いものと弱いものがある。
- D₁-胴が張り、球胴に近くなっている。口縁部は、外傾又は外反である。
- D₂-D₁より胴の張りが弱く、口縁部の文様帯の幅が狭い。
- E-口縁部が強く外反し、胴の張った深鉢。
- F-口縁部やや内湾ぎみに立ち上がるが、頸部は強い屈曲を示さず、なめらかである。
- G₁-口縁部内湾するキャリパー形で、胴部の張りが少ない。
- G₂-G₁に似たキャリパー形で、頸部で屈曲し、胴部に張りがある。
- H₁-胴部内湾ぎみに立ち上がる浅鉢だが、H₂のように底部との境界がはっきりしていない。
- H₂-H₁に似た形であるが、底部の立ち上がりははっきりしている浅鉢。
- I-胴部が外傾ぎみに、斜めに真直ぐ立ち上がる浅鉢。
- J-底部が狭く、胴部外反ぎみに立ち上がり、口縁部内湾ぎみになる浅鉢。
- K-胴部内湾ぎみに立ち上がり、口縁部内傾又は内湾する浅鉢。

<土器分類について>

落ち込み遺構の遺物包含地出土の土器を、文様表現技法と器形をもとに分類したが、復元可能資料に比較して破片資料が多量であり、器形よりも文様による分類に主眼を置いたものになった。従って各土器群の中には、器形をはっきりとらえ得ないものもあった。口縁部破片、復元可能破片を第1群～第8群に分けることができた。以下その特徴について述べる。

第1群土器（第37図1～12、第51図1～6、図版7の1～6）

半割竹管による沈線文、爪形文、波状文、複合口縁、綾絡文、口縁部隆起線による上下区画など、大木7aの特徴と思われるものである。施文法のちがいで1類～4類に分けられる。

第1群1類；（第37図5、図版7の1）

半割竹管の内側による平行沈線で縦横に区画、それにそって粘土紐の貼付や交互の刺突で文様表現されている。器形は、口縁部直上形A₁と思われる。胎土に砂粒を含み、しまりは普通である。同類とみられる破片は5点と少ない。

第1群2類；（第37図1～4）

口縁が帯状に厚くなった複合口縁様のもので、器形は口縁直上ぎみの深鉢A₂・H₁の浅鉢形がある。黄褐色のものが多く、胎土もしまりが良い。13点の出土である。

第1群3類；（第37図6～11、第51図1～6、図版7の2～6）

綾絡文が主な文様体になっているもので、器形はA₁・B・C₁～C₃の深鉢、H₁の浅鉢である。つまみ状又は紐状の貼付文をもつもの、小波状口縁やこぶ状の突起を有する口縁が見られるが、平縁が多い。胎土のしまりは良い。ある程度復元可能なものが6点、他破片18点の出土である。

第1群4類；（第37図12）

口縁部に太い隆起線を上下にめぐらし、縦にも懸垂させるもので、器形はC₁の深鉢である。出土数は破片のみで5点と少ない。

第2群土器（第38図～第47図184、第51図7～第61図85、図版7の7～図版17の86）

撚糸圧痕文や沈線文、隆起線文など多用する大木7bと思われる土器群で、出土数が一番多い。

第2群1類；（第38図～第41図、第51図7～第55図39、図版7の7～図版11）

撚糸圧痕文を主文様体とする土器群である。さらに文様の表現方法、器形によってa～bのグループに分けられる。

a - 撚糸圧痕文の横帯及び連弧文が施されたものである。つまみ状或いはX字状等の貼付文をもつもの、口縁部にくぼみを施したものが見られる。器形はA₁・A₂・B・C₃・G₁の深鉢、H₁、H₂の浅鉢であるが、中でもA₁やBが多い。口縁に大きな山形突起を4つ有する深鉢もある。撚糸圧痕文の横帯は1本～数本に及び、縦の綾絡文を併用している深鉢が少なくない。胎土のしまりはおおむね良好で、中に金雲母を含むものがある。

b - 撚糸圧痕文で区画、文様表現されているもので、器形はA₁・C₂・C₃・F・G₁の深鉢、H₂・Jの浅鉢である。貼付文はX字状、Y字状、菱形状などがみられる。撚糸圧痕の文様表現は連弧文、長楕円文、連続山形文、渦巻文、窓状文などの組み合わせである。4ヶの大きな山形突起をもつ深鉢は、Fの器形のもものがほとんどで、文様構成は突起毎に曲線区画文を施し、それらがつながり合って文様帯を成している。縦の綾絡文も多用される。こぶ状や耳状、渦状の突起をもつものもある。色調は褐色が多く、胎土のしまりは良好である。

c - 縦の撚糸圧痕列が主文様体となるもので、器形はA₁・A₂・C₃・Eの深鉢、H₂の浅鉢である。平縁がほとんどで、口縁が波状を呈するものは見られない。撚糸圧痕の縦の長さが1cm前後の短いもの、2～3cmの長いものがある。施文は口縁に隆帯を貼り付けて、その上に施すものと、撚糸圧痕や沈線文の横帯に伴っているもの等がある。横S字や半円形の貼付文をもつものもある。胎土は砂粒を含み荒いものが多い。

d - 隆起線の区画文、曲線文にそって撚糸圧痕が伴うもので、器形はB₁・C₂・F・G₁・G₂の深鉢、H₂・I・J・Kの浅鉢である。G₁・G₂のいわゆるキャリパー形がかなりみられる。隆起線の長楕円区画文や、口縁部文様体を三角形又は弧状、波状に区画した隆起線にそって撚糸圧

痕文が施されているものが基本であり、それに付随した形で、渦文や沈線の円文、小波状文がつけられる。波状の隆起線に捺糸圧痕をそえたものも、この類に含めた。浅鉢には口縁部にこぶ状の突起がめだつ。この類にも4ケの大きな山形突起をもち、突起毎に区画文様を展開する一群の深鉢がある(第41図72～80)。また、太い隆起線には指頭圧痕を施したものがある。色調は、褐色のものが多い。第54図30(図版11の37)は胎土に金雲母を含む。

第2群2類；(第42図～第45図146、第55図40～第60図75、図版12～図版17の76)

沈線文を多用する土器群である。文様表現技法、器形によって、さらにa～dのグループに分けられる。

a - 沈線の横帯や小波状文が主文様体になっているもので、器形はA₁・C₃・G₁の深鉢、H₁の浅鉢等である。施文は1～数本の平行沈線のみのも、それに小波状(又は連弧文)が加わっているもの、第55図43(図版12の39)のように刺突列点文が併用されているものも多い。菱形や三角山形の突起を有するものもみられる。

b - 沈線で区画や文様表現をしているものであるが、口縁部にのみ文様帯をもつものと、体部にも文様帯をもつものがある。器形はA₁・B・C₂・C₃・D₁・E・F・G₁・G₂の深鉢、H₁・H₂の浅鉢である。この類にも第43図118～122、第44図123、124、第57図59、第58図60～63、図版14の58、図版15の61～64にみられるように、大形の山形突起を4ケもった深鉢の一群がある。施文は連続山形文、連弧文、長楕円区画文、矢羽根状や橢歯状の沈線列、上下の区画平行線などを基本とし、それに渦巻文、小波状文、円文、刺突文などが組み込まれている。文様の節目或いは中央に配される円文と、第57図49(図版14の53)や第57図55、58(図版14の55、57)にみられるような「し」の字状に懸垂する沈線が、特徴的な表現として目につく。第57図56、57、59の3つの土器は、器形、文様帯のあり方から密接な関係にあるものと思われる。貼付文の形状は、つまみ状、円形、弧状、Y字状がみられ、また小さな突起も使われている。器形が判明するものの中では、浅鉢形が比較的少ない。

c - 沈線の中の狭い長楕円区画文の内部に刺突文を施したもので、文様構成に共通性がみられるので、bグループと区別した。器形はA₁・D₂の深鉢である。刺突の仕方はくさび形、竹管円文、棒状などであり、つまみ状やX字状の貼付文、隆線の懸垂文がつけられているものもある。広くみればb類に含まれてよいと思われる。赤褐色、褐色のものも多く、胎土に金雲母を含むものもある。

d - 太い隆起線の区画文や横帯に伴って、沈線文様が施されているもので、隆起線にそって沈線が施されているものと、隆起線にこだわらずに沈線を自由にめぐらしたものとがある。器形もまちまちであり、このグループはさらに細分すべきかもしれないが、出土点数が多くないので一括してみた。器形は深鉢だけであるが、太い隆起線がめぐり力強い感じを受ける。口縁

に大きな4ケの山形突起を有する深鉢もある。第60図75（図版16の71）は三角形に区画するモチーフをもち、隆起線とC字形刺突文に特徴があり、分類上どのグループに入れるか困惑したがこの類に含めた。太い隆起線には、きざみ、指頭圧痕、捺糸圧痕を施している。色調はバラエティに富み、胎土に砂粒を含み荒いものがほとんどであるが、大形のものが多いためである。

第2群3類；（第45図147～第47図177、第60図76～第60図82、図版17の77～83）

隆起線文を主文様体とするものであるが、文様表現技法、器形によりさらにa～cのグループに分けられる。

a－太い隆起線の横帯や波状文をもつものである。隆起線にはきざみや捺糸圧痕、指頭圧痕のあるものとなないものがある。器形はA₁・B・C₂・E・F・G₁・G₂の深鉢、I・Jの浅鉢である。第60図78（図版17の77）の土器は、小波状口縁であるが、平縁のものがほとんどである。第60図79（図版17の78）は赤褐色を呈し、胎土も荒い。第60図77、80（図版17の80、81）は、胴部にミガキ調整が加えられ無文である。

b－隆起線の横帯と刺突文や押圧が伴うものである。交互押圧でジグザグ様になった隆起線が特徴的に使われているものと、隆起線の横帯と縦の刺突列や捺糸圧痕、櫛歯状沈線列で文様表現されているものと大きく2つに分けられる。前者には器形Fの平縁のものと大きな山形突起をもつ深鉢があり、後者には口縁外傾又は外反のC₂・Eの深鉢が多い。浅鉢は、第46図170第60図81、82（図版17の82、83）のように口縁端に平行な細い隆起線をめぐらし、その間にきざみや捺糸圧痕を施したものが一般的で、円形又は渦状の突起がつけられている。第46図162～165、167～169の深鉢は、隆起線の横帯と2～3cmの棒状刺突列が組み合わされた一群のグループである。胎土は荒いものが多い。

c－細い隆起線による幅の狭い長楕円文をもつものである。長楕円区画文の内部には、ミガキ調整で無文にしているものと、捺糸圧痕列や刺突列を施しているものがある。長楕円の境目の口縁上端には、円形又は渦状、こぶ状の小突起がつけられている。又、胴部に隆起線を懸垂させているものもある。器形はE・G₁の深鉢、H₂・Kの浅鉢である。色調はバラエティーに富み、胎土のしまりは普通とみられる。

第2群4類；（第47図178～184、第61図83～85、図版17の84～86）

刺突文のみか貼付文のみのものを一括してこの類とした。aとbの2グループである。

a－刺突文のみであり、浅鉢が多い。施文は口縁上端に刺突列を横に施す。

b－貼付文のみであり、H₂・Jの浅鉢がほとんどだが、第47図183はC₂の深鉢形である。第47図182は、耳状の大きな突起をもつ浅鉢で胎土がシルト質のものである。貼付文の形状は、つまみ状、紐状、X字状、弧状、三日月状などがみられる。

第3群土器（第47図185～第50図240、第61図86～117、図版17の87～図版21の117）

細い隆起線の区画文、曲線文、平行沈線の区画文、細い隆起線に沈線がそう隆沈線による区画文、曲線文、立体的な渦巻状の貼付文や突起、把手など、大木8 a式期の特徴をそなえた土器群である。文様表現技法や器形から、さらに1類～6類に細分された。

第3群1類；（第47図185～第48図202、第61図86～90、図版17の87～89、図版18の90、93）

細い隆起線による文様表現が主体をなすものである。小波状や懸垂文、縦横の区画文、渦巻文を主体に、刺突文、捺糸圧痕文、貼付文をそえて文様構成している。器形は $A_1 \cdot E \cdot G_1 \cdot G_2$ の深鉢であるが、キャリパー形といわれる $G_1 \cdot G_2$ が多い。 H_2 の浅鉢らしい破片もある。口縁部は渦状、三角状の突起や、大波状口縁様をなすものがある。しかし、第2群土器にみられたような、大きな山形突起を4ケもつ深鉢はない。文様帯は口縁部のみのもとの、胴部にまで及ぶものがある。第61図88（図版18の93）の土器は、沈線をそえた隆線の区画文と小波状文、刺突文が一面に施された、器形 A_1 と思われる深鉢の胴部で、異質な感じを受けるが、小波状の隆起線が組み込まれているのでこの類に入れた。第61図の87、90は器形が似ており、共に胎土に金雲母を含む。

第3群2類；（第48図203～204、第61図91～第62図92、93、95、図版18の91、92、94）

頸部から胴部にかけて、2～3本の平行沈線が縦横にめぐらしたものである。縦横にめぐらした沈線はところどころで渦巻文をつくる。細い隆起線文様をもつものがあることから1類土器とのつながりを示し、縦の捺糸圧痕列をもつことから後述の5類とも関連があると考えられる。器形は $A_1 \cdot D_1 \cdot G_1 \cdot G_2$ の深鉢である。口縁部に渦巻状の突起や環状の把手のついたものがある。この類は、第3群土器内の他の類に含められるか、その一部にあたるべきものかもしれないが破片を含めた分類作業上、区別したものである。

第3群3類；（第48図206～第49図223、第62図94、第63図100、図版18の95、図版19の97、図版^{20の}₉₈）

細い隆起線に沈線をそえた隆沈線による区画文、曲線文で表現されているもので、器形は $F \cdot G_1 \cdot G_2$ のキャリパー形である。口縁部を隆沈線文でなめらかな三角形又は弧状、楕円形に区画し、その中に渦巻文が組み込まれている。渦巻状の大きな突起をもつものが多い。第63図100（図版19の97）の土器は、器形Fの大形深鉢（口径41cm）で、口縁部に橋状の把手が2ケ1組で向かい合わせにあったと推定される。太い隆起帯にはさまれた沈線帯には、D字形の刺突文が並べられている。また、胴部には隆起線の区画文にそって、4本の平行沈線をめぐらせ、それが胴部下半にまで及ぶ。口縁端には、渦巻状の突起がついていたらしい。

第3群4類；（第49図224～228、第62図96～99、図版18の96、図版20の99～101）

ミガキ調整の施されたなめらかな隆起線が、口縁部を長楕円状にめぐり、その節目で隆起し渦巻状の突起をなすものである。器形は、Kの浅鉢だけである。捺糸圧痕文をそえてあるものや、胴部に細い隆起線や隆沈線で文様表現がつけ加えられていることから、第3群土器の中の

浅鉢がこの類に代表されているととらえたい。口縁が内湾又は内傾した浅鉢群で、キャリパー形深鉢と共通性がある。

第3群5類；（第49図 229～第50図 232、第64図 101～102、図版20の102～103）

口縁部文様帯に縦の捺糸圧痕文をもち、口縁端に渦巻状の突起や貼付文をもつもので、器形はC₂・D₁の深鉢であるが、口縁がやや内湾ぎみとなる。捺糸圧痕列は、1列のものから3列に施されているものがある。渦巻状の突起や貼付文、細い隆起線文、数本の平行沈線などがみられることから、第3群土器の要素を多くもつもので、捺糸圧痕文は残っているが第2群土器とは分離した土器群である。褐色の色調をもち、中形の大きさが一般的である。

第3群6類；（第50図 233～240、第64図 103～第65図 117、図版20の104～図版21の117）

立体的な渦巻状の突起や貼付、橋状の把手などをもつ破片、復元可能を含めて一括してこの類とした。第3群土器の他の類の表現要素が伴っており、他の類の破片の一部と推定されるものがほとんどである。器形が判明するものは第65図 114～116の3つである。第65図 115（図版21の114）は、深鉢と浅鉢の中間的な特異な器形である。

第4群土器（第50図 241～244、第65図 118、図版21の118）

第3群土器と比較して、なめらかに調整された渦巻文や「フ」字状の棘がついた渦巻文を一部にもつもので、大木8bに比定されるものである。しかし、出土点数が少ないので、或いは大木8a（第3群土器）の中に入れられるかもしれない。

第4群1類；（第50図 241、242、244）

ミガキなどで調整されたなめらかな隆起線で、渦巻文や曲線文をめぐるものである。第3群6類に含まれてもよいと思われるが、より調整が丁寧であるため分けてみた。器形は不明である。

第4群2類；（第50図 243、第65図 118、図版21の118）

渦巻文に「フ」字状の棘をもつものを抽出して、この類とした。器形の判明したのは第65図 118のKの浅鉢だけである。灰黄褐色で、小楕円形の刺突列点文が2列にならぶ。

第5群土器（第50図 245～253、第65図 119～128、図版21の119～図版23の131）

地文だけで文様がない土器群である。深鉢を1類、浅鉢を2類、器形推定不可能なものは3類とした。器形の特徴により、他の土器群との並行関係が、ある程度判明する。

第5群1類；（第65図 119～121、図版21の119～図版22の122）

地文のみで深鉢形のものである。地文の種類は無節斜縄文、単節斜縄文、複節斜縄文、羽状縄文であり、捺糸文はみられない。器形はA₁・B・G₁の深鉢で、こぶ状の突起や大きな山形突起を4ケもつものがある。第65図 121（図版22の120）の土器は、口縁を上から押圧して小波状ぎみの口縁をつくっている。

第5群2類；（第65図122～第66図128、図版22の123～図版23の128、130、131）

地文のみの浅鉢であり、器形は $H_1 \cdot H_2 \cdot I$ である。口縁にこぶ状の突起をもつものや平縁のものなどで、大形のものから小形のものまでみられる。第66図126（図版23の128）は、結節のある斜縄文を斜めに施している。

第6群土器（第66図129～131、図版23の129、132、133）

無文のものを一括し、深鉢1類、浅鉢2類、不明3類とした。浅鉢がほとんどである。

第6群1類；無文の深鉢形であるが、復元可能品はなく、破片のみである。

第6群2類；無文の浅鉢である。器形は $H_2 \cdot I$ で、口縁にこぶ状の突起をもったものや、大波状口縁をなすものなどがある。

第7群土器（第66図132、図版23の134、図版39の2、6、7、11）

大木7a～8b以外と思われる土器群を一括した。縄文前期（大木4～6）に含まれるもの6点、縄文後期1点、晩期（大洞BC、 C_2 ）のもの4点である。第66図132（図版23の134）の土器は、平行沈線を器面一杯にめぐらして、波状や窓状の文様を表現しているもので、器形は D_1 に近く、なだらかな大波状口縁を呈する。内外面とも暗褐色で底部欠損、所属形式、時期は不明である。

第8群土器

口縁部であるが、形態文様が磨滅或いは細片のため、分類不要とした破片をこの類としてまとめた。種々の突起部分の一部も含まれている。

胴部及び底部の分類について

胴部片の中で明確に所属グループの判明するものは、既述の分類に従ったが、その他の大部分は地文のみ、地文+文様、無文、無文+文様という分け方にとどめ、個数を把握した。底部はすべて平底であり、接合状態、胴部下半の立ち上がり傾向、網代痕、木葉痕を観察後、個数を記録した。図版25の13と14は、網代痕の明瞭な例である。

－ 考 察 －

＜分類された土器群の層位的観察＞

時間的な流れの中で次々と堆積された包含層であれば、その層位的調査によって明確にその推移がつかめるはずである。しかし本遺跡の主たる遺物包含地の落ち込み遺構は、ゆるやかな斜面を形成し、しかも落ち込み遺構底部に礫があることや、出土土器が水に洗われた痕跡を示すことから、明確な層位の判明は困難であった。従って、遺物が特に密集している包含層の第3層は、流れ込み等による攪乱があり、各土器群のはっきりまとまった出土は期待できないがある程度復元可能な土器もかなり残っており、おおよそのレベル差を考慮しながら、グリットを面として掘り進み、遺物を取りあげていった。第3層の上の1面から下方の7面まで順次と

りあげ記録したものである。

文様表現技法を重視した分類ではあるが、各グリット毎の出土状況を第14表のように比較してみた。落ち込み遺構の中心的なG a b～G e f までの範囲である。

第14表 包含層第3層の面別の出土数

Gabグリット

分類 出土地点層位	群 1				群 2												群 3						群 4				
	1	2	3	4	類 1				類 2				類 3				類 4				1	2	3	4	5	6	1
第 1 面	2	1			10	14	7	22	25	25	3	14	15	3	13		2	8	1	4	1		8				
第 2 面	1				5	4		11	4	11		12	4	2	2		2	2	6		1						
第 3 面		2	3	3	15	17	2	3	9	15	3	12	8	2		1	1	1	4			5					
第 4 面	1		1						5			4	1									1					
第 5 面			2	1	1	2					2						1		1								
第 6 面																											
第 7 面																											

Gcdグリット

分類 出土地点層位	群 1				群 2												群 3						群 4		
	1	2	3	4	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	a	b	1	2	3	4	5	6	1	2
第 1 面					2	10	10	6	14	18		9	5	4	1	2	3			13		1	3		
第 2 面	1	1	1		9	8	25	22	9	20	1	7	18	5	10	2	1	7		2	2	2	5		
第 3 面		1		1	3	4	8	9	12	16	2	8	5		3	2	2	9		2		2			
第 4 面			2		4	4	4	4	8	15		1	1	1	1	1	1	1		1		1			
第 5 面			2		2			7	2	9		1	1				1		1			2			
第 6 面					3	2		1	2	5		2													
第 7 面								2	2	1				1											

Gefグリット

分類 出土地点層位	群 1				群 2												群 3						群 4	
	1	2	3	4	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	a	b	1	2	3	4	5	6	1
第 1 面			1						3	1	1		2	5	1		5	4	2	1	1	5		
第 2 面		1			2	6	3	7				2	5	1			13	14	6	2	4	6	2	
第 3 面					1	2	6	6	10	9	2	5	4	3	2	3	2	24	18	13	1	2	4	
第 4 面					1	6		5	6	3	2		1				3	4	1			1		
第 5 面		1	1		3	6		2	6	14	1		1			1	1	2						
第 6 面			1		4	7	3	2	4	3	3	1					1		1					
第 7 面					2	4			2	1	2						2							

口縁部破片と復元可能土器を含めた数量であり、個数にはこだわらなくてもいいが、各土器群の層序的なあり方に一定の傾向があらわれている。北のG a b グリットは出土数が一番多いが、第3層1面～3面に集中し、また北方の溝状遺構との関連から攪乱もあったとみられ、分布の特徴はあらわれていない。G c d～G e f グリットと南側にゆくに従って、1面から7面まで遺物がまんべんなく出土しており、特にG e f グリットは復元可能な土器も多いことからある程度層位的に観察可能な地域とみられる。

第1群土器と第2群土器の層位的違いは明確でない。第2群土器の中では、1類と2類は並行して出土し、3類と4類は比較的上面に多い。第2群土器と第3群土器では、第3群土器が上面に多い。G e f の表にはそれが顕著にあらわれている。各土器群の中の細分されたグループ毎の層位的な分布の違いは明瞭ではない。

第1群を大木7 a、第2群を大木7 b、第3群を大木8 a、第4群を大木8 bと従来の縄文

中期の土器編年に合わせてみた場合、ほぼ妥当な層序と思われる。

〈各土器群の文様表現技法について〉

分類するにあたり、縄文中期の土器形式の編年を把握するため、岩手県史、宮城県史や既刊の単行本、報告書を照らし合わせて検討してみた。大木7a～大木8bにいたるまで特徴を抽出し、大筋は次のようにとらえた。

大木7aは大木6式からの沈線文、刺突文、隆帯や貼付文、綾絡文が使われ、文様体は口縁部に集まっている。口縁外反の深鉢や折り返し口縁がみられ、平縁と波状のものがある。大木7bは撚糸圧痕文を多用し、隆起線にそったものがあり、口縁部に楕円形の文様圏がある。器形はキャリパー形に近いものもみられ、口縁に大きな4ケの山形突起をもつものが多い。大木8aは、隆起線の貼付が発達し、沈線による曲線文も併用される。渦巻文のモチーフをもち、立体的な突起や把手がみられる。大木7bからの撚糸圧痕文も残っている。器形はキャリパー形が一般的で、口縁外反の深鉢もある。大木8bは文様要素は大木8aに似るが、隆起線に調整が施され、磨消手法からなめらかな渦巻文となり、渦巻文のそばに「フ」字状の棘がついている。器形はキャリパー形である。

以上を要点として、本遺跡の土器群を分類した結果から、文様表現上で特徴的な点がいくつか考えられる。

綾絡文；綾絡文を地文としてみるむきもあるが、文様を構成する要素のひとつとしてとらえたい。横位と縦のものがある。深鉢には口縁から胴部にかけて懸垂させた形の縦位に施すものが大部分である。綾絡文のみのものは下層に多く、第1群(大木7a)としたが、第2群(大木7b)にもかなり用いられており、本来は大木7bの範中に入るのかもしれない。第2群土器にはどの類にも綾絡文が見られ、一方第3群(大木8a)の中には綾絡文が全くないことから、綾絡文の使用時期は大木7b式期までとみることもできそうである。

小波状隆起線；口縁部上端或いは口唇部にのみつけられるものと、文様帯の中に組みこまれているものがある。前者は、縄文を押圧したものとそうでないものがあるが、いずれも第2群3類の隆起線文の一部としてとらえた。後者のものは、細い隆起線の平行な横帯間に施してあるが、多くのものは渦巻状の文様や突起と伴っているので、第3群(大木8a)の特徴とした。

太い隆起線(隆帯)；指頭圧痕や刺突、撚糸圧痕を施したものが多く、各土器群にそれぞれ使われている。他の文様要素が伴っていないものは一括して第2群3類aとした。第1群～第2群の時期を通じてみられる施文法である。

貼付文と刺突文；貼付文の形状は種々あるが、撚糸圧痕文系の土器に多く使われている。つまみ状の貼付文は第3群土器になると少なくなる。刺突列点文は各土器群にまんべんなくみられるが、沈線文を使用した土器群に多く、沈線文の施文具をそのまま刺突に用いた場合がかな

りあったと考えられる。

沈線の連弧文；口縁部文様帯の下方、胴部との境に横に施す例が多い。文様体の中に入って大きく連続する場合もある。同じモチーフが捺糸圧痕文でもみられる。第2群土器(大木7b)の特徴のひとつとみなすことができる。

「し」の字状沈線文；頸部から胴部にかけて、懸垂しながら末尾で「し」字状に曲がっているもので、長いものと短いものがある。第2群2類土器に顕著であり、小幅の連弧文と併うことが多いが、単独でも使われる。

第2群土器1類と2類の文様上の関連；どちらの分類にあたって、指標としたのは大きな山形突起を4ケもつ一群の深鉢形土器である。捺糸圧痕文と沈線文という技法的なちがいがから文様単位、形状に差があるものの、共通のモチーフがみられ、器形も似ており、ほぼ同時期にあったと推定される。層位的にも同伴の頻度が高い。ただ捺糸圧痕文と沈線文の両方施した土器が少ないことは、同時期内の流行とって片づけることはできない点である。文様帯を比較すると1類は口縁部に集中し、2類は胴部へ広がる傾向を示している。

第2群土器と第3群土器との文様上の関連；隆起線文の多用化が第3群土器のひとつの特徴とみられる。細い隆起線文による区画文や小波状文、渦巻文は、第2群1類dや第2群c、d、第2群3類b、cとのつながりを示している。第3群4類の、口縁部が長楕円状になめらかな隆起線で区画されているものは、第2群3類cと結びつく。第3群土器の中に残っている縦の捺糸圧痕列は、第2群1類からひきつづいているものであろう。渦巻状の突起や文様も第2群3類cをはじめ、2群土器の中にその兆候が認められる。

第2群4類；刺突しか施されていないものと貼付だけのものをこの類とした。他のいずれかのグループに所属するものであろうが、確定できなかった土器群である。

第3群土器と第4群土器；第3群(大木8a)と第4群(大木8b)は、主に渦巻文の配置や隆起線の調整の有無の違いと思われるが、明確に区別できる土器は、群といえるほど出土しなかった。ただ第3群土器と比較し、より調整が進んでいると判断したものを4群としたものである。渦巻文のそばにつけられた「フ」字状の棘をもつものは、2点だけだった。

地文の種類；いずれの土器群にも単節斜縄文が圧倒的で、L-RとR-Lの比率は6：1でL-Rが多い。無節斜縄文や羽状縄文は少なく、第3群土器にはほとんど見られない。非常にまれであるが、複節斜縄文もある。無文のものは第2群土器の浅鉢に多く、ミガキが加えられ光沢をもったものもある。

<各土器群の器形について>

深鉢形土器の中で、大きな山形突起を4ケもつものは、第2群土器(大木7b)としてとらえ、キャリパー形(G₁・G₂)は第3群土器(大木8a)の指標とした。しかし器形を観察する場合、復

元可能土器に限定され、しかも器形における屈曲や湾曲の程度が微妙に異なり、判別困難なものがあり、結局文様表現に重点を置いた分類になった作業上のいきさつがある。従って器形を重視する観点からすれば、第2群土器の中の完全なキャリパー型は大木8 a であるとしても可能であろうが、文様の施文法からの分類であり、それはあえてしなかった。いずれにしろ第2群土器としたものの中には、キャリパー形 (G₁・G₂) がかなり含まれている。

第1～第2群土器にかけて多いのは、口縁直上形のA₁、A₂、外傾するC₂、口縁が内湾ぎみのF、G₁の深鉢と、H₁、H₂の浅鉢である。とくにFやG₁は第2群1類bとd、第2群2類bとdが多数を占める。又、IとJの浅鉢は、第2群1類b、dと3類aに見られる。

第3群土器では、G₁、G₂、Eの深鉢、Kの浅鉢が一般的である。各土器群を通して少ないのは胴部に張りを強張したD₁、D₂の深鉢である。

< 土と色調について >

素地土に含まれている鉱物は、石英粒、金雲母、白色粒子（長石類）、黒色粒子（角セン石輝石）、赤色粒子、小礫と観察されたが、石英粒と金雲母以外は、砂粒として一括して記録した。ただ粒子の荒い胎土のものと細かいものは区別した。金雲母は意識的に混入されたものでなく、粘土や砂粒を採集する際の混入とみられる。本遺跡の土器は磨滅や風化が著しく、表面からは焼成の良し悪しの判別困難なものが多い。色調は、灰白色から黄褐色、褐色、赤褐色、暗褐色とバラエティーに富むが、褐色が一般的である。

< 他の遺跡との比較及び編年上の位置づけ >

数量的に多く出土している遺跡の報告書類で入手できたものについて比較してみた。

第1群1類＝五領が台系、大館Ⅲ a 5類

〃 2類＝天神ヶ丘3群3類、大館Ⅲ a 群3

〃 4類＝長根貝塚Ⅲ群、大館Ⅲ a 2類

第2群1類a＝天神ヶ丘4群2類、大館Ⅲ a 群9類、Ⅲ b 群5類、繫七類、高谷野原1類C

〃 1類b＝天神ヶ丘4群2類、大館Ⅲ a 群9類、繫七類、高谷野原1類C、3類A

〃 1類c＝大館Ⅲ a 群3類、高谷野原2類A

〃 1類d＝天神ヶ丘4群2類c、d、大館Ⅲ b 群3類、高谷野原3類A、4類

〃 2類a＝大館Ⅲ b 群5類、高谷野原1類A

〃 2類b＝大館Ⅲ b 群4類、5類、大陽台2群2類、高谷野原1類B、5類、6類

〃 2類c＝天神ヶ丘4群1類、高谷野原2類B

〃 2類d＝大館Ⅲ b 群3類、高谷野原6類

〃 3類b＝天神ヶ丘4群3類、大館Ⅲ b 群2類、大陽台2群3類、繫四類

第3群1類＝長者原1群、天神ヶ丘5群、大館Ⅲ c 群2類、繫三類、五類

第3群2類=長者原1群

〃 3類=長者原1群、大館Ⅲc群2類、3類、大陽台2群4類、繫六類

第4群 =長者原2群、大館Ⅲc群4類、大陽台2群5～9類、繫九類

以上のような比較を通じて、いくつかの問題点が見いだせる。

撚糸圧痕文の多用化は、大木式文化圏においてどう展開されたのか興味ある課題である。本遺跡の分類では、単的に大木7b式期の特徴であると決めつけた観がある。1～数条の平行な撚糸圧痕文が口縁部文様帯に施されるものは、円筒式の影響であるかどうか。第2群1類aに分類したものにそれらが存在する。また第2群1類や3類の縦の撚糸圧痕列は、大木7bとしたが、第3群5類のように、大木8aにも組みこまれた理由は、渦状の突起や横S字状の貼付文などが伴って使われているからである。隆起線にそって撚糸圧痕文を施すものは、第2群1類dに分類したが、浅鉢形の中で、口縁が強く内湾し、口縁部の隆起線文が4ヶ所で渦巻状突起となるものは、器形的な面をとりいれて、第3群4類に分類し大木8aとした。

第1群1類に分類しようとしたものは、従来から五領ケ台系と称される土器群であり、第1群4類に分類したのは、糖塚式Ⅲ群、Ⅳ群或いは大木7aの標式的なものを求めるべく設定したものであるが、それぞれの出土数は、ほんのわずかであった。

第2群1類又は2類に分類された土器群におけるキャリパー形の深鉢をどのように扱うか問題点が残る。関東の阿王台式や北部の円筒上層b式など、大木7bと並行とされる土器群は、口縁に大きな突起を4ヶもつ器形で強い共通性がある。阿王台式では口縁が内湾したキャリパー形の深鉢も一般的である。分類にあたって完全なキャリパー形であっても、あえて大木7bの類に入れたのはこのためである。

第2群1類の撚糸圧痕文系土器と2類の沈線文系土器群の関わりについては、既述したようにはほぼ同期と見られる。ただ沈線文のもつ表現の自由さから、大木8a式期に至っては、それが多用されるようになったものと思われる。

隆起線にそって沈線が施されるもの（隆沈線）は、第2群2類dと第3群3類に見られる。これらを分類上分ける決め手としたものは、器形とともに、隆起線の太さである。太い隆起線をもつものは前者に、細い隆起線のもののは後者にとそれぞれ分けたが、他の報告書類を参照すると、大木7bとするか大木8aとするか、見解が分かれている微妙な部分である。

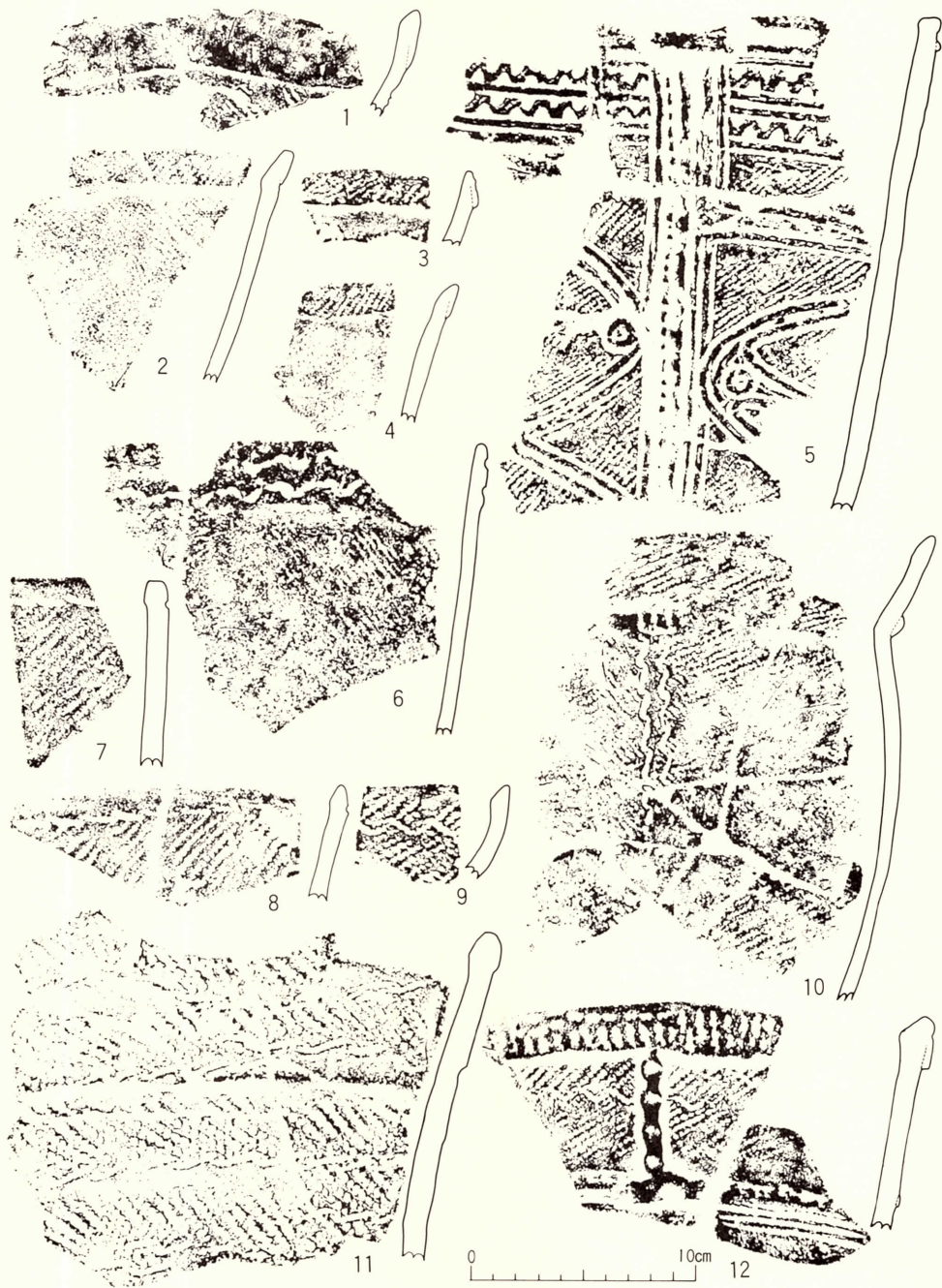
細い隆起線の使用は、縄文前期の大木4式、5式から見られるものであるが、器面に密着させた形で、直曲線、渦巻文を展開するのは大木8a、8bの特徴であろう。第2群土器の中には、その前段階として、細い隆起線による懸垂文や区画文が存在する。ミミズばれに波打つ、交互押圧された隆起線は、本遺跡では第2群3類bにみられるが、他の遺跡でも多数参見される。大きな山形突起（扇状把手）に付随して使用される場合が多く、大木7b式期に位置づけ

ているようである。その発端は定かでないが、隆起線に指頭圧痕を施す手法から派生したものであろう。

大木 8 a 式期と 8 b 式期をつなぐものについては、隆起線への加飾技法に着目して論及した丹羽茂氏の論文がある。本遺跡でも第 3 群と第 4 群を分ける基準は、「フ」字状の棘がついた剣先状渦巻文、調整の施されたなめらかな隆起線文としたが、具体的には判別が難しく、剣先状渦巻文も、わずかにみられる程度である。従って本遺跡の縄文中期土器群の下限は、大木 8 b 式期の初頭までと見るのが妥当であろう。

第15表 包含地出土土器の実測図及び拓影図と写真（図版）の有無、番号の照合

実測図 1	—	写真 5	実測図36	—	写真30	実測図 71	—	写真 70	実測図 106	—	写真 無
” 2	—	” 3	” 37	—	” 無	” 72	—	” 69	” 107	—	” 108
” 3	—	” 無	” 38	—	” 無	” 73	—	” 75	” 108	—	” 110
” 4	—	” 6	” 39	—	” 無	” 74	—	” 74	” 109	—	” 106
” 5	—	” 4	” 40	—	” 41	” 75	—	” 71	” 110	—	” 109
” 6	—	” 2	” 41	—	” 42	” 76	—	” 79	” 111	—	” 117
” 7	—	” 10	” 42	—	” 43	” 77	—	” 81	” 112	—	” 107
” 8	—	” 無	” 43	—	” 39	” 78	—	” 77	” 113	—	” 111
” 9	—	” 9	” 44	—	” 46	” 79	—	” 78	” 114	—	” 115
” 10	—	” 8	” 45	—	” 48	” 80	—	” 80	” 115	—	” 114
” 11	—	” 15	” 46	—	” 無	” 81	—	” 82	” 116	—	” 113
” 12	—	” 13	” 47	—	” 47	” 82	—	” 83	” 117	—	” 116
” 13	—	” 12	” 48	—	” 49	” 83	—	” 84	” 118	—	” 118
” 14	—	” 14	” 49	—	” 53	” 84	—	” 85	” 119	—	” 121
” 15	—	” 23	” 50	—	” 52	” 85	—	” 86	” 120	—	” 119
” 16	—	” 11	” 51	—	” 50	” 86	—	” 87	” 121	—	” 120
” 17	—	” 19	” 52	—	” 51	” 87	—	” 88	” 122	—	” 125
” 18	—	” 20	” 53	—	” 54	” 88	—	” 93	” 123	—	” 123
” 19	—	” 21	” 54	—	” 56	” 89	—	” 90	” 124	—	” 126
” 20	—	” 22	” 55	—	” 55	” 90	—	” 89	” 125	—	” 127
” 21	—	” 17	” 56	—	” 60	” 91	—	” 92	” 126	—	” 128
” 22	—	” 16	” 57	—	” 59	” 92	—	” 94	” 127	—	” 131
” 23	—	” 18	” 58	—	” 57	” 93	—	” 91	” 128	—	” 124
” 24	—	” 25	” 59	—	” 58	” 94	—	” 98	” 129	—	” 133
” 25	—	” 27	” 60	—	” 61	” 95	—	図版25の 9	” 130	—	” 132
” 26	—	” 26	” 61	—	” 64	” 96	—	写真 100	” 131	—	” 129
” 27	—	” 35	” 62	—	” 62	” 97	—	” 96	” 132	—	” 134
” 28	—	” 31	” 63	—	” 63	” 98	—	” 99	拓影図 5	—	” 1
” 29	—	” 38	” 64	—	” 66	” 99	—	” 101	” 41	—	” 24
” 30	—	” 37	” 65	—	” 65	” 100	—	” 97	” 50	—	” 28
” 31	—	” 34	” 66	—	” 67	” 101	—	” 102	” 140	—	” 68
” 32	—	” 32	” 67	—	” 無	” 102	—	” 103	実、拓なし	—	” 40
” 33	—	” 29	” 68	—	” 76	” 103	—	” 104	”	—	” 45
” 34	—	” 無	” 69	—	” 72	” 104	—	” 105	”	—	” 95
” 35	—	” 36	” 70	—	” 73	” 105	—	” 112	”	—	” 122



1～4 (第1群2類) 5 (第1群1類) 6～11 (第1群3類) 12 (第1群4類)

第37図 包含地出土土器拓影図 (1/3)



13~25 (第2群1類a) 26~27 (第2群1類b)

第38図 包含地出土土器拓影图 (1/3)